



征臺記事

上

リ 5
1923
1



門外
號 1923
卷 1-2



平井

征臺記事上



本
友
宮

征臺紀事總目録



征臺紀事總目録

第一回目錄

征臺ノ起原○日本人民殺害ヲ受ケシ事○ホルモサ蕃
 民ノ事○航客ニ暴虐ヲ加ヘタル事○亞米利加船口
 一ノ事○英國ノ所行○合衆國ヨリ兵ヲ遣リタル
 事○海軍ノ攻撃及ヒ退兵ノ事○支那人土蕃ヲ制御ス
 ル能ハサル事○土蕃ノ所行ニ擔任セサリシ事○ゼ子
 ラルルジャンドル氏ホムカ渡行ノ事○懇親ノ約束ヲ結ヒタ
 ル事○暴行ノ故ニ復シタル事○支那人ノ冷淡ナル事

第二回目錄

琉球人殺害ヲ受ケシ事○日本ト琉球ノ關係○琉球日

日本へ附屬ノ事(償補ヲ得ン為メ快捷ノ處置ヲ為セ
シ事)○支那ニ對シテ恩義アリシ事○副島ノ方策○日
本古昔ホルモヲ管轄セシ事○副島北京滞在ノ事○應
接勢力ヲ有シタルニ充全ナラサリシ事○岩倉ノ異論
○陽ニ希圖ヲ棄却シタル事

第三回目錄

秘密ナル預備○預備ヲ秘セサルヲ得サリシ事○合衆
國公使ノ最初ノ說○遠征ノ預備整頓セシ事○米人ノ
事ニ興カリタル事○東京ヨリ發程○ビシハハ氏意外
ノ議論ヲ起セシ事○希圖混乱セシ事○日本官吏断然
其方向ヲ変セサリシ事○長崎ヨリ始テ出帆シタル船
○航海ノ危難○外國公使ノ異論

第四回目錄

厦門○新タナル障碍○代理英人ノ違背○領事官ノ專
權○合衆國官吏ノ意見○ホルモサ海峡ヲ渡リタル事
○有功丸琅瑤灣ニ碇泊ノ事

第五回目錄

海岸ト始テ通信シタル事○通詞ジョンリン○琅瑤灣
○土人ト應接○土人ノ容具態度○檳榔子ヲ嚼ハ効驗
○日本ノ志意ヲ告ゲタル事

第六回目錄

一群ノ人視察ノ為メ上陸セシ事○社寮村及ニ其住民

○道傍ノ捜査 ○局地ノ光景 ○婚姻式

第七回目錄

琅瑪ノ款待 ○豚ヲ殺シタル事 ○土人ヲシテ厭惡ノ情ヲ起サシメタル事 ○社寮ノ饗宴 ○再ニ諸処ヲ巡行シタル事 ○余カ自己ノ經驗 ○探問ヲ好ム婦女等ノ聚集シタル事 ○快活ナルトモ無益ナリシ談話ノ事

第八回目錄

兵卒及ヒ糧食ノ上陸 ○兵制ノ不十分 ○上陸ノ時起リタル事件 ○住民ノ性情 ○陣營ヲ建ル最初ノ布圖 ○土人ヲ使用シタル事

第九回目錄

土人ノ挙止 ○其制スヘカラサル好奇 ○其巧計ヲ挫ク熱ニ苦シム ○火光

第十回目錄

土人ヲ傭役セシ事 ○土人ヲ処シ難キ事 ○英國炮船ノ来港 ○果敢ナル英國ノ領事 ○飽クナキ土人ノ貪欲 ○兵器ヲ以テ土人ノ抵抗セシ事 ○海陸軍士官ノ来着 ○日本人陳屋ヲホルモサニ建築スル事

第十一回目錄

新ニ陣營ヲ擇ムル ○土人ト再度ノ困難 ○擅私ナル自役兵ノ不注意ナル遠出 ○蛮族酋長ト會見 ○南ホルモ

遠出
エキスカルレヨシ

蛮族酋長ト會見 ○南ホルモ

サノ首長○友誼ノ交際ヲ確定ス○蛮民ゼ子ラルルシ
ヤンドルヲ信賴セシ事○土蕃ノ饗宴

第十二回目錄

不注意ノ進行○離隊散行ノ過罪○薩摩人ノ斷首セラ
レシ事○日本軍艦端舟ノ水夫ヲ攻撃セラレシ事○暴
雨ニ付テノ延期

第十三回目錄

乍候兵ヲ襲撃セシ事○他ノ無用心ナル遠出○日本人
兵力ヲ以テ進攻セシ事○蕃人ヲ長驅セサリシ事○疑
念ヲ被リタル村落○露宿セシ事○初テ規律アル交戦
○日本人六名蕃人十六名ノ死者

第十四回目錄

都督西郷ノ到着○新来ノ準備及ヒ援兵○支那兩軍艦
ノ来着○友誼ノ使節○礼貝ノ會見○福建總督ノ返翰
○支那政權志望ノ初報○將來統轄ノ議ハ延期セラレ
○祝砲○支那人大砲ノ取扱ニ不鍛鍊ナルヲ○外國居
間人ノ功ナキ結果○其後ノ成功○日本人ノ勉勵ト較
シタル支那ノ怠惰

第十五回目錄

日本ヨリ消息アリシ事○踈謬ナル新聞誹評○ビンハ
ハ氏ノ主張論○ビンハハ氏ノ所為実ニ或ハ当然トス
可キ真意○考察ス可キ事跡○蕃地事務全仕等ノ重大

ナル事件○總裁大隈ノ承任○總裁ノ決議○精敷ナル
審判ノ結果○大久保利通○外國人ノ抗爭無益ニ歸セ
シ事

第十六回目錄

前ノ戦争ニ於テ偶然ノ事○首長ノ死○計畧ヲ決ス○
獨立ノ自役兵○疑フ可キ軍律○海岸ニ於ケル村人ノ
性情○山間ニ牡丹人敗北シタル成果○果敢ナル通辨
者○酷烈ナル暑氣○兵卒ノ快樂

第十七回目錄

亦昔及ニ諸首長ト再度ノ應接○首長亦昔ノ挙動○南
方蕃族ノ威力ヲ過當ニ臆算シタリシ事○懇親ナル交

接ノ景况○公平ナル契約○贈物ノ交換

第十八回目錄

内地ニ入ラントスル策○着手ノ困難ナル事○土蕃ノ
兵士ヲ豫算スル事○先導者ノ報告精細ナラサル事○
諸首長ノ交際ノ景况

第十九回目錄

内地探偵ノ策○暴風暴雨○西傘ノ下ニ眠ヲ求ムル事
○瓊瑤人商賈ノ模様○話説ノ法方難髮人ノ始末○案
内者ヲ得難キ事○亞米利加船危難ノ事

第二十回目錄

臺灣島地圖ノ不^{完全}ナル事○内地ノ^{侵入}事○道
路川流ノ危険ナル事○兵卒溺死ノ事○三縱隊派^遣出ノ
事○勞カシテ進行スル事○夜眼ニテ軍陣ヲ取リシ事
○石門ニ達セシ事

第二十一回目錄

石門ノ事○五月二十二日ニ於ケル小戦争ノ再説○日
本人ノ勇猛ナル事○嚴格ニテ実効アル兵法ノ事○戦
争ヲ止メントスルヲ嫌ヒシ事○石峰ニ登ル党與ノ事
○敵兵逃走ノ事○死傷人ノ数

第二十二回目錄

石門口ヲ渡ル事○自身思ヒ出ス事○日本將校ノ思慮
深キ事○単一人ノ發明アル事○害ニ遭フ琉球人ノ墳墓
○山岳ニ拳ヲ登ル因乏ノ事○遠方ノ小戦争○恐ル可
キ障碍アル事○進行ヲ妨ケラル、事○セボードフリ
ス一枚ニテ夜ヲ明ス事○兵士ノ品行善キ事

第二十三回目錄

手近ニ安堵ノアリシ事○夜番ノ事○薩摩芋ノ供應ア
ル事○アミヤ村ノ事○内地ノ種族ノ事○牡丹及ヒ龜
仔角ヲ掠畧滅亡セシムル事○南北分隊ノ道ヲ失フテ
遍歴スル事○諸將校ノ再ニ相會スル事○山中ニ在リ
シ事○遠攻ノ結局如何ノ事○瑯瑯ニ帰陳スル事○行
歩甚々困苦ナリシ事○日本人ノ礼節アル事

第二十四回目錄

安息○結果○酋長ト第三回ノ會議○ホルモサ人ノ婚
礼○婚姻ノ儀式及ヒ酒宴ノ歡樂○陣營ニ酋長ノ来リ
シ事○亦皆其地位ヲ改メシ事

第二十五回目錄

東海岸へ航行ノ事○日進湾○上陸ノ困難ナリシ事○
懇切ナル致意○土蕃ノ脹耳○高滑土ノ酋長○野外ノ
快樂○土蕃ノ釀酒○亦皆ノ酩酊セシ事○東海岸へ布
營ノ事

第二十六回目錄

陣營ノ新築○日本ノ軍医○旧營地ノ健康ニ害アリシ

事○平安ナル生活ヲ得タル事○蕃地ノ鳥獸及ヒ虫類
○時々ノ娛樂會○西郷精撰ノ攻兵○横濱新聞紙○日
本人蕃地ヲ穿鑿セシ事○友情ヲ以テ内地ニ接ス○耕
作ノ試験ヲ企テシ事

第二十七回目錄

支那使臣ノ来島事○其使臣ニ接セシ方法○顧問ニ從
フ外国人○日本全權公使柳原北京ニ到ル事○支那始
メテ爭議ヲ起ス○上海ハ會議○支那使臣ハ背約○都
督西郷ト支那ノ使節藩下ノ會議○使臣ハ狡猾及ヒ
日本兵ノ忠直

第二十八回目錄

臺灣内地へ支那人ノ来リシ事○結局ノ會議アリシ事
○威光ヲ輝カカセシ事○其説ヲ詳カニ論セン事○談
論中言語ノ激烈ナリシ事○実証ヲ取テ論明セル事○
懇情ヲ以テ過セラレシ事○和睦ノ約條ノ結ハシテ暗
ニ知ラセシ事 支那人ノ到着アルニ付日本人ノ礼節
アリシ事○日本ノ兵士ト支那人ノ兵士ヲ比スルニ其状
相反スル事

第二十九回目錄

合衆國ノ官吏等ヨリホルモサニ在ル同人ニ手簡ヲ贈
リシ事○再ヒ警戒ヲ受ケシ米人ノ事○在厦門米因領
事ヨリ布告アリシ事○厦門ニ於テ動搖スル事○日
本人敵意ノ拳動終ニ相止ミシ事

第三十回目錄

ホルモサ海岸ノ暴風雨○逃避ノ急ナル事○已ヲ得ス
厦門ニ行ク事○市民驚慌ノ事○合衆國官吏ノ所為○
在福建總督ヨリノ書翰ノ畧○支那人大イニ米人助力
ヲ畏懼セシ事○管轄問要ノ事○官吏受付ヲ再論スル
事

第三十一回目錄

ホルモサノ近況○管所ノ形勢○勅使都督西郷ヲ慰賞
スル事○既成ノ功業ノ事○日本一手ノ勲功○航路安
穩ノ事○長崎ノ模様日本全国義氣○国民動静ノ事

第三十二回目錄

政治ノ様子○平和ノ點ニ向フ事○ゼ子ラルルジャ
ドル氏福建ニ使スル事○拘留及ヒ放免ノ事○合衆国
官吏ノ醜行○大久保職務ノ新戰場ノ事

第三十三回目錄

政治ヲ行フノ紛乱ナル事○藩爵ノ泛言ノ事○柳原北
京ニ在ル事○談判ノ遅延ニ及フ事○全権并理大臣大
久保到着ノ事○新ニ出立スル事○清人ノ真ノ地位ヲ
見出ス事○無益ナル結果ヲナセシ事

第三十四回目錄

各國公使ノ状態○ウエード氏ノ処置○日本人ハ事状ヲ

他言スルヲ好ザリシ事○仲裁ノ論○最後ノ意見○再
新ノ應接○頑固ニシテ不服ナリシ事○最後大久保ノ
演説○恭親王ノ告知○双方記名ノ約定書

第三十五回目錄

日本ノ実況○人民ノ憤怒○後軍願ヒ○日本ノ官員○外
國人ノ意見○同慶ノ情ナキ事○ウエード氏ノ仲裁セシ
論○日本ノ為ニ充分ノ結果

第三十六回目錄

大久保ノ帰京○台島ニ於テノ事業○熱病ノ災害○ロ
ンハム氏異論ノ最終○西郷ノ蕃民ニ告諭セシ書○蕃
民ノ泣別○凱陣ノ事○大隈ノ建言○外国公使再ヒ異

議ノ事○支那国ノ挙動○納貢ノ問題○ホルモサニ在
ル日本人ノ造営ヲ破却セシ事○支那兵攻撃ヲ受テ死
傷アリシ事

第三十七回目錄

蕃地事務局ノ閉鎖○後來ノ事件○日本人才能ノ證○
歐洲人ハ關係ナク又知ラザル事○各国欽差ノ習慣ノ
挙動○外国ヨリ日本ヲ制スル事○進歩ノ真ノ敵手○
日本ハ公道ヲ待ツ事

征臺紀事

第一回

征臺ノ起○日本人民殺害ヲ受ケシ事○ホルモサ蕃
民ノ事○航空ニ暴虐ヲ加ヘタル事○亞墨利加船口
トビ號ノ一條○英國人所行○合衆国ヨリ兵ヲ遣リ
タル事○海軍ノ攻撃及ヒ退兵ノ事○支那人土蕃ヲ
制御スル能ハサル事○土蕃人所行ニ擔任セサリシ
事○セキラルルジヤンドル臺灣行ノ事○懇親ノ約
束ヲ結ヒタル事○暴行ノ故ニ渡レタル事○支那人
ノ冷淡ナル事

歐羅巴人ノホルモサト稱スル島ノ東南海岸ニ日本ヨ

リ兵ノ出シタル起因ハ一千八百七十一年十二月破船
シタル琉球島人数名「牡丹」蕃民ノ領地ニ漂着シ「牡丹」人
ノ為ニ殺害セラレタル故ナリ蓋シ「牡丹」人ノ各外国
人ヲ敵視スルハ久シク人ノ恐怖シタル所ニシテ海客
始メテ其海邊ニ至リシヨリ以來「牡丹」人ト東岸ニ住シ
ニ牡丹人ニ接シタル人種トノ交際ハ一方ニ於テ奪掠
兇暴ヲ行ヒ一方ニ於テ艱難死傷ヲ受ケタルト殆ント
絶エス近時ニ於テハ風浪ノ禍ニ遭テ蕃地ニ漂着シタ
ル者ニ暴虐ヲ加ハサリシ歳ハ殆ント稀ナリ各文明国
ノ海客或ハ屠殺セラレ或ハ残酷ノ接遇ニ因テ死レタ
ル者指テ屈スルニ違アラヌ加之其近海ニ於テ踪跡ヲ
失ヒタル許多ノ船艦モ蓋シ亦不幸ニ遭ヒタリト云フ
之ニ依テ海客船商ハホルモサノ東海岸ヲ以テ東洋ノ

ノ最モ恐ルヘキ場處トナスニ至レリ其人民ノ性質兇
暴ナルハ食人国ノ名アルヲ以テ知ルヘシ蓋シ實ニ人
ヲ食フニハ非サレ氏党ヲ結テ海賊不法ヲ事トシ諸外
國人ヲ讐敵ト看做レ稍開化シタル隣國ノ支那人ヲ拒
シテ近ツクヌ他國ノ命ニ従ハス艱難ニ遭テ救助ヲ求
ムル者アルハ殘忍ニ之ヲ殺害シ以テ外國ヲ拒絶スル
ノ意ヲ表シタル人民ヲ形容レテ此名目ヲ下セシナリ
斯ル慘酷ニ遭ヒタル或ハ亞米利加人ヨリ懸タレキ者
アラシモ未タ知ルヘカラスト虽モ世人ノ聞知スル所
ニテハ屢々慘酷ヲ受ケタルハ亞米利加人ヲ以テ第一ト
ス就中實モ顯著ナルハ蓋シ「ロ」バ「號」一條ニシテ其艱
難ト隣ムヘキ終ヲ遂ケタルトニ曰テ東洋ニ於テハ今
ニ至リ之ヲ聞ク者ヲシテ竦然股栗セシム此一條ハ諸

牡丹
正
官

文
官

國ニ多少ノ感動ヲ起シ日本ノ舉動ニモ聊々關係ナシトセス
トシテ牛莊ニ赴ク途中風浪ノ為ニ漂流シホルモサ
ノ南方ニ於テ破船セリ蓋シヨルレド礁ニ衝突セシ
ナランヨ
ハント氏ハ其妻及ヒ水夫ト共ニ小舟ニ乗り移リ幸フ
シテホルモサノ東南海岸ニ到着シタリ其地ハ高滑
土人ノ領地ニシテ土人ハハント氏等ヲ見ホ直チニ
襲フテ之ヲ殺セリ独リ支那水夫一名敵ノ来ルヲ見
ト齊シク直チニ潜伏シテ逃カニ死ヲ免カレ後ニ逃
テ西岸ノ術^ナ狗^ニ達シ一五一十ヲ語りシカハ久シカラ
クシテ其報告ホルモサノ支那首府臺灣府ニ達シ英國領
事ヨリ之ヲ在北京英國公使ニ通シ英國公使ヨリボル

リンゲトム氏ニ傳ヘタリボルリンゲトム氏ハ專ラ豫
備ヲ為シテ罪ヲ正サント謀リレ間ニ英國海軍ノカ
テ^トリンゲトム氏ハ其項臺灣府ニ在リシヲ以テ軍艦
アルモラント^ト號ニ乗り屠殺ノ場ニ赴キ若シ生存スル
者アラハ之ヲ救助セント欲シ三月二十六日高滑土
土地ニ達シ生^ル者アルヤ否ヤヲ探鑿セント為シ
タレ氏土人ノ為メニ攻撃セラレテ止ムヲ得ス退去シ
傷ヲ被リタル者一名アリゴロトム氏ハ船中ヨリ破裂
丸ヲ以テ島人ヲ砲撃シ之ヲ潜伏シタル荆棘中ヨリ驅
リ出シタレ氏窮追スルノ力足ラサリレヲ以テ捨テ打
狗^ヲ廈門ニ歸レリ
一千八百六十七年四月在廈門合衆國領事^ニ子^ラル
ウルジヤンドル^ル兇暴ナル人種ノ酋長ト相會シテ將來

太
正
當

文
官

ノ安全ヲ固クセント務メタレ氏高嶺士人ルビマシンド
ルノ無事ニ上陸スルヲ肯セサリシヲ以テ果サス合衆国
公使ホルモサ人ノ所行ハ總テ支那ノ擔任スヘキ所ナ
リト為シタルニ因リ北京ノ大政府ハ懲罰ヲ行ハント
欲スル旨ヲ述ヘタレ氏西岸ノ支那官吏ハ東部ニ於テ
ハ直接ノ權無シト唱テ之ニ干涉スル能ハスト言ヘリ
一千八百六十七年六月アドミラルベル華盛頓ヨリ命
令ヲ受ケ蕃民ヲレテ文明国ノ請求ニ注意セシメシニ為
メハルトフォールド號ニ乗テ出帆シ「ワイオミン」號亦之
ニ從ヘリ然レ氏此征伐ハ勝利ヲ得ス士官水夫總計百
八十一人六月十九日上陸シテ暫時戦闘ノ後隊伍ヲ乱
シテ船ニ退キリエーテナント、コンマンドルエ、エス、マ
ツケン、ジー之ニ死セリ蓋シ地位ノ困難ナル豫メ算ス

ル所ニ過キタルカ如クナリシヲ見テ此一件ハ姑ク他
日ニ付シテ顧ミサリキ是等ハ頗フル重大ノ事ニシテ
殊ニ合衆国政府ト日本政府ト利害得失ノ同一ナルヲ
示スニ甚ク重要ナリ日本ノ始メテ事ヲ起シタル頃此
両政府利害得失ノ同一ナルニ注意セサリシニ目テ大
イニ葛藤紛擾ヲ生スルニ至レリ
合衆国諸官吏ハアドミラルベルト共ニ右事件ノ委細
ヲ述ヘタル報告書ニ此地方ヲ永ク安全ニシテ危難無
カラシムルニハ土蕃ヲ驅テ海岸ヨリ追却ケ一強國之
ヲ占有スルノ外良策無シト説キ支那人勸メテ此業ヲ
成サレムヘキヲ論セリ然レ氏支那人此業ヲ成スノ
念無ク力無キハ從前ノ經驗ニ據テ既ニ明白ニシテ具
後ノ事跡ヲ見レハ愈々顯然タリホルモサ東部ヲ管轄ス

大文官

附言ノ二部
ヲ見ヨ

ル權ハ支那人自カラ之ヲ有セスト唱ヘ現ニ支那製ノ
地畧ニ其權ノ達スル所ト達セサル処ノ間ニ線ヲ畫シ
テ境界ヲ立テタリ支那人此食人國ヲ全ク管轄外ナリ
ト言ヒシトテ記憶スルハ後ノ事件ニ甚ク重要ニシテ
日本人終ニ活潑ノ処置ヲ為シ其人民ヲシテ難ニ遭フ
ノ患ヲ免カレシメ併セテ萬國人民ノ為メニ仁愛ノ道
ヲ行ハント決意シタルハ支那人蕃地ヲ管轄外ト認メ
北京ノ官吏蕃民ノ暴行ヲ禁遏スルニ能ハスト言ヒシ
ルニ因レリ
ハルトフオールド「高滑土」人ヲシテ其罪ヲ悔悟セシ
メントシテ効ナカリシ後セシラレシルジヤンドルハ許
多ノ支那兵卒ト共ニ一千八百六十七年九月再ニ蕃地
ニ赴ケリ此旅行ハ蠻風土人情ノ測ルハカラサルノミ

ナラズ凄慘ナル旧宿ノ雲霧ニ蔽ハレタル幽僻ノ地ニ
始テ進入シタル者ニシテ其紀行ノ奇恠ナルハ小説稗
史ニ載スル所ト並モ恐ラクハ之ニ過ル者多カラサル
可シ支那ヨリ兵卒ヲ遣リタルハ蓋シ蕃民ヲ恐怖セシ
メン為メナリシカ蕃民ハ少シモ恐怖ノ色ナク高議ノ
時ニ於テ支那ノ將軍ヲ遇スル冷淡ニシテ分明ニホル
モサ人種ノ独立不羈ナルヲ表セリゼ子ラルルジヤレ
ドルハ最モ大膽ノ処置ヲ用ヒ必用ナル通詞案内者等
總カニ五六名ヲ從ヘテ武器ヲ携ヘタル許多ノ從卒ヲ
率ルタル南部連合ノ首長十八名ト會シ應對ハ全ク静
穩ニシテ稍懇親ノ情アリ當時十八族ノ首長タル博琪
篤ハ其回風ニ從テ高滑土ノ残酷ヲ復讐ノ念ヨリ出テ
タリト思ヒ乃チ辯解シテ曰ヘラク昔白人コアルユツ

文
官

人種ヲ殆ント殺シ尽シ死ヲ免レタル者總カニ三人アリテ其子孫ニ復讎ノ念ヲ傳ヘタレ氏外國人ヲ追撃スヘキ船艦無キヲ以テ其力ノ及フ方法ヲ以テ復讐ヲ為シタリト蓋シ悼其篤ノ述ル所ハ輒チ虚言妄談ト為ス可カラス其故ハ一千六百年代和蘭人ホルモサニ到リ之ヲ占拠シタル記録ハ甚タレキ不正ノ所行ニ因テ玷汚掩フヘカラサレハナリ

悼其篤ト合衆國領事トノ集會ニ因テ悼其篤ハ適當ノ約條ヲ以テ後來其海岸ニ漂着スル歐米人民ノ生命貨財ヲ敬重スヘキ約束ヲ結ヒタリ此約束ハ世人ノ関知スル所ニテハ實意之ヲ奉守シタリト然レトモ酋長ハ支那ノ將軍ト斯ル約束ヲ結フヲ欲セスレテ何事ヲモ之ト高議スルヲ肯シセス支那將軍強テ相見ントヲ要

スルニ及ヒ其女ヲ遣リ代テ之ニ答ヘレト云ク余ノ亞米利加領事ニ屈從シタルハ其國人ハルトフオンド辨ワイオニシテ辨ノ戦闘ニ於テ頗ル勇壯ヲ顯ハシタルニ因レリト蓋シ暗ニ支那人ハ斯ル勇ヲ顯ハシタルト無キヲ云フナリ

其後数年ノ間蕃民ノ良善ナル者ハ漂流人ヲ救助シ難ニ遭ヒタル外國人ノ指ニ應シテ之ヲ最近ノ支那都邑ニ報知シ以テ其實意ヲ表シタリ然レ氏悼其篤ノ管轄スル土地ノ限界ハ到底曖昧不定ニシテ直隸ノ人民ヲハ能ク統撫シタレ氏隣族野蕃ノ性情ヲ終始制抑スルヲ得カリキ十八族中自己ノ便利ニ適スル時ハ全ク悼其篤ノ權ヲ奉セサル者多ク二三ノ種族殊ニ牡丹族ハ漸々連合ヲ離レタリ蓋シ此連合ハ唯相互ノ便利ニ由

テ立テタルモノニテ別ニ嚴密ナル約束アリシコト無
シ夫ヨリ憚其篤ノ領地ノ北方ニ住スル種族漸々奪掠
戕暴ヲ行ヒ外國諸船ノ水夫種々ノ不良ナル待遇ヲ受
ケタレトモ支那人ハ措テ之ヲ問ハス下ニ記スル所ノ
挙動ヲ引起シタル事件ノ生シタル後マテ復タ之ニ注
意セシトアリヤ甚タ疑フ可シ

第二回

琉球人殺害ヲ受ケレ事○日本ト琉球トノ關係○琉
球日本ハ附屬ノ事○償補ヲ得シ爲メ快捷ノ處置ヲ
爲セレ事○支那ニ對シテ恩義アリレ事○副島ノ方
策○日本古昔ホルモサヲ管轄セシ事○副島北京滯

在ノ事○應接勢カタ有シタレハ充全ナラサレ事

○岩倉ノ異論○陽ニ諦過ヲ棄却シタル事

一千八百七十一年十二月ホルモサノ東ナル宮古諸島
中ノ漁業ヲ以テ生計ヲ営ム一大舟壯丹族(此族ハ時ト
シテハ憚其篤ノ同盟ニ加ハリ居レトモ常ニ其管轄ヲ
受クル者ニ非ス)ノ領セル海岸ノ邊ニ於テ破船シ五十
四人ノ水夫殺害ニ遭ヒ其他幾ニ死ヲ免レタル者逃レ
歸リテ之ヲ其島民ニ報知セリ此島民ハ琉球官吏ノ管
轄ニ屬セル他ノ諸島人民ノ如ク柔和靜穩ノ人民ニシ
テ古來此ノ如キ禍難ニ遭ヒタル事無ク其海岸ヲ離レ
テ遠ク洋中ニ出ルヲ敢テセサレハ其近隣ニハ唯北
方ニ自國ノ諸島アルヲ知ルノミヒレテ斯ル禍難ノ起

附言ノ部
ヲ見ヨ

附言ノ部
ヲ見ヨ

ルハキハ夢ニモ知ラサルナレハ始テ此報知ヲ聞キ
色ヲ失テ直チニ琉球ノ本島ナル首里ノ政府ニ訴ヘ其
保護ヲ請ヒタレトモ首里ノ官吏モ殆ント同様法儒ニ
レテ敢テ頼ムニ足ラザリキ蓋シ首里ノ官吏ハ二百餘
年間式貢ヲ納ル日本ノ主君ノ強大ナルニ倚頼シ自カ
ラ擔任シテ事ヲ行ヒタルナレ少ナレ琉球ノ住民ハ日本
人ト同種ナルナレ姑ク置キ其小史記ハ古来ヨリ日本
南部ノ史記ト親密ノ関係ヲ存シ琉球ノ日本ヨリ殖民
セレトモ甚ク實事ニ似タリ一千一百年代以来琉球ハ
全ク日本ノ制御ヲ受ケスト虽モ漸々日本ノ權勢ニ服
シ一千六百年代ノ初ニ至テ薩摩侯其親族ノ勇士一人
ヲ大将トシテ兵ヲ遣リ琉球ヲシテ全ク独立ノ跡ヲ絶
タレノタリ此征伐ハ大将ノ勇氣ヲ顯ハシ大ニ妙計ヲ

施シタル故ヲ以テ日本ノ史記上ニ照タタル所ナリ但
レ此時勝者ヨリ嗚咄シタル箇條ハ寛裕ニシテ毎年貢
ヲ薩摩侯ニ納レシメ及ヒ或ル交易上ノ便利ヲ回クモ
レニ過キヌ国君ハ故ノ如ク世襲ノ持權ト有名無實ノ
爵位ヲ保存シ現今ノ君ハ即チ其嫡裔ナリ人民ノ習慣
情状ハ日本人ト甚ク相似タルヲ以テ国權ノ替リタル
カ為メニ少しモ日常交際ノ不便ヲ生セヌ言語モ大同
ニシテ唯土音ノ少シク異ナル所アルニ過キヌ
薩摩人入攻ノ頃ヨリ一千八百五十三年氷師提督マ
リノ来リタル時マテ琉球国ノ記録ハ暫ク中絶シテ知
ル可カラス其間政府ニハ重大ノ事件無ク人民ハ世々
相襲テ古来ノ習慣ニ倚徒シ無事閑暇ニシテ専ラ文辞
ヲ修メ学業大ニ進ミタリト云フ琉球首府ノ官吏官

琉球

琉球

古島住民ノ報告ヲ得タル時之ヲ薩摩ニ訴ヘタルトモ
恰モ數月前ニ日本帝國ノ改制一変ニ諸侯ハ封建有土
ノ權利ヲ大政府ニ還シ薩摩ハ此一件ヲ処分スルノ力無
カリレヲ以テ琉球ヨリ直チニ使ヲ東京(江戸)ニ遣リ唯
リ此一件ノヒナラス總テ琉球附庸國ト維新帝國ノ関
係ヲ議定スヘキヲ申告セシメタリ之ニ曰テ一千八
百七十二年ノ夏琉球ノ使者到着シ其中ニハ王子并ニ
數名ノ宰相アリ日本ハ之ヲ遇スル甚ク懇切懇懇ニレ
テ後來琉球及ニ其属島ノ人民ヲ充分ニ保護スヘキ
ヲ爲シ其國ヲハ日本帝國ノ土地ト看做シ國王ハ從前
ノ爵位ヲ棄テ華族即チ世襲貴族ノ稱号ニ代ヘシメ改
治ハ故ノ如ク之ニ任セリ是レ他ノ旧諸侯ニ許ルヤ
、ル特權ナリ總テ他ノ諸州ハ縣制ニ變レタルトモ琉

附言ノ一部
ヲ見

球独リ故ノ如ク藩立タルヲ許ルサレタリト記セハ日
本近來ノ改制ヲ熟知セル者ハ琉球ノ地位如何ヲ了解
シ得可レ

ホルモサ人ノ暴行ニ自キ日本人ハ快捷ノ處置ヲ為サ
ント欲レ先ツ第一ニ確知スヘキハ此蕃民ヲ管轄シ若
クハ管轄スル權ヲ有セリト唱フル政府アリヤ否マニ
在リタリ島ノ西部ハ支那人之ニ占拠セシヲ以テ支那
人ハ東岸ヲモ統撫シテ暴行ヲ禁止スルノ責ニ任セン
モ測ルヘカラストノ念ヲ起シ速カニ支那ニ向テ問合
セタリ此時日本ハ恰モ支那政府ニ恩義ヲ施シ困難紛
擾ノ中ニ在テ秘魯船「マリア」リニム號ヨリ支那傭夫ヲ
救ヒ出シ自カラ好シテ之ヲ本国ニ送り歸レ北京官吏
ハ大ニニ其恩ニ感スルノ意ヲ述ヘタルヲ以テ此時ニ

大
改
官

当日日本極南ノ属国人民ノ害ヲ受ケタルヲ訴フル
ハ千歳渡ヲ得ヘカラサル好機會ト見エタリ然レトモ
商議ノ起ルニ至リ支那人ハ明カニ此事件ニ擔任セン
ト欲スルノ意ヲキテ表シ支那ニテ管轄スル土地ノ境
界ヲ指示シテ境界外ニ於テハ既往ノ奪掠ヲ懲罰スル
能ハス又將來ノ暴行ヲ禁止スル能ハスト明言シタ
リ
此ニ東ホルモサ地方ノ事情ニ通セルト他ノ外国人ニ
超過セシゼララルルニジヤンドル其頃厦門ヨリ本国ニ
帰ラン為ノ日本ヲ過キ東京官吏ニホルモサ事情ヲ告
ケテ参考トスルヲ得シニ因リ發程ノ期ヲ延シテ兇暴
ヲ行ヒタル地方ノ近況ヲ語レリルジヤンドルハ再々
酋長トキトクヲ訪ヒ其探偵中ニ五十四名ノ日本人ハ

支那人ト誤認セラレテ殺害セラレ支那語ヲ用フル南
西岸ノ住民モ少シク殺害ノ事ニ與ケタルヲ信スルハ
キ道理アリレトヲ知リタリキ故ニ支那ニ訴テ処分ヲ
需ムルモ益無ク土人ノ敵意ハ温和ノ言ヲ以テ鎮静ス
可カラズ而シテ支那政府ハ兵ヲ用フルノ念無クカ無
キヲ略明白ナリレテ以テ始テ日本高貴ノ官吏中ニ此
一件ハ日本自カラ之ヲ処分セント欲スルノ念ヲ生シ
事實他ノ方策ノ之ニ代フヘキ者無カリシ因ヨリ政府
ハ信ヲ失フ可カラサルヲ以テ一千八百七十一年ノ暴
行ハ措テ問ハサルノ理無ク唯其目的ヲ遂ルノ方法如
何ハ未タ決セサリレノミナリ
其頃内閣ニ於テ最モ氣力アリテ勇敢ナリシハ外務卿
副島種臣ナリ其同僚中ニハ唯牡丹族ヲ懲シ仁慈ノ道

地誌 龍

大政 官

ヲ教フルヲ以テ是レリト為ル者多カリシカ副島ハ大
膽ナル企ヲ行フノ策ヲ運ラシ日本ノ為メニ大利ヲ得
可レト信セリ若レ十分ニ成功セハ同氏ハ外務省ノ處
置ヲ顯ハシ功名ヲ千載ニ傳ヘ永ク日本ノ史乘ニ赫々
タラシム可レ又ハ頗フル精密ノ考窮ヲ為シ日本ハ嘗
テホルモサノ東ナル諸島ヲ領セシノミナラス又ホル
モサノ東良ナル部分ヲモ占據管轄セリト信セリ歴史
上ノ疑ハ未タ外国人ノ知識ノ及ハサル所ニシテ深ク
重細亞ノ記録ニ通曉セサレハ決レ難シト虽モ日本人
古昔大イニ遠地ヲ搜索シテ之ニ殖民シタルハ疑ヲ
容レズ南ノ方ハヒリツピン諸島ニ至ルマテ日本人ノ
殖民シタル跡甚ク多ク其子孫今ニ至テ連綿猶絶ニス
ホルモサ巡傍ノ諸島ハ百事日本人ト覺モ異ナル所ナ

附言ノ四部
ヲ見ヨ

クニ三百年前日本人ホルモサニ住セシ者多カリシハ
確乎タル徴アリ^レユ井ト教徒ノ記録ニ初メ和蘭人
ハホルモサノ西岸ヲ領セシ日本官吏ノ免許ヲ得テ殖
民シ之カ為メ和蘭ヨリ江戸將軍ニ貢ヲ納メシ^レテ載
ス副島及ヒ之ト同意ノ諸人ハホルモサハ千五百年代
ノ初メ日本ノ管下タリシヲ以テ今漸々之ニ占據スル
ハ一時失ヒタル土地ヲ恢復スルニ過キスト為レ東岸
ニ於テ倚賴スヘキ推カテ立ルハ廣ク世界ノ益ニシテ
日本ノ管轄ヲ以テ野民兇暴ノ改ニ代ヘハ之ヲ喜ハサ
ル者無カシ可レト主張シ自カラ道理ヲ推シテアドミ
ラルマニト同一ノ決断ニ達シ海岸ニ沿テ確乎タル權
力ヲ建設セサレハ安全ヲ得難シト決シタリ
此希圖ハ之ニ関涉セシ他ノ希圖ト合ヒ考フル時ハ殊

大
政
官

ニ廣大ノ事件ナリシト疑ナシ但シ他ノ希圖ハ後ノ事
件ニ因テ施行スルヲ要セサリシニ至リシヲ以テ茲ニ
記スルモ益ナシ此希圖ハ之ニ抗スル者甚ク多ク政府
ノ輔佐過半ハ斯ク費用多クシテ將來久シク其償ヲ得
難キ挙ヲ起スヲ可トセサリシカ副島ハ勇断ニシテ非
常ノ気力ヲ有シ其權勢當ル可カラズ頻リニ其方策ヲ
施行スルノ預備ヲ為セリ一千八百七十三年ノ春副島
ノ猶外務卿タリシ時其計策ヲ支那政府ニ告知シ支那
政府ノ所見ヲ聞カント欲スルノ首肯ニテ全權大使ト
為リ北京ニ趣キタリ其公然交際上ニ於テ功ヲ奏セシ
ハ世ニ喧傳スル所ニシテ支那帝渴見一條ノ速カニ決
シタルハ即チ副島ノ力ナリ稍私議ニ涉リタル應接ハ
今日ニ至ルマテ世ニ公告セサレトモ副島自己ノ所見

ヨリ論スレハ亦同様ノ成功アリタリ然レトモ其後世
人ノ説ニ副島ハ支那人蕃民ノ処置ニ擔任セズ日本人
ノ自カラ事ヲ処スルニ任スルトノ明言ヲ支那人ヨリ
得タレトモ唯遺憾ナルハ此詭詐狡黠ノ官吏ヨリ之ヲ
澄スル書札ヲ取ラサリシト云ヘリ是等ノ事ニ付キ文
書ノ証拠無カリレハ後ニ至テ大イニ日本ノ不利ト為
リ唯堅忍不拔ノ氣象挽マサリシヲ以テ支那人終ニ止
ムヲ得ス其言ヲ履行セリ蓋シ支那人ヨリ文書ヲ取ラ
サリレ所以ハ當時支那人蕃地ニ於テ管轄ノ權ヲ施行
セズ若シクハ管轄ノ權ヲ有セリト唱ヘサリレト世人
ノ普ク認メタル所ニシテ言語ノ證據ノ外別ニ確證ヲ
要セストセシニ由ル支那政府ニテ出板シタル官圖ニ
モ其管轄地ノ背後ハ山ニ依テ界セリト載セ蕃地ヲハ

其管轄外ト為レ此疑問ノ解釋ニ干涉シタル諸人ノ捜
査モ皆同一ノ決断ニ達シ之ヲ支那管轄外ト為サリ
レ者無クボルリシデーム氏^ロ一^ゴ号一條ノ探鑿中
蕃民ハ支那人ニ非ラス古來盜賊ヲ業トスル一種化外
ノ人民タルヲ見出シタリ斯ク明瞭ナル事ニ付キ文書
ノ證據ヲ需ムルハ蓋シ無用ニシテ且ツ拙策ニ似タリ
レヲ以テ副島ハ之ヲ取ラサリレカ後ノ商議ニ至リ支
那人之ヲ以テ異論ノ種ト為セレハ外國人ノ懲懲ニ出
タルコト今日ニ在テハ全ク疑ヲ容レサルニ至レリ
使節ノ北京滞在中ニ再々^ホルモサ人暴行ノ報告アリ
前ノ暴行ニ比スレハ稍輕シト虽モ難ニ遭ヒタル者ハ
日本ノ中國人一大州ノ住民ナリシヲ以テ日本人ノ怒
觸レレリ前ノ暴行ヨリモ更ニ切緊ナリシ即チ備中

柏島村ノ小舟^ホルモサ東南ノ海岸ニ於テ破船シ四名
ノ水夫上陸スルヤ否ヤ直チニ衣服ヲ褫^レ物品ヲ却
掠セラレ逸ニ免殺ヲ免カレタレトモ此事ニ因テ自カ
ラ政府問罪ノ決心ヲ固クセリ
副島ノ東京ニ歸リタル後奮勵尽力ニテ諸般ノ預備ヲ
為シ數月ヲ出スレテ百事整頓シ近世東方ニ於テ絶テ
無キ所ノ一大事件ヲ起スヘキ勢ナリシカ一年餘政米
諸国ヲ巡行シタル岩倉以下ノ使節歸リ米リ挽カニ數
週日ノ間ニ其局面ヲ一変セリ天皇陛下第二ノ宰相ハ
其不在中ニ成熟シタル精功ヲ企テ何等ノ方法ヲ以テ
破リ得シヤ詳カニ搜索スルハ茲ニ要ナシ蓋シ第二ノ
宰相ハ外國徑驗ノ名聞重ニ籍リ位貴ク官高キヲ以テ
動クスヘカウサレ障碍ヲ呈スルヲ得タリ之ニ依テ副

世
政
官

世
政
官

島ヲ首トシテ数名ノ宰相職ヲ辞シ新タニ内閣ヲ設ケ
テホルモヤ行充人懲罰若クハ征服ノ事ハ一時寂然ト
レテ復タ之ヲ説ク若ルヲ聞カサリキ

第三回

秘密ナル預備○預備ヲ秘セサルヲ得サリシ事○合
衆国公使ノ最初ノ説○遠征ノ預備整頓セシ事○米
人事ニ興カリタル事○東京ヨリ登程
意外ノ議論ヲ起セシ事○希箇混乱セシ事○日本官
吏断然其方向ヲ變セサリシ事○長崎ヨリ始テ出帆
シタル船○航海ノ危難○外国公使ノ異論

宮古島人ヲ殺シタル罪ヲ問ハント欲スル挙ヲ全ク棄
擲セサリシトハ一千八百七十四年ノ春ニ至ルマテ世
人之ヲ知ラサリレカ實ハ初ヨリ絶ニス預備ヲ為シ以
前ニ比スレハ唯緩慢ナリシノミニシテ之ヲ秘密ニセ
レハ内閣ノ便宜ニモ関係セシト虽モ首トシテ外国公
使ノ紛議ヲ恐レタルニ因レリ蓋シ外国公使ハ必スレ
モ日本ノ舉動ヲ敵視スヘシト思料セシニハ非サレト
モ日本人ハ前ノ数年間ノ經驗ニ據テ何等ノ大事ヲ企
ツルトモ外国公使ノ評論助言ヲ免レサリシトヲ知ル
カ故ナリ外国公使等常ニ日本政府ノ舉動ヲ制御セン
ト欲スルハ無心ノ傍看者ヨリ見ル時ハ之ニ過キタル
娛樂無シト虽モ日本人ハ常ニ其患トスル所ニレテ行
政官何等ノ大事業ヲ成サント欲スルトモ其期ニ臨ム

マテハ之ヲ秘セサレハ功ヲ成レ能ハサルコト明白ナリ
ニ至レリ

ホルモサ遠征ニ於テモ亦然リ蓋シ此舉ヲ衆人共ク稱
讚センコトハ少シモ危疑セサリレ畢竟此舉ハ日本一國
ノニニ非ス昔ク海濱諸國ニ関涉スル企ニシテ廣ク言
ハハ其成功ハ多年間貿易ヲ障碍レタル危難ヲ除キ極
テ狭ク見ルトモ理ニ於テ之ヲ非トスルヲ得ス政府其
人氏保護ノ為メニ必要ナル処置ヲ為スノ權利アルハ
決シテ争フヘカラス既ニ米人ニ於テモ兩様ノ方法ヲ
用ヒ同一ノ地方ニ於テ同一ノ事企ラタリ即チ初メニ
ハ兵力ヲ用ヒ終ニハ平和ノ應對ヲ為シタリ今日日本
企ハ唯其順序相反スルノミニシテ先ツ平和ノ処置ヲ
為シ事成ラサレハ兵力ヲ用ヒンコト欲ス故ニ此舉ニ抗

スル者アラントハ初ノヨリ日本人ノ算セサリレ所ナ
リ然レトモ外国人ノ紛議ヲ恐レ遠征ノ預備ニ干涉シ
タル者ノ外自國ノ官吏ニスラ秘レテ其目的ヲ告フサ
リレハ其謂ナキニ非サリキ
然レトモ一概ニ之ヲ秘スル能ハサリヤ其故ハ外国人
ノ助ケ無ケレハ大イニ不便ナルヲ以テホルモサノ事
情ニ通シタルゾ子ラルルジヤンドルヲハ既ニ雇ヒ入
レタリ蓋シレルジヤンドルノ意ニ從ヒ且ツ米人ハ口
バ号ハルトフオールド号ノ一條ヲ忘レスレテ殊ニ同病
相憐ムノ情アル可シト思ヒ米人ヲ以テ某ノ事ニ任セ
シメレト決シ合衆國ノリユエーテナント、コンマンドル
ド、ト、グラス、カツセルヲ招テ緊要ノ地位ニ居ラシメコ
モドールノ官ヲ授ケ又數年間開拓使ニ使用セラレタ

此
此
官

大
改
官

ル前ノ合衆国機関士リユートナントゼームス、ル、ワツ
ソント以テ宮障建築ノ事ヲ管セシメテ臨時ノ用ニ備
ヘ以テ日本陸軍ノコロ子ルニ命シタリカフセル氏ハ
当時横濱ニ在テ現ニ職掌ヲ奉セシラ以テ暇ヲ華威頓
府ノ海軍省ニ請ハサル可カラサリシニ依リ在日本合
衆国公使ノ協カヲ得ン為ノ希箇ノ預備トリユートナ
ント、コンマンドルカツセルヲシテ服事セシムヘキ職
掌トノ陳述レタリシニ合衆国公使ハ電報ニ記名スル
ヲ肯シ直チニ華威頓ニ電報ヲ通シ其所見ニ從ヘハ
カツセル氏ヲシテ轉シテ日本ノ職掌ヲ奉セシムルハ
合衆国日本国双方ノ利益タルヲ尚略ニ告知セシム
ハ速カニ東京官吏ノ情願ニ任ス可シトノ答ヲ得タリ
是ニ於テ參議大隈重信ヲ總裁トシゼ子ラルルジヤン

ドルヲ輔翼トシ陸軍中將西郷從道ヲ都督トシカツセ
ル氏ワツソン氏ヲ輔佐ト為シ遠征ノ預備整頓セリ
是レ一千八百七十四年三月ニシテ即チ初メニ定メ
ル出兵ノ期ニ先ツモト猶一月許ナリ夫ヨリ餘日ハ專
ラ斯ル廣大ノ挙ヲ全備スルニ缺クヘカラサリテ頭事
ヲ調理スルヲ務メタリ是ヨリ先キ政府ハ許多ノ船艦
ヲ備ヘ其大半ハ政府ノ所有ナレトモ竅大ナル一二隻
ハ外国人ヨリ雇ヒ入レタリ蓋シ日本人ハ数千ノ兵卒
ヲ載セン為メ其所有ノ船ヨリモ更ニ巨大ナル船ヲ得
ント欲シ英國汽船ヨルクレマイル号太平洋海郵便汽船
ニユートヨルク号ノ二大船ヲ雇ヘリ然レトモヨルクレ
マイル號ハ何等ノ故タルヲ解セス英國公使ノ異論ヲ
立テ之ヲ使用スルヲ拒マンテテ危疑シ大イニ之ニ倚

九
七
三

大
政
官

頼セサリシカニユール号ニ付テハ毫モ斯ル念ヲ
懐カス此船ハ巨大ニシテ且ツ百物全備セルニ因テ日
本人ノ為メニハ大イナル便利ヲ與ヘ殆ント遠征ノ成
敗ニ関セリ若シ初メヨリユール号ヲ雇ヒ入レ
スレテ預備ヲ為レタラハ假令此船無キモ大イニ不
便ヲ生セサル可シト虽モ一度雇ヒ入レテ之ニ倚頼シ
タル後ハ殆ント缺クヘカラサル勢トナレリ蓋シユ
ール号ノ契約ヲ遂ケ得サルノ事ハ夢ニタモ之ヲ
知ル者無カリキ其故ハ此契約ヲ妨クルノカヲ有セシ
ハ独リ合衆国公使ノニシレテ合衆国公使ハ既ニ遠征
ノ詳細ヲ聞知シ且ツ平生日本人ハ少シモ外国人ノ妨
害ヲ受ケス独立事ヲ行フノ權利アリトノ説ヲ主張セ
レハ頗フル人ノ知ル所ニシテ六月前始メテ日本ニ到

著セシヨリ常ニ日本ヲ保護勸奨シテ他ノ外国公使日
本政府ノ處置ヲ誘導束縛セント欲スルノ挙ニ抗スル
ヲ持論トシタレハナリ
遠征ノ船艦首府ヲ距ル凡ソ五里ナル江戸湾内ノ一港
品川ヨリ始メテ出帆シタルハ四月第二週日ナリ其頃
横濱ニ於テハ訛言風説流布シ政府ノ目的如何ヲ知ラ
スレテ妄リニ之ヲ評論シ敢テ憚ル所無カリキ横濱人
民及ニ新聞上多クハ政府何事ヲ起ストモ必ラス之ヲ
攻撃シテ或ハ嘲笑シ或ハ詈罵スルヲ常トス此時モ亦
例ノ如ク嘲笑罵詈紛起シテ官吏ノ意志ヲ詳知セス架
空ノ妄説ヲ作り出シ少シモ誠實禮節ニ背クヲ顧ヒス
横濱ニ於テハ毎ニ斯ル形况ノ時屢見ル所ナレトモ地
球上何レノ場ニモ斯ルヲアハルヲ聞カス殊ニ此時ハ傳

此
此
此

此
此
此

赤病常時ヨリ烈シク魯西亜ノ代理公使ハ魯西亜船艦
及ヒ人民ノ遠征ニ與カルヲ禁スル布告ヲ出セリ但シ
横濱ニハ一隻ノ魯船無ク魯人ノ日本全国中ニ在ル者
ハ凡ソ六人ニ過キサリレテ以テ此布告ハ有名ナルル
イムラントノ蛇ノ章ト同レ部類ニ屬セリト看做サレ
タレトモ猶煩累無シトセム之ニ依テ政府ハ書ヲ以テ
可成大ケ簡明ニ其真意ヲ説明シ之ヲ外國公使等ニ示
スヲ良策ナリト思惟シ四月中旬書ヲ外國公使等ニ贈
レリ其書初ノニハ大イニ功ヲ奏シタルカ如クナリ
キ
品川ヨリ初メニ出帆シタル中竅モ緊要ナルハ北海丸
ニシテ四月十五日ヲ以テ出帆ノ期日ト定メタリ此船
ハ事ヲ舉ルニ先ツ速カニ施行スヘキ職掌ヲ任セラレ

タルカツセル氏ヲツソシ氏ヲ載スルノ用ニ備ヘ兩氏
ハ期ニ至リ船ニ乗シタレトモ直チニ出帆セズ蓋シ遅
延猶豫ハ日本ニ於テハ奇トスルニ足ラサルヲ以テ一
時ハ之ヲ恠シム者無カリレカ数日ヲ経タル後ハ非
常ナル障碍ノ起リタルコト明白ナルニ至レリ二十日
ニ至テ北海丸終ニ出帆拔錨ノ期ニ臨テ使者船中ニ來
リ數通ノ信書ヲ贈レリ其中米國士官へ寄セタル書簡
アリタレトモ出帆ノ混雜ニテ稍久シク其手ニ落チサ
リキ此書簡ハ合衆國公使ヨリ寄スル所ニシテ遠征ニ
與ルコトヲ警戒スル激烈ノ言ヲ記セリ然レトモ何
等ノ故タルヲ辯解スルノ語ナク又ビンハム氏ハ何ニ
回テ斯ル議論ヲ吐クニ至リシマヲ知ルヘキノ辭無カ
リキ此消息ニハ答詞ヲ為スノ機無カルヘシト思料セ

此書
此書

此書
此書

附言
見ヨ

シカ宣料ランヤ日本ノ太政大臣ヨリ音信アリテ合衆
国公使ハ日本政府先ツ支那ヨリ遠征ヲ許諾スル書面
ヲ得タル後ニ非サレハ米人ヲ此後ニ使用スルヲ拒ミ
タルコトヲ報知シ北海丸ニ長崎ニ赴キ重テ命令ヲ傳
フルヲ待ツヘキコトヲ指令セリ長崎ハ多クノ船隊ノ
集會所タリレト虽モ北海丸ノ到ルヘキ地トハ遠ク相
隔リ航路ヲ轉シテ長崎ニ赴クトキハ常ニ時日ノ遅延
ト費用ノ増加ヲ起スノミナラス以前ヨリ預定シタル
着手ノ計策全ク崩解セサルヲ得ス然レトモ太政大臣
ノ命令ニ背ク能ハサルヲ以テ北海丸ハ同月二十五日
長崎ニ入港セリ

本船長崎ニ入港スルヤ否ヤ大困難ノ起リタリシコト
顯然トシテ又續テ他ノ困難ヲ生セントスル勢ナリキ

未タ二十四時ヲ出テサルニゼ子クルルジヤンドモ
ビンハム氏ヨリ議論ノ書ヲ受ケタル事ト太平洋海郵船
社中ノ代理人ニ「エーヨー」号ノ出帆ヲ猶預シ若シ
クハ止ムヘキ密令ヲ傳ヘタル事委員等ノ耳ニ達セリ
蓋シ此時ニ際シテ「エーヨー」号ノ出帆ヲ妨ケケレ
タルハ一大難事ナリキ「エーヨー」号ハ「エーヨー」號ニ付テハ或
ハ紛紜ノ生センコトヲ先見シ豫メ之ヲ備フ為ニ其後
ヲ假ラサルモ大イナル不便無カシト期シタレト
モ「エーヨー」号ニ付テハ少シモ危疑ノ念ヲ懷カサ
リシニ却テ「エーヨー」号ハ唯支那ノ開港場ニ入
ルヲ禁セラレタルニ過キス米船ニ於テハ一步ヲ進ムル
ヲ禁セラレ殊ニ郵船社中ノ代理人ハ其所行ノ原由ヲ
秘シテ人ニ語ルヘカラスト命セラレタルヲ以テ最モ

大政官

大政官

害ヲ為シ何等ノ方便ニ因テ郵船社中ノ者ハ其契約ヲ
破ルヘク説得セラレタルヤヲ知ル能ハス全ク航海ヲ
止メント欲スルノ意ナルヤ若シクハ一時之ヲ妨ケン
ト欲スルニ過キサリシマ明白ノ答ツ得サリキ日本官
吏ハ斯ル抵抗ヲ以テ鄙劣ノ処置ト為シ公明正大ノ敵
對ス為サス却テ狡黠ノ策ニ出テタルヲ賤シメリ蓋シ
日本官吏ハ此事ノ詳細ヲ知ラサリシト虽モ略何レノ
処ヨリ障碍ノ起リシヲ察知スルコト難カサリシ但
シ日本官吏ノ大イニ之ニ苦シメラレタルハ掩テ可カ
ラス其最モ良好ナル一船北海丸ハ品川ヨリ長崎ニ到
ル途中風波ノ為メニ破損シ長崎ノ港内ニ留テ一時ハ
用ヲ為サス故ニ愈ニユールク号ニ倚頼シ兵卒糧食
及ヒ百般ノ物品ヲ移載セン為メニユールク号ノ来

ルヲ待チタレトモ其曖昧不定ナルヲ以テ手下レテ
事ヲ行フ能ハス遠征ノ進路全ク壅塞シ首將ノ行事委
靡シテ振ハス其間ニカツセル氏ワツソン氏ニ委任シ
タル工事ヲ行フノ時日ハ過キ去レリ實ニ危急ノ秋ニ
シテ東京ニ於テハ既ニ詭計陰謀ノ為メニ殆ント恢復
スヘカラサル有害ノ効驗ヲ生シタリ
然レトモ幸ヒニレテ事ニ任セラレタル官吏等ハ各堅
忍不拔ニシテ容易ニ其職務ト認ムル所ヲ変スルノ徒
ニ非ス米人モ亦相互ニ同意レテ自國政府ヨリ嚴命ヲ
受クルニ非サレハ其職ヲ退カサル可シト唱ヘ煩シキ
障碍ノ為メニ信義ヲ失ハンコトヲ欲セス之ニ依テカツ
セル氏ワツソン氏ハ其職掌ヲ施行セン為メ急ニ手ニ
入ルヘキ運送船ニ乗レテ直チニ進行スルノ備ヲ為シ

七
正
官

七
正
官

初ノニハ日本ノ小軍艦ヲ用ヒントシタレトモ其用ニ
堪ヘサリシヲ以テ雇ヒ入レタル小汽船ヲ用フルニ決
セリ此船モ百物具備セサレトモ別ニ良好ノ船ヲ得ル
能ハサリシニ因リ止ムヲ得ス之ヲ用ヒ船中ニハ載物
ノ量既ニ過多ナリシカ更ニ致クヘカラサル兵卒ヲ載
セニ十七日ノ夜ニ至リ始メテ長崎ヨリ真ノ道行ヲ為
セリ

航海中ノ艱苦危難ハ蓋シ記載スルヲ要セスト虽トモ
凡ソ人ノ事ヲ為スヤ障碍ヲ避ケスレテ其義務ヲ行ハ
ント欲スル時ハ艱難幸苦ヲ侵シテ厭ハサルコトヲ表
セン為メニ之ヲ略論スルハ亦不可ナリトセス元來此
船ハ百人以上ノ人員ヲ載ス可カラサルニ今也此ニ乘
組ニタル者二百五十人ヨリ多ク且ツ既ニ糧食彈藥ヲ

重載シ其形況ハ尋常航海ノ危険ニタモ堪ハス斯ク過
多ノ人員雜沓シテ氣候ノ宜シカラサル地方ニ航スレ
ハ疾病ノ患亦少ナカラズ船中ニ在ル日本人ハ健康ニ
注意セス其習慣ノ病ヲ致シ易キヲ以テ殊ニ恐ルヘク
當、然ルノミナラス二百五十ノ人員ハ殆ント死亡ニ臨
ミ自カラ九死一生ノ地ニ在ルヲ知ラサリレコト數回
ニ及ヘリト云フモ過大ノ言ニ非ス但長崎ヨリ廈門ニ
至ルマテ天氣大抵靜穏ナリシヲ以テ幸ヒニ危難ヲ免
カレタレトモ若シ然ラサレハ殊暴私慾ノ熱心ヨリ已
ノ利害ニ與カラサル事ニ関涉シテ災禍ニ遭フ者ノ殷
鑑トナリタルコト必セリ

ビンハム氏ハ証名ノ初步ニ付キ其意見ヲ華威頓ノ外
務省ニ通シ次テ世間ニ傳播セリ茲ニ當時日本及ニ米

田官吏ノ陳述シタル實事ヲ挙テ左ニ記セン蓋シ是等ノ人ハ竊モ其時ノ實事ニ詳カナルヘキヲ以テナリ其言ニ曰ク

○ビンハム氏ハ三月ノ初メニ此ノ希苗ノ報知ヲ得タリ

○ビンハム氏ハ同月十五日リユートナント、コンマン
ドルカツセルノ遠征ニ從フ為メ暇ヲ乞フノ電報ニ記名セリ

○ビンハム氏ノ私議ハ如何ナリシニモセヨ公ニ異論ヲ述ヘタルハ現ニ遠征ノ奉ヲ始メタル後ニレテ之カ為メ全ク運動ノ方策ヲ紛乱シ意外巨費及ビ政事上ノ大イナル不便ト共ニ害ヲ生スヘキ猶豫ヲ起セリ

○ビンハム氏ハ汽船「ユート」号ノ東京ヨリ出帆

スル時少しモ之ヲ拒マス其半途ニ到リタルニ及ビ長崎ニ抑留シテ進マシメス之ニ依テ二名ノ米田官吏ト殆ント三百名ノ日本人ヲレテ艱苦ヲ嘗メ自己ノ一身ト委任セラレタル大事ヲ危殆セシメタリ

是等ノ障碍アリタレトモ(日本ノ事情ニ経練セシ人ニ非サレハ是等ノ障碍ノ甚ク重大ナルコトヲ知ル者少ナシ)日本人ハ始終希苗ヲ成シ遂ケントスル一点猶豫孤疑ノ色ヲ顯ハサス先鋒ノ船出帆シタル後久シカラスレテ「ユート」号ノ持ム可カラサルヲ知覺シ具代トセン為メ神速ニ他ノ運送船ヲ買ヒ取レリ東京ニ於テハ異議愈熾ニシテ「ゴ子」ラニル「ジヤンドル」ハ登遣使ト同行スルノ目的ヲ擲テ或ル外國公使ノ烈シキ敵意ヨリ生シタル有害ノ感動ヲ靜ムルノ助ヲ為サン

本
三
三
三

為ノ東京ニ歸ラサルヲ得サルニ至レリ諸國ノ公使ハ
カヲ尽シテ日本ヨリ其人民ノ屠殺サレタル仇ヲ報ス
ル為ノ兵ヲ出スヲ以テ支那ニ向ヒ戰ヲ起セル所行ナ
リトノ論ヲ立ント欲セリ此論ヲ支ヘ日本人ヲ責ムル
ニ万国公法ヲ破ルノ罪ヲ以テシテ之ヲ驚嚇セリト欲
シ種々議論ヲ出シタルハ今茲ニ喋々スルヲ要セス支
那政府終ニ日本ノ所行ヲ義挙ト認メタルニ因リ斯ク
巧ニ牽強附會シタル議論ハ夢幻ノ如ク消散シテ跡
ヲ存セズ此牽強附會ノ議論ハ政府ヲ嚇シテ其希圖ヲ
廢棄セレシメント欲シタル目的ヲ達セザリシト云トモ
夫レカ為ノニ無数ノ煩累ヲ生シ事業ノ成功ヲ敗ラシ
トセシコト數回ニ及ヘリ余ハ交際上ノ陰謀ノ行ハレ
タル処ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ西洋諸國ノ公使等カ日

本人ノ処置ヲ自己ノ私意執強ニ從ハシメント為レタ
ル企ヨリモ更ニ活潑新規ナル事ノ經驗ニ興カリタル
ハ余カ幸ヒナリ

第四回

廈門○新タナル障碍○代理英人ノ違背○領事官ノ
專權○合衆國官吏ノ意見
ル事○有功丸狼瑤灣ニ碇泊ノ事

有功丸ハ五月三日ノ朝廈門ニ入港シ諸士官ハ上陸ノ
後チ直チニ新タナル困難ノ前路ニ横ハリタルヲ見出
タセリ蓋シ是等ノ困難ハ東京ニ旅テ外人ノ阻碍ヲ

大
三
三

り出帆ノ遅延セシカ為メ起リシコト明白ナリキ当
時日本人ニ抵抗セシハ在支那英國官吏就中廈門領事
官ヲ以テ首トス然レトモ曩キニ品川及ヒ長岑ニ於テ
障碍ヲ為シタルニ非サレハ彼等モ事ニ干渉スルヲ得
サリレナラン是ヨリ先キ日本人ハ以前ヨリホニモサ
南部ノ事情ニ通シ略々諸種族ノ方言ヲ解シタル英國ノ
一醫師ヲ雇ヒ四月十五日ニハ支度ヲ整ヘテ日本人ノ
到ルヲ待タシメ且ツ牛馬小舟ヲ買求ムヘキ命令ヲ傳
ハ医士ハ期ニ到テ命ノ如ク之ヲ買求メタリ然ルニ廈門
ニ赴クヘキ船未タ日本ヲ出帆セサルニ四月十五日
既ニ過去リ其間ニ東京ト北京ニ在ル外國公使等ハ相
互ニ音信ヲ通シ牽強附會ノ說ヲ以テ支那首府ノ官吏
ヲ感動セリ支那官吏ヨリ英國公使ニ請求シタル所ア

リヤ否ヤハ確知スヘカラスト虽モ在廈門日本代理人
前ニ云ヘル英醫ヲ指ムハ直チニ其領事官ノ告諭ヲ受
ケ俄カニ事ニ興カシテ辭シ狼狽シテ船ニ上リ本国ニ
向テ出帆セリ其留メ置キタル託辭中ニ日本ハ支那ニ
向テ戦争ヲ布告シタリ云々ノ語アルヲ以テ考フルハ
太タシキ妄誕ヲ造リ出シタル者アリシコト明白ナリ
斯ク大膽ナル臆説ハ彼自己ノ意ヨリ起リタルニ非ス
レテ其地位能ク彼ヲ保護シテ妄言ノ後難ヲ免レシム
ヘキ人ヨリ出タルコト疑ヲ容レズ廈門ニ在ル英人ハ
實ニ此妄言ヲ信シ若シクハ佯テ信スル体ヲ為シタレ
トモ支那人ハ明カニ之ヲ信セサリシ若シ然ラサレハ
有知丸ノ廈門ニ碇泊スル二日ノ間措テ問ハサルノ理
アラシヤ然ルニ支那人ハ少シモ斯ニ処置ヲ為サズ日

大
改
書

本官吏ハ自由ニ地方官吏ト消息ヲ通シ兵卒ハ陸ニ上
リ不潔ノ街衢ヲ道遥シタレトモ支那人之ヲ厭フノ色
ヲ見ス居留ノ英人ハ支那人大イニ怒ヲ發シホルモサ
ニ船隊ヲ送リテ日本ノ舉動ヲ禁止セントスルノ備ヲ
為セリ等ノ風説ヲ為シタレ氏斯ル流言ハ其出處確乎
タラサリレヲ以テ顧慮スルニ足ラストセリ然レトモ
独リ日本人ニ干涉アリレ一箇ノ人ノシハ(前ノ英医ヲ
指ス)大イニ之カ為ニ動カサレテ倉皇退避シ買求メタ
ル牛馬材料ヲ奉テ之ヲ賣却シ其退避ヨリ生スル不便
ヲ補フノ方法ヲ言ヒ殘サ、リキ余思フニ是レ東方ニ
於テ英國人民ニ對シ英國公使領事等カ非常ノ權カヲ
有セル一ノ好キ例證ト為ス可シ蓋シ此權カハ實地ニ
其施用ヲ目撃セシ者ニ非レハ容易ニ之ヲ了解スル能

ハス人々多クハ其專恣ノ施行ニ頗從シテ疑ヲ容レサ
ルハ殆ト信ス可カラサルニ似タリ殊ニ奇シムヘキハ
英人東方ニ在テ即カラ小專制ノ下ニ立ツテ知らス斯
直白ニ説キ出サハ恐ラクハ英人之ヲ嘲笑ス可シト虽
モ虚心平氣ナル傍觀者ヨリ見ル時ハ英國ノ居留人ト
其在上ノ官吏ト意見相合ハサレハ居留人ハ自己ノ意
思行為無シト云フモ可ナリ有切丸ノ暫時厦門ニ滯留
中此實事ノ第二例アリタリ即チパツテレルト云フ
一人ノ水先キ諸港ノ案内者ト通譯トヲ兼テ有切丸ニ
隨從セント懇請シタレトモ日本人未タ之ヲ許ルサ、
リシニパツテレルソソハ強テ隨從ヲ懇請セハ年間ノ
入牢ヲ以テ罰セラルヘシト領事官ヨリ戒レメラレタ
リ是レ罪科ノ控告詮議ヲ經ス直チニ嚴命ヲ下レテ若

レ順從セサレハ重罰ヲ加ヘント脅赫シタルナリ
戦争ヲ布告シタルニ依リ余ハ支那ニ敵シテ日本ヲ
援クル者ナリト期望セラレタルヲ知ル既ニ嫌疑ヲ
受ケ且ツ謹慎スヘキ半公半私ノ警戒ヲ受ケタルヲ
以テ余ハ之ヲ顧ミサル能ハスト是レ一千八百七十
四年四月十九日ノピマンソン氏カ書簡ノ抜萃ナリ
此陳述ニ付テハ唯一言スルヲ要ス戦争ノ布告ハ密
ニ其項之ヲ出サス若クハ出サントスルノ意ナカリ
レノミナラス事實嘗テ之ヲ出セシトナシ
日本人ヲ障碍恐赫セントシタル尽力モ此時日本ノ兵
ニ將タリレ若ク少シモ感動シ能ハサルヲ見レハ實ニ
人心ヲ満足セシメタリ却説日本人ハ神速ニ事ヲ行ハ
サルハカラサリレテ以テ牛馬ヲ得ントスルノ念ハ始

ク之ヲ他日ニ延レホルモサニ旅テ上陸ノ時ニ用フル
為メ急ニ浅小ナル支那製ノ舟ヲ買收シ合衆国領事館
ニ附属シタル支那官人ノ助ニ依テ通詞人ヲ雇ヒタリ
廈門ニ常住シ并ニ偶然廈門ニ在リタル合衆国官吏ハ
此時可成丈ケ他国ノ名代人ノ如ク妄リニ敵意ヲ表セ
ス未ク日本ヲ敵視スルノ命令ヲ受ケサリシヲ以テ遠
征ノ目的ニ付キ自由ニ自己心事ヲ吐露シ就中領事官
ニビゼ、ヘンデルソン氏ハ頗フル事情ニ通曉シ日本人ノ
事業成功セハ必ラス濱海諸国ノ利益タルヲ知リ公然
之ヲ口ニ唱ヘテ隠サスヘンデルソン氏ハ其口ニ唱ヘ
タリレ説ク心ニ信シナカラ日後ビ子ラルルジマンド
ルヲ執ヘタル非常ノ処置ヲナセシ原因ハ他ノ部分ノ
如ク亦了解シ易カラサルナリ合衆国汽船「モノカレ」

号ノ士官ハ勿論米人ノホルモサ藩民ニ屠殺サレタル
事ヲ詳細ニシタルヲ以テ相憐ムノ情ヲ表シ遠征ノ人負
ニ對シテ親切敬重ヲ尽セシハ實ニ喜フヘク忘却スヘ
カラサル事ナリキ

有功丸ハ三日ノ朝厦門ニ入港シ五日ノ夕厦門ヲ發シ
テホルモサニ赴クノ準備ヲ為シ午後六時半ニ出帆シ
夜中ホルモサ海峡ヲ航セリ厦門ヲ發セシ頃ハ天氣變
セントレタレトモ幸ヒシテ復タ快晴ニ航行中ノ煩
悶不愉快ハ長寄ヨリ厦門ニ到リタル時ニ減セサリシ
ト虽モ危險ノ関ハアル海峡ハ風波穏カニシテ心ヲ安
ンシ晝間ハ大抵ホルモサノ海岸矇矓トシテ眼ニ入り
内地ノ高山ハ時々形ヲ見ハシタレトモ多クハ雲霧ニ
掩ハレタリ有功丸ハ未タ始テ住民ト音信ヲ通スヘキ

場処ニ達セサル前ニ既ニ没シ第九時琅瑤灣ニ入り遠
宜ノ碇泊所ヲ覓ムル為メニ一時間ヲ費ヤシ第十時ニ
至テ一地方ノ海岸迹傍ニ碇泊セリ蓋シ此地方ハ藩民
トハ大イニ相同レカラサル人民ノ住地タルコトヲ後
ニ見出シタレトモ當時日本人ノ心中ニハ藩民ノ住
地ト思考シ警戒怠ラス將タ此処ニ於テハ少しモ人民
ノ敵對ヲ恐レシニ非サレトモ奇異ナル形况ノ下ニ立
テ奇異ナル海上ニ在リシヲ以テ船上ニ番兵ヲ置キ其
他敵宜ノ預防ヲ為セリ船ヨリ凡ク一マイル程隔リタ
ル海岸ニ於テモ慌忙防守ノ様子ニテ熒々タル火光ノ
奔走往來シテ夜中斯ル地方ノ村落ニ有ルヘカラサル
多事ノ形状ヲ表セリ有功丸ノ中ニ在テハ未タ明カニ
四圍ノ地形ヲ見ス兵卒ハ夜ノ明クルヲ待チ且ツ頻リ

ニ新奇ノ地方ヲ望マント欲シ終夜眠ニ就ク者少ナク
唯老練ノ戦士ノミ平生ノ如ク安眠シ未熟ノ兵士ハ活
潑ナル談論ニ時刺ヲ移セリ

第五回

海岸ト始テ通信シタル事○通詞人ジヨンソン○瓊
瑤湾○土人ト應接○土人ノ容貌態度○檳榔子ヲ嚼
ム効驗○日本ノ志意ヲ告ケタル事

七日ノ朝日未夕升ラサルニ厦門ヨリ雇ヒ來リタル通
詞ノ一人ヲ選ミ東京ニ於テ受ケタル命令ニ從ヒ土人
ノ名望アル者ヲ求メテ船中ニ伴ヒ歸リ之ト高議ヲ為
サシ為メ上陸セシメタリ此一事ニ於テモ他ノ諸小事
ノ如ク日本政府ヨリ出シタル命令ハ最モ明々白々ニ
シテ歩々謹慎ヲ尽シテ慶分スルノ備ヲ為セリ日本ハ
百方術計ヲ竭シタル後止ムヲ得サルニ非サレハ謹テ

事ヲ起スヲ好マサリシハ漸々發生シタル事跡ニ就テ
明カナルヲ以テ後人之ヲ心ニ存シテ等閑ニ看過ス可
カラス
使命ヲ奉シタル通詞人ハ是マテ余カ逢過シタル支那
人ト少シモ相同シカラス第一其頭ヲ辮髮ニセス是等
ハ西人ヨリ見ル時ハ瑣屑ノ小事ナレト自國ニ住スル
支那人ニハ驚クヘキ事ナリ第二殆ント全世界ヲ一周
シ合衆國ニ住セシコト數年其戶籍ニ入り戰爭ノ時ニ
ユリ、ゼルシー州ノ兵隊ニ加テ軍ニ從ヒ全ク共同國人
怯懦ノ風ヲ脱シ沈著ニシテ英語ヲ話シ其音頗フル正
シク嘗テホルモサニ赴キタル數回ナルヲ以テ日本人
ノ事ヲ行ハント欲スル地方ノ住民ト親シク今使ヲ奉
シタル局地ノ住民ヲ視ルコト猶旧友ノ如クナリシ

通詞人歸リ來ラサリシ間ハ四邊ノ山川ヲ望テ地理ノ
概略ヲ察スルノ外為スヘキ事ナカリキ琅瑤灣ハ唯海
水ノ岸ニ突入シタル處ニシテ港トスルニハ太夕適宜
ナラス特ニ東北風東風東南風ヲ避クルノミニシテ西
ト北トハ風波ヲ防クニ由無シ其位置ハ北緯二十二度
六分西經百二十度四十二分ナリト新刺ノ海峯ニ見ユ
甲板上ヨリ望メハ海濱ニ二小河ノ口ヲ見ル可シ海岸
ハ卑下ニシテ沙多キ處數マイレアリ夫ヨリ南北共ニ
高崖峭立シ近傍ノ土地ハ頗フル耕作ヲ勤メタレト肥
沃ノ状ヲ見ス海岸ニ接シタル處ト虽モ凹凸齊シカラ
ス土地狹隘ニシテ其周圍ニハ數千尺ノ高山環繞シ草
木之ヲ掩ヒタレト大イニ繁茂セス
第六時ヲ過キ通詞ハ其本國タル支那姓名ハ英人ニ倣

本
文
三

フテ命シタルジョンソン氏ナル名ノ為メニ蔽ハレタ
リ土人ヲ伴ヒテ歸リ來レリ此土人等ハ一千八百七十
二年ゼ子ラルルジャンドルノホルモサニ到リシ時案
内者ヲ勤メタル社寮村ノ頭人ノ子及ヒ親族ナリリユ
トテナントコンマンドルカツセル氏ハ直チニ之ヲ迎
接シカツセル氏ト土人ノ老父ミヤナル者ト談話ヲ始
メ大イニ興ヲ催ホセリ但シ彼等ニ告クヘキ事ハ預メ
東京ニ於テ議定シタルヲ以テ左ノ如クニ言出セリ
曰ク日本政府ハ一千八百七十一年十二月日本人民ヲ
殺シタル「牡丹」族ヲ罰セン為メホルモサ蕃地ヘ兵ヲ送
ルコトヲ決シタリ初メ日本帝國ノ君ハ琅瑤ノ人民一
千八百六十七年合衆國領事ト締ヒタル約束ニ從ヒ若
シ米人ノ難ニ遭フ者アラハ犯人ヲ懲罰シタラシカ如

九
五
官

クニ日本人ヲ殺シタル犯人ヲ懲罰セサザルニ怒リタ
レトモ其後社寮ノ人民ハ破船ニ乗リ琉球及ノ不幸ヲ
憐ミゼネラルルルシヤンドル氏ヲ助ケ其存亡ヲ探シ
タルヲ知リ之ニ依テ彼等ヲ保護シテ我兵滞在ノ為メ
ニ恐懼セズ其寢食ヲ安シセシムヘキ命令ヲ下シタリ
ニ萬五千ノ兵卒ハ報ヲ聞テ直チニホルモサニ向ニ啟
行スルノ備ヲ整ヘタレトモ社寮ノ人民及ヒ悼其篤ノ
種族實ニ日本人ヲ援クルコトヲ保證セハ唯先鋒ノ兵
數千人ヲ率ヒ來ルヘシト土人ノ代人等ハ之ヲ聞キミ
ヤ直チニ衆ニ代テ曰ク我輩力ヲ盡シテ日本人ヲ助ケ
兵卒ノ上陸屯營等ノ便利ヲ謀ルヘシト答ヘタリ儲又
彼等ハ蕃族ノ近状ニ付テハ唯悼其篤ノ死シテ長子之
ニ代リタル事ノ外一ノ新報ヲ語ル能ハサリキ却説是

九
五
官

等ノ事ハ瞬間ニシテ終リミヤ及ヒ其同伴ノ一人ヲ雇
ヒ初メハ日本人ト彼等自己ノ人民トノ音信ヲ通シ次
テ南ホルモカ全部ノ住民ト音信ヲ通スルノ媒ト為サ
ンコトヲ言出セシニ容易ク之ヲ肯シシ應接ハ首尾能
ク終レリ蓋シ日本人ヨリ彼等ニ與ヘント約シタル給
金ノ額ハ當ニ太ク厚キノミナラス大イニ彼等ノ期望
ニ踰エタルヲ以テ之ヲ肯ニスルノ外他意無カリシナ
ラン斯ル厚遇ハ日本ニ在ル官吏ノ命シタル所ナレト
モ後來ノ例トナリ却テ不便ヲ起サンヲ恐レテ之ヲ疑
議スルニ至リタリ
土人ハ辭シ去ルニ先ツテ暫時船中ヲ逍遙シ其器具物
品ヲ見テ只管奇異ノ思ヲ為シ意ニ任セテ之ヲ點視セ
リ彼等ハ村長ノ家族ナレトモ其様体ハ詳細注意スル

ニ足ルモノ少ク衣服ハ全ク廈門ノ下等人民ニ同シ
ク潤キ上衣ヲ著シ終カニ膝下ニ達ス太キ股佩ヲ穿
チ巾ヲ以テ頭ヲ包メリ其飾ハ長キ辮髮ニ赤繩ヲ卷キ
處々ニ光明アル貨幣ヲ組入レタルト臂ニ付珠粗
糙銀環トニ過キス其口語ハ極テ輕快ト云フニ非サ
レトモ亦決シテ訥辯ナルニ非ス唇齒ハ常ニ檳榔子ヲ
嚼ムニ忙シク赤キ菓實ヲ口ニ滿テ其菓實ノ色ニ染ミ
タル唾津齧根ニ溢レ口内為メニ淡紅色ニ変セリ時ト
シテ大ナル檳榔子ヲ食フトキハ口外ニ露出シ赤色ノ
津液頬腮ニ溢フレ其容貌見ルニ堪ヘサルコトアリ斯
ク檳榔子ヲ嗜ム習慣ノ外ニ此地ノ人民ト廈門ノ支那
人ト大イニ異ナル所ナク其方言モ略々相同シ但シ支那
ノ政府ニ於テ見サル所ノ潤達不羈ノ風アリ是レ他ノ

大
支
那

大
支
那

抑制ヲ受ケス自カラ其力ニ頼テ衣食スルニ因ルコト
疑無シ其最モ父老ノ長ナルミヤノ容貌ハ他ノ等輩ヨ
リモ氣カアルヲ表シ又ミヤノ甥ハ年齢二十歳許ニシ
テ其人種中ニ於テハ群ヲ超エテ顔色美麗ニシテ長ケ
高ク身体細ク眉目清秀ナリ特リ惜ム其唇邊栴椰子ノ
色ニ深ミテ愛スヘキノ容貌ヲ損セリ
社寮ノ貴人等ハ船中ヲ點視シ畢リ家ニ歸リテ新客ノ
急ニ來訪セントスルヲ告ケ且ツ其預備ヲ為サシ為メ
再ヒ小舟ニ上リテ辭シ去レリ此時ヨリ日本兵卒ノ攀
止一変セシハ頗フル奇トス可シ日本兵卒ハ航海中少
シモ軍律ニ順從スル習慣ヲ顯ハサス坐作進退皆已ノ
便利ニ任シ其所ニ付テ特別ノ命令ヲ請ハス又之ヲ受
ケス厦門ニ於テハ恣マ、ニ上陸セント欲シテ制御ス

ヘカラス萬事其欲スル所ニ任セ少シモ之ヲ制セサリ
キ之ニ依テ日本ノ性質ヲ知ラサル者ハ日本人ニハ全
ク規律ナルモノ無シト疑ヲ起サシメタリ蓋シ日本人
ハ現ニ行フヘキ職務アラサル時ハ放縦節無シト雖モ
一旦事有ルニ當レハ默從謹慎ノ本性他ノ告戒ヲ待タ
スシテ自カラ顯出ス此時上陸ハ暫時為ス可カラサル
旨ヲ公告セシニ命ヲ奉シテ之ニ安ニシタルコト恰モ
西洋諸國ノ兵卒ニ異ナラサリキ畢竟日本人ハ大事ニ
臨メハ肅然トシテ規律毎ニ足ラサルコト無ク無事ノ
日ハ浮躁ノ本性明カニ現出ス然レトモ此役ニハ官吏
之ヲ制止セサル可カラサル程ノ甚シキニハ至ラサリ
シナリ

...

第六回

一群ノ人視察ノ為メ上陸セシ事○社寮村及ヒ其住民○近傍ノ搜查○局地ノ光景○婚姻式

第八時日本上等官吏数名ハ後日次テ本國ヨリ來著スル兵卒三千人ノ陣営ヲ建ルニ適宜ナル場所ヲ擇マン為メ附属ノ米人ト共ニ上陸セリ茲ニ又日本人ノ策ヲ整フルニ小心翼々タリシ一證アリ即チリユリテナント、コンマシトルカッセル氏ニ令ラ下シ上陸ヲ為スニハ支那政府ノ官吏異議アルヤ無キヤヲ審カニシテ若シ異議アラハ忒テ稍南ナル一點處ニ進ミ若シ此處ニテモ異議アラハ更ニ南方ノ地ヲ上陸場ト定メ猶異議

アラハ其時ハ抵抗ヲ顧ミス若シ止ムヲ得サレハカヲ
用テ上陸ヲ遂ク可シト命シタリ此最後ノ場處ハ支那
ノ管轄外タルコト明白ニシテ一點ノ疑ナキヲ以テ断
然行フヘキ命ヲ傳ヘテ毫モ猶豫セス他ノ二箇所ハ其
信偽ヲ辨セサレトモ支那人或ハ之ヲ其管轄内ト唱ヘ
シモ測ル可カラサルヲ以テ將來ノ紛紜ヲ招カンヨリ
ハ寧ロ未然ニ之ヲ避クルヲ上策トセシナリ然レトモ
支那人日本兵ノ上陸ヲ欲セサルヲ徵候無カリシヲ以
テ初志ノ如ク此地ニ上陸セリ

カプテイインカツセル氏ハ社寮ニ支那兵ノ占據スル
ヲ見出スカ或ハ支那政府ノ官吏ト見者カツセル氏
ノ社寮ニ占據スルヲ拒マハカヲ用テ是等ノ障碍ヲ
除クヲ勉メス忒テ数マイル南ナル第二ノ碇泊場ニ

赴ク可シ若シ第二ノ碇泊場ニ於テモ上陸ヲ拒マハ
第三ノ碇泊場ニ行ク可シ此處ニ於テハ案内者ノ助
ニ依リ止ムヲ得サレハカヲ用テ上陸ヲ成シ上官ノ
到着スルマテ其地位ヲ支持ス可シ

右ハ一千八百七十四年四月十三日大隈重信ヨリ
ゼ子ラルルシヤンドル氏へ寄書ノ抜萃ナリ

測量方ノ乘リタル小舟ハ一小河(河口沙ノ為メニ塞カ
リテ満潮ノ時ニ非サレハ入ル可カラス)ニ入り流ニ溯
ルコト少許ニシテシヤノ父カ支配セル村ニ達シ一群
ノ海兵ヲ指揮セル日本官吏少佐福島先ツ上陸セリ此
村ハ凡ソ十二三戸ニシテ其外形ハ斯ル場所ニ於テハ
實ニ驚クヘク家屋ハ一層ニシテ石若クハ精良ナル煉
化石ヲ以テ之ヲ築キ屋上ハ堅實ナル瓦ニテ之ヲ蓋ヒ

本
文
三

屋脊ノ下ナル壁上ニハ質素ナル彫刻ヲ以テ飾ト為シ
屋内ハ堅牢ニシテ頗フル清淨ナリ之ヲ支那海岸都府
ノ家屋ニ比スレハ百事其右ニ出ツ試ミニ一例ヲ摹ク
レハ厦門ノ市中ヲ尋ルモ建築ノ華麗便利整備ナルコ
ト社寮ノ村ニ比スヘキ家無シ社寮ノ家屋ハ大抵前堂
後堂ノ二部ヨリ成立シ其大イサハ相同シク凡ソ方ニ
十五尺其中間ニ殆ント同シ廣サノ庭アリテ之ヲ分界
スレトモ兩側ニ狹キ廊下アリテ前後相通シ屋後ニハ
別ニ小屋アリ庖厨及ヒ其他ノ用ニ供ス屋内及ヒ庭上
ニハ方形ノ大イナル煉化石若クハ石ヲ鋪キ器具什物
ハ奢侈ニ非スト虽モ堅牢ニシテ用ニ當ツ可ク殊ニ美
麗ナル椅子アリ卓子ハ甚タ多ケレトモ皆下等ノ品ナ
リ卧床ハ甚タ壯麗ナル者一二ヲ見タレトモ其餘ハ大

抵壁上ニ傍テ設ケタル架子ニ過キテ壁間ニハ多ク支
那風ノ粗野ナル繪ヲ以テ飾ト為セリ蓋シ此地ハ政治
上ニ於テ少シモ支那ノ權ヲ仰カサレトモ技術ニ於テ
ハ頗フル支那ニ化セラレタリ後堂ノ背ニ對シテ一ノ
佛堂アリ牌額偶像等ヲ置キタリ又粗野ナル武器ヲハ
特ニ之ヲ排列セリ即チ古キ火繩銃ハ十分ニ整頓シ短
キ劍ハ奇ナル木製ノ鞘ニ藏メ但シ此鞘ハ又ノ一面ノ
ミヲ蓋ヒ一面ハ全ク露出セリ其他ニ弓及ヒ銃ヲ以テ
鏃トセル矢並ニ種々ノ鎗矛アリ斯ク武器ノ流行スル
ハ縱令ヒ人民自カラ干戈ヲ好マサルトモ武器ノ用法
ヲ知ルノ缺ク可カラサルヲ表セリ始テ上陸シタル日
目前ニ出來リタル土人中一人モ武器ヲ帶ヒ戰鬥ノ用
意ヲ為サバリシ者ヲ見サリキ

家屋ノ周圍ナル欄内ニ無数ノ鶏豚ヲ蓄ヒ之ヲ魚卵米
麥黍甘薯ト共ニ日常ノ食料トシ街道ニハ數群ノ水牛
充滿セリ水牛ハ淺灰色ノ小獸ニシテ其角ハ後ニ向テ
曲リ角ノ尖端ハ恰モ鼻ト一直線ヲ為セリ蓋シ水牛ハ
此地方ニ於テ最モ有用ノ動物ニシテ總テ物ヲ牽クニ
ハ之ヲ用ヒ又時トシテハ之ニ乗ルコト恰モ余輩ノ馬
ニ乗ルカ如ク又流水ノ許ニハ鷺充滿シ其卵ヲ取テ食
料トス
始テ酋長ノ家ニ尋訪中近傍ノ人民盡ク集リ來リ少シ
モ危疑猜忌ノ念ナク頻リニ來客ヲ品評セリ上等男子
ノ衣服ハ前ニ記シタルミヤ及ヒ其同行ノ者ニ異ナラ
ズ下等ノ徒ハ短布ヲ以テ纏カニ腰邊ヲ蔽ヒ止テ醜態
ヲ顯ハササルノミ婦人ハ頭人ト同様ノ衣服ヲ著シ大

抵兩臂ニ銀環ヲ帶ヒ頭髮ハ長ク之ヲ編ミ卷クニ白繩
以テシ又剪採花ヲ飾トセシ者アリ中ニモ内山ヨリ
來リタルニ婦人ハ各美麗ナル小兒ヲ襖キ重キ金ノ耳
環及ヒ其他光輝アルモノヲツケタリ若シ口邊赤色ニ
染マサレハ容貌頗フル愛スヘキ者多カル可シ小兒ハ
甚タ多クニテ衣服ノ供給足ラサルカ如ク七八歳ニ至
ルマテハ汚垢ノ外身ニ一物ヲ著ケサル者多シ此村ニ
於テ真ノ支那様ノ婦人唯二人ヲ見タリ奇異ニ頭髮ヲ
結ヒ兩足短小ニシテ凡ソ四「イ」ニ程ナリキ
地理ヲ察シ陣營ノ場所ヲ擇マン為メ海岸ニ接シタル
一小山ニ登レリ此山ハ高サ凡ソ三百尺ニシテ近傍ヲ
下瞰ス支那人之ヲ龜山ト名ツク其麓ニ到ルニハ麥及
ヒ甘薯ヲ作リタル野ヲ經余輩ノ上陸シタル村ヨリハ

本
文
三

大イニ下等ナル二三小村ヲ過ク是等ノ村中ニハ煉化
石造ノ家ヲ見ス最上ノ住宅モ泥壁草檐ノ小屋ナリ平
地ハ稍耕作ノ開ケタル處ヲ除キ其他ハ盡ク沙石多キ
瘠土ニ似タリ「セージ、ブラシ」植物ノ名詳甚タ多クシテ
殆ント其他ノ灌木ヲ雜ヘス矮小ナル棕櫚及ヒ蘆兜樹
繁茂シテ殆ント入ル可カラサル深叢ヲ為シ其間ヲ經
過スル時米船「バルトフオル」ト號ノ如ク突然入攻スル
トモ功ヲ奏スルノ望無キヲ偶然了知セリ小徑ハ屈曲
錯乱歩々埋伏ニ便ナラサル處無ク明カニ地理ヲ知ラ
サレハ進入ス可カラズ縱令地理ニ明カナリトモ他國
ヨリ入攻スル兵卒ノ通常ノ戦法ニテハ勝ヲ制シ難シ
却說山路ハ狹隘險峻ニシテ巖石路ニ横ハリ人ヲシテ
疲勞ニ堪ヘサラシメ殊ニ暑氣極メテ酷烈ニシテ日本

九
五
官

官吏ハ未タ東京ヲ發シタル時ノ寒衣ヲ更ヘサリシヲ
以テ大イニ暑氣ニ苦シメリ米人ハ稍輕衣ヲ著シタル
ヲ以テ少シク堪ヘ易カリシナラシ然レトモ斯ル酷熱
ニ當テハ些小ノ勞逸ハ殆ント區別ヲ為シ難カリシナ
リ
龜山ノ絶頂ヨリ下瞰スレハ一月社寮方十五「マイル」許
ノ地ヲ見ル可シ社寮ノ四邊ニハ高サ平均二千尺程ノ
山脉圍繞シ恰モ米田ユタ部ノ塩湖谷ヲ圍ミタル山脉
ニ似テ小ナルモノアリ余輩カ此絶頂ニ在リシ時山下
ニ砲声ヲ聞キ注目シテ之ヲ見レハ凡ニ三十人ノ男女
列ヲ為シテ山間ヨリ平地ニ向テ進ミ各人ノ携ヘタル
武器ハ日光ニ映シ一人赤旗ヲ援テ前行セル者アリ暫
クシテ又三發ノ銃丸ヲ連放セリ余輩ハ其何事タルヲ

大
三
官

知ラス赤旗ハ嘗テゼネラルルジヤンドルト約束ヲ結
ヒタル時定メタル認識ノ符號ナリシヲ以テ蓋シ蕃族
ヨリ使者ノ來レルナラント思ヒタリシニ全ク然ラス
シテ婚姻ヲ結フノ儀式ヲ行フナリト聞キ疑團氷釋セ
リ

第七回 豚ヲ殺シタル事
○土人ヲシテ厭惡ノ
情ヲ起サシメタル事
○社寮ノ饗宴
○再ヒ諸處ヲ巡
行シタル事
○余カ自己ノ經驗
○探問ヲ好ム婦女等
ノ聚集シタル事
○快活ナレトモ無益ナリシ談話ノ
事

龜山ヨリ村ニ歸リタル後午熱ヲ避ケン為メ暫時休息
セシニミヤハ豚ヲ殺サンコトヲ言出セリ一人モ豚ヲ
食ハント欲セシ者無ク何人モ豚ヲ屠ルヲ見ルコトヲ
好マサリシト虽トモミヤノ言ハ客ヲ優待スルヨリ出
タルカ如クナリシヲ以テ余輩ハ之ヲ拒ムヲ好マス人

大
三
宮

々皆思ヘラク土人ノ始テ表シタル好意ニ背クハ忍ヒ
サル所ナリト然レトモ後ニ至リ余輩ノ掛念ハ全ク無
益ニ属セリ蓋シミヤハ好意ヲ懷キタレトモ頗フル節
儉ノ心ヲ存シ余輩別ニ臨テ價ヲ償フ時或ハ其辞セン
コトヲ憂慮セシニミヤハ少シモ猶豫セスシテ之ヲ受
ケタリ却説賓客ノ目前ニ於テ槍ヲ以テ豚ヲ殺シ又鷄
二羽ヲ射殺シ一大饗宴ヲ開クノ豫備ヲ為シ盡ク四邊
ノ人ヲ招集シ或ハ召ハサルニ自カラ來ル者アリ其混
雜言フ可カラス若シ來客巴カ饗應ノ主人タルヲ知リ
タラハ其心ニ觸レタルコト愈深カリシナラシ
備又料理割烹ノ最中ニ日本下等士官数名ハ水盤ヲ尋
テ出シ其衣服ノ過半ヲ脱シテ沐浴ヲ始メタリシカ直
チニ一人ノ通詞來リ主人ミヤノ語ヲ傳ヘテ曰クミヤ

及ヒ其家族ハ身体ヲ露出スルヲ見テ厭惡ノ情ヲ起セ
リ願ハクハ賓客我社中ノ婦女等カ情ニ逆フ行事ヲ止
メヨ且斯ル事ヲ行ハサルモ妨アルヲ知ル能ハス云々
ト之ヲ以テ社寮ノ人民ト支那人民トハ其人種相近キ
ヲ知ル可シ支那人ハ襠褌ノ中ニ在ル時ヨリ憤墓ニ入
ルマテ浴湯ノ何物タルヲ知ラス生涯清潔ノ務ヲ缺テ
意トセサル者多シト云フ然ルニ日本人ハ温湯若クハ
冷水ニ浴セサレハ一日モ過コスコト能ハサルナリ余
輩ノ中ニハミヤノ言ヲ以テ唯傲慢ヨリ出タリト看做
セシモノアリ蓋シミヤノ同輩十分ノ九ハ其身ヲ蔽フ
ニ總カニ数寸ノ布ヲ以テシ婦女ト虽モ其赤脚ヲ露出
シタル者少カラサルヲ見レハミヤノ言ハ恐ラクハホ
ルモサノ名家ナルヲ示サン為メ自カラ尊大ニセント

スルニ過キサル可シ然レトモミヤノ言或ハ信實ノ意
ヨリ出タルモ測リ難シト為シ其言ニ從テ沐浴ヲ止メ
シメ家内ノ貴女等ハ無事ニ料理ヲ為シタリ
正午ニ至リ既ニ割烹整ヒテ食物ヲ排列シ價ヲ償ヒタ
ル人ヨリハ却テ陪食シタル土人等之ヲ貪リ食ヘリ鶏
豚ハ西洋風ノ割烹法ヨリ論スレハ調理粗糙ニシテ未
タ十分ニ熟セス米ハ頗フル美味ニシテ余輩ノ食欲ヲ
充タシメタレトモ其他ノ食物ハ斯ル調理ニ慣レタル
土人等忽チ之ヲ食ヒ盡セリ夫ヨリ少頃シテ前キニ山
頂ヨリ望ミ見タル陣營ヲ築クヘキ土地ヲ更ニ檢査セ
ント欲シテ再ヒ巡行ヲ始メ浅キ河ニ泝ラシ為メ二隻
ノ「カタマラン」スヲ雇ヘリ世人或ハ「カタマラン」スノ何
物タルヲ知ラサルヘキヲ以テ勿卒之ヲ鮮明セン「カタ

マラン」ストハ十二尺程ノ細全材ヲ樹皮ニテ製シタル
繩ヲ以テ編ミ底ノ平坦ナル浅キ小船ノ如クニ造リタ
ル水運ノ具ナリ板ヲハ少シモ用ヒサルニ依リ勿論水
ノ侵入ヲ拒クノ方無ク支那小船ノ如ク舟夫ハ舟ノ首
ノ方ニ面シ楫ヲ以テ推シテ前進セシム日本及ヒ米國
官吏ハ之ニ乗シ流ニ泝ルコト一「マイル」ノ四分一ニシ
テ再ヒ徒歩シテ巡行セン為メ上陸セリ其處ハ水深ク
シテ樹陰日ヲ遮キリ余ハ最早勞動スルヲ好マス且ツ
一「マイル」ノ四分一ヲ隔テタレハ「マイ」ノ貴女等ヲシテ
厭惡ノ情ヲ起サシムルノ恐レモ無カリシヲ以テ獨リ
此ニ留リテ速カニ河水ニ浴シタリシカ豈料ラシマ水
源ヲ舂ルコト遠カラサルニ河水温暖ニシテ身ニ快カ
ラス河水ヲ出タル後忽チ睡眠ヲ催シテ堪ヘ難ク衣服

大
三
宮

ヲ半ハ穿チ両足ヲ水中ニ浸シタルマ、眠ニ就ケリ
水勢ノ喧シキニ驚キ睡ヲ覺セハ一群ノ水牛河ヲ渡リ
来リ余ヲ見テ新奇ナル動物ナリトマ思ヒケン躊躇シ
テ忖ラス其首ヲ擧ケテ角ノ尖點ハ背ヨリ生シタルカ
如ク鼻端ヲ前ニ突出シ靜カニ注目シテ看守シ居タリ
シカ余ノ突然起立スルヲ見テ鼻氣ヲ噴キ廻轉スルコ
ト數回終ニ尾ヲ直立シテ犇リ去レリ舟夫ハ余ヲ捨テ
何處ニカ去リタルヲ以テ余ハ獨リ徒然トシテ空シク
立テタルニ暫クシテ數頭ノ犬林叢中ヨリ出來リ頻リ
ニ吠エテ止マス余カ徐々ニ進シテ親切ノ情ヲ表スル
ヲ見テ却テ怯懦ノ徴ト為シ將ニ逼リ來ラントスルニ
因リ余之ヲ打タントスル勢ヲ示セシカハ又首ヲ轉シ
テ狼ノ如キ声ヲ放テ逃ケ去レリ無幾又前岸ノ灌木ヲ

排ニテ余婦人現出シ余カ佇居リシ處ヨリ少シク上ノ
方ニ淺瀬アリシカハ婦人ハ其股佩ヲ脱シテ水ヲ渡リ
中流ニ到リ始テ余ヲ見テ大ニ驚駭シタル形状恰モ前
ノ水牛ノ如ク只管余ニ注目シテ心ヲ奪ハレ足ヲ失シ
テ深水中ニ蹉跌セリ婦人ハ如何思ヒタルヤヲ知ラサ
レトモ余ヲシテ此ノ如キ形況ニ遭遇セシメハ必ラス
之ヲ羞ツ可シ余思ヘラク琅瑤ノ風習ニ從ヘハ斯ル時
ニ當テハ先ツ其衣服ヲ乾カスヲ常トス其時婦人ノ所
行ハ前キニ日本人沐浴ノ事ニ付キミマノ言ヒタル所
ト全ク相反セシヲ以テ余ハ覺ヘス失笑ヲ發セリ余何
ンソ之ヲ笑ハサルヲ得ニヤ然レトモ婦人ハ余ノ笑フ
所以ノ意ヲ知ラサリシヲ以テ怒ヲ含シテ忽チ走リ去
リシカ近傍ニ他ノ村落アリト見エ未タ五分時ヲ經サ

ルニ盛シニ妝飾シテ再ヒ出來リ爽快ナル辨舌ヲ振テ
余ト談セリ蓋シ支那語ナルコト疑無シ余ハ英語ヲ以
テ之ニ答ヘタリ斯テ婦人ハ「カタマラニ」ノ稍高キ處ニ
在リタル余カ上着ト背^{ナヨク}心^{ツキ}トヲ點視シ袋中ニ散乱シタ
ル貨幣ヲ見出シ之ヲ得テ見本ト為サント欲スルノ情
ヲ見ハシ殊ニ其小ナルモノ一枚ヲ擇ミ出セシカハ余
ハ婦人ニ之ヲ取ルモ妨無キコトヲ知ラシメタリ其時
婦人ハ感謝シ檳榔子ノ香ヲ遺シテ歸リ去レリ
此偶然ノ事ヨリ余ハ社寮河ノ澗ニ於テ許多ノ客ヲ迎
接スルニ至レリ又無幾シテ一列ノ婦女老幼貧富相交
リテ林間ヨリ出來レリ其意皆銀貨ヲ得ント欲スルニ
在リ彼等ハ少シモ憚カラステ銀ヲ乞フノ意ヲ表セ
シカハ余亦婉曲ニ之ヲ辞スルニ及ハスト思ヒ直チニ

之ヲ拒ミタリ其間ニ又一群ノ男子弓矢槍劍ヲ帶ヒテ
出來レリ其時ハ炎熱頗フル減シタルヲ以テ余ハ貨幣
ヲ入レタル背心ヲ取テ之ヲ背ニ着ケ來客ヲ迎接セン
トセシ時ニハ土人等既ニ余カ四邊ヲ圍ミ其數凡ソ二
十人許言語嘖々喧シキコト燕雀ノ如シ彼等ハ性質善
良ラシク一人毎ニ其武器ヲ余ニ示シ又余ノ武器ヲ見
ント請ヒタレトモ余ハ示スヘキ武器ヲ帶ハサリシ相
對スル凡一時間ヲ經タレトモ互ニ言語相通セス余ハ
海濱ニ召ハレタルヲ以テ別ヲ告ケテ船ニ歸レハ明日
乘組一同上陸スルノ用意ニテ船中混雜シ夜半ヲ過キ
タル後猶久シク有功丸ノ甲板上甚夕喧嚷ナリシハ長
崎出帆以來嘗テ見サリシ所ナリ

本
女
宮

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

第八回

兵卒及ヒ糧食ノ上陸○兵制ノ不十分○上陸ノ時起
リタル事件○住民ノ性情○陣營ヲ建ル最初ノ希圖
○土人ヲ使用シタル事

有功丸ニ載セ來リタル一隊ノ海兵ト糧食ノ一部ハ八
日ノ朝夙トニ上陸ヲ始メタリシカ少シモ順序規則ア
ルヲ見サリシ蓋シ日本人ハ自國古來ノ習慣ニ從テ事
ヲ處スレハ順序規則甚タ正シト虽モ外國ノ方法ニ倣
フタル事ヲ行フニハ間マ混雜限リナキコトアリ余ハ
西洋兵學ノ未タ其國ニ入ラサリシ時舊制ノ日本兵卒
ハ神速清淨ノ模範タリシコトヲ想像シ得レトモ現今

軍陣ノ成功勝利ニ必要ナル箇條ニ於テ多クノ缺典アリ
リ一千八百六十八年ノ内乱ニ日本兵卒ハ兵卒ニ最モ
重要ナル一身ノ勇餘リアルコトヲ顯ハシタレトモ屢
躁暴血氣ニ失スルノ弊アリタリ近年ハ正シキ規律ニ
從フノ意ヲ表シタレトモ未タ軍陣ノ卑事ニ慣ルハコ
ト能ハス思フニ兵卒ハ上等ノ種族ニシテ下賤ノ職掌
若シハ陣中ノ力役ニ服事スヘキ者ニ非スト云フ舊來
ノ思想未タ全ク絶エサルニ因ル百人ノ兵卒ニ付キ陣
營ヲ建テ食物ヲ調理シ溝渠ヲ鑿ツ等ノ事ヲ為サン為
メ殆ント百人ノ人夫之ニ附屬スルヲ見ルハ余輩カ軍
中節儉ノ意見ニ反シテ殆ント笑フ可シト虽トモ日本
ニ於テハ然ラス蓋シ日本人ノ外國兵制ヲ取用シタル
ハ武器ノ用法ト兵卒ノ運動トニ過キスシテ輜重ノ處

分ハ猶舊慣ヲ改メス憶フニ一千五百年代太閤ノ高麗
ヲ攻メタル時ノ法ニ從テ運輸ヲ為セリ但シ其法ハ功
用無キニ非スホルモサニ於テモ供給常ニ充分ニシテ
或ハ過多ニ失シ冗費濫用ニ近キニ至レリ運輸ノ法ハ
稍拙クシテ無益ノ費ヲ起シタレトモ大抵神速ニシテ
遅延ノ患無ク輜重局ハ頗フル氣力才智ヲ顯ハシタル
コト疑ヲ容ル可カラス唯其處分ハ兵卒ノ管理ニ於テ
博ク取用シタル新思想ト符合セス若シ日本人全ク旧
法ニ依テ事ヲ行ハバ何等ノ成跡ヲ顯ハセシヤ知ル可
カラスト虽モ少シク新タナル風習ヲ取用シタルハ敵
ヲ殺スノ術ニ長シタルノミニシテ未タ其兵卒ノ便利
健康ヲ増スノ用ヲ爲スコト甚タ少ナシ以為ラク是等
ノ効驗ハ猶後日ニ在ル可シ

有功丸ヨリ上陸ノ時ノ不規則ナリシハ他ノ上陸ニ於
テ嘗テ目撃セシコト無シ余思ヘラク此西岸ノ地ヲ擇
テ拳動ノ基礎ト為シタルハ東京ニ於テ豫メ遠征ノ畫
算ヲ定ムルニ謹慎注意ヲ尽シタル一例ト做ス可シ此
地ノ住民ハ縱令ヒ外人ニ甚タ懇切ナラサルモ敵意ヲ
表スルコト無キハ豫メ測知スル所ニシテ力ヲ以テ上
陸ヲ拒ムノ恐レ無カリキ之ニ反シテ若シ東岸ニ上陸
セシトセハ恐ラクハ其人民水濱ニ於テ兵端ヲ開ク可
シ然ル時ハ攻者戦法ニ巧ミナルトモ「ハルトフオルト」
號ノ敗衄ヲ取リシ例ヲ以テ推ストキハ日本兵モ十二
八九ハ勝利ヲ獲難カリシナラン蓋シ日本兵ハ勇ヲ奮
テ戦鬪シ一人ニテモ生存スル者アル間ハ戦ヲ止メサ
ルヘキコトハ千八百六十八年ノ戦争ヲ以テ證ト為ス

可シ然レトモ著手ノ始メニ敗北スレハ大イニ計算ヲ
齟齬セシメ不利日本人ニ落チン琅瑤ニ上陸シタルカ
為メニ得ル所ハ甚タ多ク此地ハ支那人管轄ノ權ヲ施
行スル極南ノ地ナルポ^ンリヲ去ルコト頗フル遠シ
テ支那官吏ト衝突ノ起ル恐ヲ見ス船ヨリ兵卒糧食ヲ
運搬スルニ一ノ妨碍無ク漸々兵卒ノ數ヲ増加スルニ
特間餘リ有リテ兵負ノ衆多ナルコト敵意ヲ懷ケル種
族ノ耳ニ達セハ戦ハスシテ勝ヲ得可シ一千八百六十
七年支那兵^{コアルニツ}高滑士族ヲ征セン為メ進軍シタルトキ土
人ハ支那兵ノ強大ナルヲ聞キ戦ハスシテ屈服シタル
コトアリ
若シ日本人海濱若クハ海濱ニ接シタル林叢中ニ於テ
敢死活潑ナル敵ニ逢ヒタラハ何等ノ成跡ニ至リタラ

大
三
宮

シカ余ハ之ヲ思考スルヲ好マス蓋シ結局ノ目的ヲハ
変スルコト無カル可シト虽モ其間必ラス多クノ不利
ヲ生ス可シ上陸ノ處置ハ實ニ混雜不規則ヲ極メ厦門
ニ於テ買取リタル杉板支那製ノ小舟其一隻ハ破損シタルヲ
以テ用ヒス土蕃ヨリ借受ケタル多クノ輕舟トヲ使用
セリ上陸中ノ不体裁ハ一々記載スルヲ要セスト虽モ
試ミニ其一例ヲ拳クレハ上陸中ニ事ノ起リタル時頼
ト為スヘキ「ガツトリン」砲ヲハ小舟ニ載セ此恐ルヘ
キ兵器ノ用法ヲ知ラサル者ノミヲシテ之ヲ守ラシメ
タリ幸ヒニシテ事無カリシヲ以テ妨ケ無キニ似タレ
トモ此時ニ至ルマテハ土人ノ情意未タ審カナラスシ
テ斯ル安心若クハ怠慢ヨリ何等ノ禍ヲ招カンモ測ル
可カラス日本官吏ハ昨日土人ト少シク相接シタレト

モ未タ土人ノ真ニ懇親ナルヲ恃ム可カラス其故ハ余
ノ親シク目撃セシ所ニハ非サレトモ昨日巡行中土人
等カ好意ノ兆ト判シ難キ二三ノ形状アリタリト聞ケ
リ即チ余カ社寮河ノ澁ニテ土人ト談話中其他ノ諸人
ハ數小村ヲ巡行セシニ其住民之ヲ悦ハサルノ色ヲ顯
ハシホルモサノ言語人情ニ明カナル通詞人ジヨソ
ンモ日本若シ隊ヲ離レテ獨行セハ其安全ヲ保セスト
言ヘリ余思フニ此地方ノ土人ハ未タ野蛮ノ俗ヲ脱セ
スシテ猜忌ノ念頗フル深シト虽モ外國人ニ對シテハ
一ノ旧怨無ク其性情殺伐ヲ好マサルヲ以テ外國人其
土地ニ入テ土人ト相交ルトモ敵意ヲ懷カサルコト明
白ナレハ土人少シモ之ヲ妨クルコト無カル可シ然レ
トモ若シ外人不良ノ念ヲ懷ケリト疑フトキハ全ク之

ニ及ス故ニ日本人ノ來リタルハ土人ヲ侵害スルカ為
メナリト疑ハ、彼等ヲ制御スルハ恐嚇ノ外ニ術無キ
ヲ以テ之ヲ處スル頗フル難カル可シ余ハ日本人ノ嚴
ニ土人ヲシテ猜忌ノ念ヲ生セシムヘキ事ヲ行フ勿レ
ト命シタルヲ信スレトモ斯ル命令ヲ守ルハ太々難シ
畢竟日本人ノ地位ハ頗フル困難ニシテ其處置寛ニ過
クレハ土人恩ニ狎レテ制シ難ク嚴ニ過クレハ(但シ事
實ニ於テハ嚴ニ過クルノ恐無カリキ)必ス暴ヲ以テ之
ニ報ス可シ蓋シ日本人ト此近傍ノ土人トノ間ニ眞實
ノ交誼ヲ結フハ猶許多ノ時日ヲ待タサル可ラス兵力
ノ強大ナルヲ示シテ土人ヲ壓伏スルニ至ルマテハ日
本人陣營ヲ離レテ、遠出セハ其生命ノ安全ヲ保シ難
カリシハ熟考ヲ待タスシテ明瞭ナリキ

兵卒、厨人、役夫等ハ正午十二時過キニ皆上陸シタレト
モ日没ニ至ルマテ輜重ノ運搬ハ之ニ比スレハ甚々少
ナク船中ノ貨物ヲ全ク揚陸シ終ルニハ猶數日ヲ要セ
シニ似タリ陣營ヲハ前ニ記シタル兩河ノ間ニ挾マレ
タル小メスオボタミア東西土耳其ノチグリス河ト
ユトレツ河ノ間ニ在ル國ノ
名トモ云フヘキ平地ニ定メタリ最初ノ希圖ニ從ヘハ
此平地ノ内地ニ面シタル溝渠ヲ鑿テ河水ヲ以テ界ト
セル兩側ニハ別ニ墻壁ヲ築テ海ニ達シ以テ防禦ヲ固
クセント欲セリ其全地面ハ四十「五」クヨリ稍廣ク
其中ニハ沙石多キ水濱頗フル多ク又甘薯ヲ作リタル
田畝アリ蓋シ陣營地ノ内ニ在リタル數戸ノ貧村ハ甘
薯ヲ作ルノ外別ニ他ノ業ヲ勤メサルニ似タリ此貧村
ノ家屋ハ海濱ニ接シ「ス」ク「リ」エ「ー」パ「イ」ント云フ矮小ナ

本
文
三
宮

ル樹木ニ掩ハレタリ但シ此地面ハカヲ以テ強取シク
ルニ非ラス昨日土人ト約束ヲ結ヒ相當ノ價ヲ以テ一
時之ヲ借受ケタルナリ然レトモ實ハ其價甚タ貴ク余
輩ハ既ニ土人ノ突然貪慾ヲ起スノ例ヲ目撃シタルヲ
以テ之カ為メ愈々其慾心ヲ熾ンニシ或ハ不便ヲ生スル
コトアラシク過慮セシモ謂レ無キニ非サリキ
稍、正午ヲ過キ有功丸ニ載セ來リタル十箇ノ天幕ヲ張
リ番兵ヲ配置シ其景況ポトメツク殖民ノ初ニ似タリ
海兵ハ品川發程以來始テ白キ麻衣ヲ著シテ出來リ喜
躍シテ工事ヲ始メタリ然レトモ彼等ハ溝渠ヲ鑿ツコ
トヲハ喜ハス且ツ人負不足ナリシヲ以テ一日三十「セ
ント」ノ割合ニテ土人ヲ傭フニ決セリ此傭銀ハ他方ノ
人ヨリ見ルトキハ非常ノ額ニ非サレトモ琅瑤ニ於テ

ハ古來例ナキ額ニシテ午後工事ニ服セシ者凡ソ百人
ニ至リ近傍ヨリ來リタル頭人等ニモ其人民ヲ何人ニ
テモ一日三十「セント」ニテ傭フ可シト告ケタリケレハ
頭人等ハ傭銀ノ貴キニ驚キタル状態ヲ蔽ハントシタ
レトモ自カラ其色ニ見ハレタリ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

第九回

土人ノ攀止○其制ス可カラサル好奇○其巧計ヲ挫
○熱ニ苦シム○火光

翌朝ニ至リ土人ノ攀止ハ恰モ日本人ノ來リタルヲ以
テ彼等ノ娛樂ニ供スル為メナリト思ヘルカ如ク只管
奇異ノ思ヲ為シテ傍觀シ居タリシカ終ニハ番兵ニ近
ツキ暫時施條銃ヲ借リ其用法ヲ試ミント欲スルコト
ヲ容態ヲ以テ告ケ知ラセタリ然レトモ番兵之ヲ許ル
サ、リシヲ以テ土人ヲ疑フノ故ナリト思ヒケン其携
フ所ノ銃、槍、弓、矢ヲ番兵ニ渡シテ他意ナキヲ表セント
為シタレトモ番兵ハ猶肯ンセサリシカハ土人ハ大イ

ニ怒ヲ含ミ居タリシカ忽チ天幕ノ前ニ列シタル「ガツ
トリン」砲ヲ見出シ怒念俄カニ変シテ好奇ノ心トナ
レリ喜怒哀樂ノ変シ易キハ野蛮人民ノ常ナルヲ信ス
レトモ余ハ斯ク性情ノ屢変スルヲハ嘗テ目撃セシコ
ト無シ土人ハ「ガツトリン」砲ノ精妙ナル機関ニ心ヲ
奪ハレタルヤ或ハ其光澤ノ鮮明ナルニ驚キタルヤ知
ル可カラスト雖トモ之ヲ點視セハ大イニ心目ヲ喜ハ
ス可シト思ヒタルコト疑ナク進テ之ニ近カントセシ
カハ復タ他ノ番兵ニ制止セラレテ大イニ怒ヲ發セシ
氣色ハ恰モ狂人ニ異ナラス皆其意謂ラク琅瑤谷ニ於
テ何レノ地ヲ論セス予等ノ行ヲ得サル處アラシヤ古
ヨリ嘗テ予等ノ權利ヲ妨ケシ者無シト到底番兵ノ制
止ヲ用ヒスシテ進マントセリ其時日本兵卒ノ忍耐ハ

實ニ賞讚スルニ堪ヘ勿論土人ノ強迫ニ屈セス断然之
ヲ制止セント欲シ土人等口ヲ極テ詈罵シタレトモ從
容自若トシテ少シモ怒ヲ發セル色無ク之ヲ遇スル恰
モ頑固ナル兒輩ヲ遇スルカ如クナリキ土人等ハ其望
ノ合ハサルヲ見テ少シク其場ヲ退キ集議ヲ催ホシタ
リ其中ニ頭髮ヲ短ク薙タル一男子頗ラル才機アル者
ノ如クナルガ忽チ衆人ヲ説服シ之ヲ率テ近傍ノ村落
ニ赴キ數分時ニシテ復ヒ出テ來リ各、鐵、籠ヲ手ニシ其
中一二人ハ大イナル籠ヲ携ヘタリ彼ノ頭領進ミ出テ
通詞ニ憑テ告ケテ曰ク陣營地ノ内ナル甘薯ノ田畝ヲ
有セル地主ハ余カ傍ニ在リ此者ハ日本人ニ土地ヲ用
フルヲ許ルシタレトモ甘薯ヲハ決シテ讓リ渡サス故
ニ田畝ニ入り甘薯ヲ取テ家ニ携ヘ歸ラント欲スト日

天
女
宮

本官吏之ニ答テ曰ク然ラハ其者一人進ミ來リテ甘薯
ヲ取テル可シ然レトモ南ホルモサノ人民盡ク入來ル
ヲ許ルスノ理無シト彼禿頭ノ謀士ハ之ヲ聞キ直チニ
答テ曰ク圃主ノ其作物ヲ收納セントスル時近傍ノ人
盡ク來リ助クルハ此地ノ風習ナリ此ノ如キ古來ノ風
習ヲ破ルハ人民ニ對シテ大イナル無禮ナラント之ニ
依テ日本人ハ笑テ其欲スル處ニ任シ僂テ兵卒ヲ増シ
テ「ガットリシ」砲ヲ守衛セシメタリ其時土人ハ皆大
イニ悦テ進ミ來リ甘薯ヲ掘ルコト二分時ニシテ休息
シ近ヨル可カラサル兵器ヲ望見テ戀々ノ情禁シ難ク
進テ其四邊ヲ圍繞シタルヲ以テ人或ハ台湾島中最美
ノ甘薯「ガットリシ」砲ノ下ニ生シタルカト思想セシ
ナル可シ後ニハ勢甚タ急迫ニ至リタルヲ以テ甘薯ノ

採收ヲ口實ト為スコトヲ得サル場處ハ大砲ヲ移セリ
之ニ由テ土人ハ大イニ失望シ禿頭ノ謀士ハ農具ヲ投
シ忿懣シテ歸リ去リ他ノ土人モ漸々之ニ從テ退キ今
ハ全村相助テ作物ヲ收納スル古來ノ風習ニ心ヲ留
ムル者一人モ無カリキ
日本人ハ上陸シテ新奇ノ形況ヲ目撃スル為メニ一時
活潑ノ心ヲ生シタレトモ眼前ノ情勢ハ彼等ヲシテ意
氣揚々タラシムルコト能ハサルニ似タリ蓋シ日本人
ハ本國ニ於テ平常享クル處ノ安康ヲ缺キ其不便ハ尋
常兵卒ノ受クル所ヨリ多ク既ニ暑熱ノ為メニ苦シメ
ラレ且ツ次第ニ堪フ可カラサル酷熱トナルヘキ勢ニ
シテ當ニ熱度ノ高キノミナラス人身ヲ衰弱セシメテ
病ヲ醸シ易キ性質ナリホルモサニ於テハ此時季ニ當

リ晝間ハ涼風甚タ少ナク海風ト虽トモ熱ヲ消スルニ
足ラズ熱度ノ激烈ニシテ堪フ可カラサルコトハ余カ
親シク遭遇シタル場處ノ中ニテハ紅海ヲ除クノ外此
地ニ過クル者無カラシ然レトモ幸ヒニシテ夜間ハ少
シク堪ヘ易シ元來日本人ハ本國ニ於テ頗フル炎熱ニ
慣レ薩摩及ヒ南方諸州ノ人ハ殊ニ之ヲ忍レズ而シテ
從軍ノ兵卒ハ大半南方ノ人ナリシト虽トモ此地ニ於
テハ皆酷熱ノ為メニ困苦セリ此時マテ兵卒ニ供給シ
タル天幕ハ圓錐形ノ古風ナル製ニシテ空氣ノ流通甚
タ悪シク其布ハ粗薄ニシテ太陽ノ光線ヲ遮ルニ足ラ
ズ恰モ氣候ノ酷熱ナル助ヲ為サシカ為メニ製シタル
ニ似タリ蓋シ之ヲ日本政府ニ賣リタル者(外國人ナラ
シ)非常ノ大利ヲ貪リタルコト知ル可シ

此日午後第九時琅瑯ノ東南凡ソ五六マイルノ地ニ當
リ大イニ火光ヲ發シ其勢猛烈ナルコト一時間ニシテ
漸々消滅セリ衆人意ヘラク是レ蕃族警戒ノ號火ナラ
ント後ニ此火光ハ果シテ蕃族ノ所為タルコトヲ知リ
タレトモ其目的ハ蕃族ノ巢窟ニ進入スル道路ノ草木
ヲ燒キ尽シ山頂ニ潜伏シテ敵兵ヲ銃撃スル時敵兵ヲ
シテ弾丸ヲ避クルコトヲ得サラシメンカ為メナリシ
トソ

第十四

土人ヲ傭役セシ事○土人ヲ處シ難キ事○英國砲船ノ
 来港○果敢ナル英國ノ領事○配入トナキ土人ノ貪慾
 ○兵器ヲ以テ土人ノ抵抗セシ事○海陸軍士官ノ来着
 ○日本人陣屋ヲホルモサニ建築スル事
 九日ノ朝土人九ソ四百名程琅瑯ノ諸方ヨリ来集シ官
 障ノ作事ニ服役セント言ハリ来集ノ土人ノ實ニ老幼
 婦女混交ニシテ全數ノ過半ハ相当ノ勞事ニ堪ム可カ
 ラサルニ似タレトモ日本ノ官吏ハ之レヲ分別スルヲ
 好マザル様子ニテ一同溝渠ヲ鑿ツニ從事セシメ各為
 シ能フ可キヲ尽カスベト命セリ土人ノ三分一ハ
 婦人ニシテ其内或ハ小兒ヲ脊負フ者モアリ婦人ヲ除
 キテ男子ノ四分一ハ老人病者等ニテ勞事ヲ為ス能ハ

大
 文
 官

此の頁は非常に淡く、ほとんど読み取れない。縦書きの文字が非常に薄く、背景色とほとんど区別がつかない。

大
 文
 官

ス余ハ現ニ一盲人ノ無用ニ鍊括ヲ持チ一小兒ニ導キ
カレ治事ヲ助ケントシテ却テ到ル処妨ケヲ為スモノ
ヲ見タリ土人等ハ凡ソ二時間程随分作事ヲ勉強セシ
カ午食ヲナサシカ為メ退キテ休息セリ午後二時ニ再
ヒ来リ一ノ代人ヲ以テ一日三十錢ニテハ工銀ノ甚タ
少キ旨ヲ訴ヘシ後少シノ間ヲ働ラキシカ五時ニナル
ト齊シク賃金ノ拂ヲ望ミ一同ニ喧譟ヲ始メ次テ名状
シ難キ混雜ノ景況ニ至レリ土人ハ兇暴ナル喚聲拳動
ヲ以テ嘗リ騷ハギ日本人ハ詭諭ノ益ナカリシモ之レ
ヲ宥メントシテ勉メタリキ全体土人等ハ纏メテ半日
ニ至ル工事モ為サザリシト虽モ工銀ハ多ク得ント欲
シタリシガ初メ三十錢ニテ約諾セシヲ以テ其願望ヲ
遂クル能ハザリシナリ此喧譟ハ殆ント一時間計リナ

リシガ前日見シトコロハ禿頭ナル釀害者ハ叫喊罵詈
寢モ甚シク獨り自ラ兇暴ナルヲモナラス傍人ヲ煽動
シテ兇暴ナラシメタリ此実況ヲ見ルルハ斯ル人民ニ
其助役セシムルモ實際ニ於テ無益ナルハ明白ナリ余
輩ノ聽キ馴レ又奇異ノ叫聲ヲ發シ怒情ヲ以テ変相シ
赤色ヲ帯ヒタル土人ノ面貌ヲ見ルトキハ其醜狀モ亦
甚シク總テ此景況ハ實ニ法外ナルコトニテ余輩ハ笑
ヲ恣ニ能ハサリシ然レモ若シ此時余輩地ヲ換ヘテ土
人ノ権内ニ制馭セラレシナラバ此始末ヲ以テ全ク笑
事ニ附スルヲ得ルヤ否ヤ未タ知ル可カラサルナリ土
人ノ數ハ衆多ナルヲ以テ充分抑制スルヲ得サレハ其
内多クハ惡声ヲ發シ野蕃ノ動作ヲ以テ賃金ヲ拂フ官
吏ニ附キ纏ヒシニ日本人ノ之レニ接スル一向ニ沈着

レテ屢、土人ノ恐嚇スルモ泰然トシテ動カス且ツ其暴
行ニヨウテ激怒ヲ發セザリシヲ見テ余ハ殆ト感シタ
リキ此噂聞ノ全ク鎮定セシハ日没ノ頃ナリシガ労働
ヲ為セシ者モ或ハ為シタリト詐リシ者モ皆一同ニ約
ノ賃金ヲ受取り恰カモ有徳ノ人民ガ惡徒ノ暴行ニ遭
フテ取モ甚シキ冤枉ヲ蒙リシトモ言フベキ形容ヲナ
シ悵然トシテ遂ニ恙ク散セリ余輩ノ厦門ニテ見余輩
ノ当港ニ着船ノトキ適、抜錨シタル英國ノ砲船ホル子
ツト号本日入灣シ一群ノ士官探討ヲナスタメ海濱ニ
上陸シ其中ニ在臺灣英國領事アリ此人ハ東洋ニ於テ
最モ有名ノ果敢ナル穿鑿者ニシテ如何ナル事物タリ
凡其之レヲ穿鑿スルニ當ウテ事實ノ疑ガハシキ故ヲ
以テ之レガ妄報ヲ欠漏スベキ人ニアラスト言フモ過

当ニ非サルナリ今此地ニ来リシハ臺灣府或ハ打狗ニ
アル支那ノ官吏ヘ事實ヲ報告セン為ナリト唯夫レノ
レノ目的ヲ以テ探索ヲ為スヲ要セシハ甚タ奇シム可
シト虽モ同人帰着セハ道臺必ス尋問ス可ク同人モ亦
喜ンテ聞見シ得タル所ノ寂モ有益ナル事實ヲ報スヘ
シ其極メテ詳細ニ質問スヘキカヌヘニ同氏ヲシテ日
本人ノ是マテノ舉動ト後來ノ目途ヲ充分ニ説明シ之
レヲ通知スルヲ得セシムルハ日本人ノ為ニハ大イ
ニ裨益ナル可キナリ蓋シ當時同氏ノ胸間ニモ英國ノ
官吏ハ多ク現今ノ事件ノ景况ヲ知ント欲スル意アル
可シトノ考察ハ無キカ如クナリシ不幸ニシテ同人ノ
寂モ熱心シテ知ント欲シタル事件ハ同人ノ之レヲ實
問セシ人ニモ不分明ニテ殆ト同人ト同様ニシテ實ニ

知シテ要セシ一ノ事件ハ報知ス可キモノ甚々僅少
ナリキ余ノ恐ル、所ハ之レヲ秘シテ報知セサリシト
同人ハ臆想シタラシテ事實斯ル事ハアラサリシニ
モ若シ斯ル臆想シタリシナラハ不正ノ残酷ナルモノ
ト言ハサル可ラス殊ニ同人ハ臺灣ニアル支那官吏ニ
説キ日本人ヲ蒙モ公明ノ地位ニ置レ為ノミ目的ヲ以
テ穿鑿スト確言セシテノ忠実ナルヲ以テ決テ同氏ヲ
疑フ可キノ理ナキカ故ニ斯ル臆想ハ不正ト言ハサル
ヲ得ンヤ同人ハ終日陸地ヲ徘徊シ日本ノ陳營ニ於テ
ハ見得ラル、瑣末ノ事跡丈ハ自由ニ注視スルヲ得
タリキ
却説今朝ノ事ナリシガ兵益ヲ携ヘタル蕃民ノ教群何
レモ小教ナレトモ郊野ノ諸方ニ徘徊スト本營へ報知

アリタリ而シテ營所ノ南方ニ在リシ一群近ツキ来リ
心中ニ抗敵ノ意志アルヲテ状貌ニ露ハシ就中一人リ
エテナントト云シマシドルカツセル氏ニ向ヒ銃聲ノ演
説トモ言フベキ程ノ判然理解シ易スキ動作ヲ以テ應
接シタリ其次弟ハ同氏營障ヲ作事ヲ監視シテ在リシ
ニ一召卒ニ進ミ来リ同氏ニ接近シ極メテ誤解セシメ
サル舉動ヲ為シテ其意志ヲ示スニハ琅瑤ノ此所ニテ
地ヲ鑿ツテハ外国人ノ為メニハ適宜ノ所業ナレトモ
山中ニ在テハ人ヲ断首スルハ土俗流行ノ遊戯ナレハ
若シ彼ノ地方ニ到リテハ之レヲ知ルベシト之レニ
曰テ此國ノ何レノ地方ニ於テモ土人ノ好意ヲキハ既
ニ明瞭ナリ琅瑤ノ居民スラ營所ヨリ少シク距リタル
地ニ住スル者ハ余輩ト近ク過キルトキハ常ニ銃キ眼

太
政
官

太
政
官

ヲ為シテ脅嚇セリ蓋シ其頃土人一圓ニ疑心ヲ懷キシ
カ余ハ更ニ異常ナルト思フヲ得サルナリ何ヲ以テ
土人ハ日本人ヲ猜疑セサルヲ得サルヤノ問ニ至テハ
確實ニ答フ可キ証拠ナシト虽モ唯自然ノ理ニ於テ疑
心ナキヲ免カレサルガ故ナリ日本人ハ之ヲ安堵セ
シメント欲シ種々尽力シタレトモ其始メニ當リテ忽
チ失敗シタリキ

十日ノ朝工事ヲ好マザル土人等一人代人ヲ来タレ一
日五十錢以内ニテハ服役セサルニ決シタリトノ趣キ
ヲ述ヘタリ通詞人ジョーンソン氏ノ説ニ土人急ニ富人
ト成ラント欲シテ恰モ激烈ナル熱病ニ冒カサレタル
如シ且ツ下士官等ノ何事ニモ金錢ヲ惜気ナク浪費ス
ルガ土人ノ飽クトナキ慾心ヲ助長セシメタリト余輩

ハ直チニ此不快ナル説ノ誤ヲ示サル証跡ヲ屢見タリ
余輩ノ居ル陣營ハ甘薯ノ田畝ニシテ已ニ前編ニ記シ
タル如ク持主ハ相当ノ代料ヲ以テ貸サント約諾シタ
リ今又言ケルニハ借料四千弗ナレハ則チ相当ナルベ
シト蓋シ此金高ハ臺灣ノ南部ニ始メテ殖民シタル以
来未タ嘗テ土人等ノ耳ニ觸レサルモノナルベシ又陣
營ニ接近セル村落ニ在ル泥舎ヲ倉庫ニ代用スルニハ
其持主廉價ニテ喜テ之ヲ貸ス可シト若リシ者アリ
レガ今取極メタル代料ハ六百弗ナル旨ヲ述ヘタリ土
人等此代人ヲ来タスニ少シク遲滞シ夫レガタメ殆ト
争鬭ニ至ントセリ其事實ハ日本ノ人夫黎明ニハ土人
ノ屋舎ヲ借受クヘキ談判調フベシト聞キシカハ海濱
ヨリ輜重ヲ裝載シテ此時尅ニ屋舎ニ向ヒテ輸送シタ

リシニ土人之レヲ見テ剣ヲ舞ハシテ襲来リ一條ノ街
路ヨリ人夫ヲ追却シ其街路ノ入口ヲ塞サギ闘争スベ
キ準備ヲ為シタリ日本ノ士官其所ニ到リ見レハ土人
ハ手ニ銃ヲ持シ相方此互ヒニ奮激シテ戦ヲ挑ムノ有
様ナリ時士官ハ充分ニ覚悟シ若シ土人ノタメ殺害ヲ
蒙ラサルヲ得サルトキハ更ニ猶豫モスレテ直クニ死
ヲ致スニ決シタリキト士官ハ實ニ斯ノ如ク覚悟シタ
リシヤ否ヤト言ハバ此論一定故着ナカル可シ因テ謂
フ士官揚言ニ過キタリト試ニ見ヨ真ニ死ヲ決スルノ
人ハ其死スルヲ自ラ喋々言ハザルナリ諸頑固ナル
家屋ノ持主等ハ斯ク騷擾ヲ為シタリシモ其所有物ニ
妨碍ヲ蒙リシニモ非ラサル可シ而シテ昨日ノ約定ハ
熟議セサルモノト見做シ之ヲ廢スヘシト保證シタル

ヲ以テ満足セザリシモ稍ヤク静定シタリ余特ニ満足
セザリシモノト記シタル所以ハ家屋ニ入ルヲ輟メタ
ルハ實際土人ノ願フ所ニ非スト信スレハナリ土人ハ
飽クマテ金ヲ利セシト欲セシニ此偶然ノ事ニ際シ金
鵜ヲ屠リテ空ク一物ヲ利スルヲ能ハカリシ西俗ノ鵜
鳥ヲ畜フ者アリシニ鵞日ゴトニ一金卵ヲ産セリ然
ルニ主人一日ニ一箇ヲ産スルモ尚ホ飽カス若シ之ヲ
屠シ割ケ一時ニ更ニ一物ヲ見レト遂ニ鵞ヲ
茲ニ又一ノ記スベキナリ乃彼ノ禿頭ノ煽動者ニシ
テ余ハ甚々彼ノ拳動ニ注目セシガ今回ノ争鬪ニモ毎
ニ一已ノ権カヲ張ランガ為メ獨リ衆人ニ先ダテタリ
日本人ハ土人等ノ請求スル賃金ニテハ再ヒ服役ヲ要
セサル趣キヲ答ヘタリ故ニ土人ハ恰モ新クニ損害ヲ
負荷シタル如ク思ヒシニ更ニ甚々シク激怒シタリ

其後日本人ハ土人ヲ説諭スルヲ企テガリシハ日本
人ノ懇切ニ土人ヲ処スル忍耐ハ蓋シ此際ニ尽キタ
リ目下兵卒ノ数ハ他營ノ番兵ニ充ルニ足リ人夫ハ輻
重ノ搬運等ニ暇ナク營障ノ作事ハ全ク止ミタリ

此日ノ天明ニ英國ノ砲船ホルネツト号ハ北方ニ向ツ
テ去リシガ間モ無ク日本ノブリゲート日進艦着港シ
タリ即チ此艦ニ来リテ當役ノ海軍ニ長タル提督赤松
都督西郷ノ次官タル將官谷ノ兩人来着セリ同氏等ノ
話ニ都督西郷及ヒビ子テルルビヤンドル氏ハ已ニ前
章ニ記シタル所ノ種々ノ障碍ニ因テ今猶ホ日本ニ駐
在シ又太平海郵船會社ノ汽船ヨシヨシ号ハ該社
ノ代理人固ク拒ミテ引戻シタルト此日ノ九ツ午時頃
ニ大イナル運漕船兵卒二百人人夫一隊及ヒ穀多ク糧

食ヲ載セテ入湾シタリ此船ヨリ最初ニ陸揚レタル物
ハ若干ノ木材ニシテ之レヲ以テ匠人直チニ仮屋ノ造
作ニ着手シタリ事詎ニ依レハ再ヒ解キ離ナス為メ釘
ヲ用ヒスシテ編繩ヲ以テ結ヒ結構ハ至テ粗造ナレト
モ適用ノ仮屋敷軒ハ晝間ニ落成シ匠人等ハ其習俗ノ
如ク快ク放歌シ夜半ノ後マテ撓マサル勉強ヲ以テ營
造ニ従事シタリ此頃夜ハ清凉ナレドモ日間ノ暑氣酷
烈ナルヲ以テ病疾既ニ陣中ニ流行セリ

日本
海軍
紀略

... 第十一回 ... 其言ハ...

第十一回

○新ニ陣營ヲ擇マル事○土人ト再度ノ困難○擅私ナル自役兵ノ不注意ナル遠出○蛮族ノ酋長ト會見○南ホルモサノ酋長○友誼ノ交際ヲ確定ス○蛮民ルジヤン
トル氏ヲ信頼セシ事○土蕃ノ饗宴
提督赤松將官谷ノ向人、即今陣中ニ在テ最モ高位ナル官負ニシテ此時ヨリ都督西郷ノ續テ到着スルマテハ諸般ノ指揮悉ク西人ノ手中ニ在リ五月十一日新ニ陣營ヲ設クルノ地ヲ最初石擇セル郊野ノ南ニ里許ノ處トセリ蓋シ現時有ツ所ノ地ハ夏時ノ大雨中流潦ノ患アルヘキヲ發見セシニ因レリ今回擇ム所ノ位置ハ瑯瑯灣ノ南界ヲ形ツクリタル點ニ當リテ小キ入江ヨリ突起セル山側ナリ此日ノ午後一隊ノ人数ヲシテ其

...

敷地ヲ準備シ且ツ井ヲ鑿ツカツテ差遣セラレシガ
此等ノ工業ヲ為スヲ嫌ヘル六十人程ノ土人ノ支ユル
ニ會ヘリ其支フル所ノ口實ハ該地方中ノ墓ヲ毀害セ
ラレシトテ信スルガ為メナリト差遣ノ人数ハ姑ク土
人ノ言フトコロニ任セ暫ク之ヲ避ケテ今一應ノ下知
ヲ待チシカハ更ニ該地方ノ首長ヲ遣リテ必ス埋葬地
ヲ荒穢セザルノミナラズ却テ墳墓ハ竹柵ヲ以テ之ヲ
圍繞スヘキトテ保証セシメタリ(終夜論辨說諭ニ翌且
ニ至リ土人初テ許諾セシト見ユ)實ニ土人ハ屢々惡意
ヲ表セシモ日本官吏ノ懇切丁寧ニ彼等ヲ遇セントシ
タル實意ノ耐忍ヲモ殆ント破ラントセシホド度々ノ
諭告ヲ受ケ(余ハ初度差遣ノ人数モ及復說諭セシコト
同一ナリト信ス)タル後許諾セシカバ其質言ハ久シク

回守ニシテリキ
十二日ノ晚八九名ノ日本人通詞人及^リ自^リ後兵私ニ
相伴ヒ探索ノヲノ出行セシク齊シク海濱ニ沿ヒ南方
ハ若干里ヲ行キ山岳ノ間ヲ少シク内地ニ進入シ十三
日ノ夜無事ニ歸着セシカ勿論一ノ好結果ヲ成サズレ
テ却テ目前困難ニ導クベキ惡例ヲ残セリ蓋シ此等ノ
責任ヲ受ケサレ弱輩ナル日本人ハ敏^ニ為^ルノ精神ヲ聊モ
限制スルヲ無キカ如ク己ノ勇氣ヲ著ハスベキ時機ノ
至ルヲ待チ一ノ願ハシキ目的ヲ使用セサルノミカ其
身ノ安全ヨリ遙カニ重大ナル軍益ヲモ危クスベキ種
々ノ方術ヲ術^ヲフ^テニ固着セリ併シ余輩ハ彼等ノ愚ナ
ル剛勇ヲ遂クル場合ニ於テ幸ヒニ一人傷害ニモ遭ハ
サリシヲ大ニ喜悅セリ

一面ハ右擅私ナル遠出ノ続キトシ一面ハ他ノ満足ナ
ル道理ニ付テ左ノ事件ヲ必要トス十三日一使ヲ遣リ
嚮ニ悼其篤差配セラレシ勢力ノ大部ヲ保有セル者ト
見ヘタル各種族ノ酋長ニ日本人ノ静穏ナル企謀ヲ告
ケ成ル可クハ彼等ノ協力好意ヲ得ルノ日途ヲ以テ會
見ニ招集ス可キカ為ノナリ此使節ヲ勤ムベキ若ハ我
カ味方ナルニヤノ外一人モナキカ故ニシヤニ任セシ
カハ速ニ奉使シ翌日歸著シテ言フニハ諸酋長ノ中一
人モ日本營ニ至ルヲ諾セザルノミナラス速路ヲ下
リ琅瑤ヲテ出ツルヲモ好マサルナリ然レトモ其中四
人丈ケハ海岸ヨリ大約三里アル山嘴ノ村落ヲテハ出
テ來ルベシトノ報告ヲ得テ取レリ諸酋長ノ魁首ハ名
ヲ亦昔ト稱シ同ク一社ノ酋長ニシテ別ニ一黨ヲナス

悼其篤ノ子及ニ相統人ニ對シ後見職ノ如キヲ以テ一
層ノ權勢ヲ有スル者ト見ヘタリ彼等ハ日本人ノ護衛
兵ヲ從ヘズシテ來會センヲ請ヒシカハ確乎タル約
束ハ為サリシト雖モ理ニ於テ諸酋長モ亦軍裝セル
後卒ヲ率キサルハ明カナリ
十五日ノ朝茅十時ニ七人ノ日本官吏ハ通詞人及ニ紫
内者ト共ニ撰定セル會合ノ地ニ出發セシガ途中甚ク
困難疲憊スベク經行ニ必要ナル道路ハ車輿ノ類一モ
之ニ適セズシテ全距離トモ尽ク歩行セサルヲ得サレ
ハナリ總テ該島ノ此邊ハ密布セル松樹ノ矮生多シト
雖モ日光ヲ庇蔭スヘキ草木ノ類無ク最初ノ二里ノ後
ハ路線南西ニ直リテ谷ニ接シタル山ノ麓ニテ漸次ニ
登上ニ酋長ノ待チタル小村ハ一般ノ外形海濱ノ村落

齊シク家屋ノ模様ハミヤ一族ノ住セル地方ヨリハ劣
レルモ他ノ衆村ニ比スレハ優レリ土人ノ形状ハ海濱
住居ノ者ヨリハ勇敢剛強ナルモノニテ容貌ノ支那風
ナルヲ猶其衆多ニ就テ見ユ日本人日本人ノ到着ヲ
目撃セントシテ出デ来レル土人ノ雜衆中ニ最モ出特
ナル一人ハカフセル数日前社寮ノ近邊ニテカツセル氏
ニ向テ外人其陣營ヲ離ルニトアルト齊シク之ヲ待テ設
クルヲ斯クノ如シ斬首ノ手真似ヲ爲シテ通告セシ者
ナリト認識セラレシハ奇態ノ事ナリキ斯クテ村落ノ
諸巷ニハ準備ノ一徵モナク酋長ノ駐在ヲ示スベキ者
モ近邊ニ見ヘサリレカドモ米人カツセル氏等ハ種々
ノ便宜ヲ量リ自ラ擇ヒテ此処ヨリ一里四分ノ一程ナ
ル四面屏障ナキ曠敞ノ原野ニ止マリシ故ニ同氏ノ在

ル地ニ於テ會議スベシトノ概合ヲセラレシヲ以テ酋
長ノ此ニ在ルヲ知レリ然レニ此概合ハ行ハレサル
ヲ以テ我方ヨリ行キテ窺初約速セシ地ニテ彼等ニ面
會スルニアラサレハ外ニ為スベキノ道ナロキ
斯クテ此行ノ人々ハ其地ニ至リシカハ最好ナル小屋
ニ導カレ其重ナル室内ニ唯一人立チ居タリシカ談話
ヲ交ユルヲ待ズシテ直ニ出テ去レリ此人ハ後ニ至リ
テ酋長亦惜ナリシヲ知レリ室内ノ一人退去ノ瞬間
マデハ村内寂然トシテ他国人ノアルノミ外ハ一人ノ
隻影タモ見サリシ程ナリシニ彼ノ出テ行キシト齊シ
ク四十名許ノ粗野ナル人民ノ一隊突然ト現ハレ恰モ
幻術ヲ以テ呼出シタル者ノ如ク何處ニ何如ナル方術
ヲ以テ隠シ置キシカ之ヲ想像スルヲ殆ント難ク稗史

無
敵
言

大
政
官

中ノ口デリツクデエトノ喚召モ此野蛮勇士ノ現ハレシ
ホドノ驚愕スヘキ者ハアラサリシ此一隊ハ家ノ戸邊
ニ指集セシモ別ニ意趣有ルニ非ラサル可ク唯已カ地
歩ノ勝リタルト外人ノ援助ナキ孤立ノ地位ニアル
トヲ示サンカ為メナルトハ即時ニ知レタリ
既ニシテ此事モ息亦昔ハ十八歳位ノ美貌ナル悍其篤
ノ未子及ヒ其他ノ酋長ニ伴ハレテ帰リ来リ引続イタ
ル應接及ヒレカ己レノ威權總テ其同伴人ニハ稀ニ相
議リ彼ト同伴人トノ動作ハ大ニ異ナリテ独リ威權ヲ
有シ話次ノ間ク目^{オツク}ラ今日猶連合セル南方ノ諸種族中
ニ在テハ最モ權勢アル者タルヲ見ルニ足レリ抑亦昔
ノ容態ハ頗ル奇異ニシテ筋骨逞マシク軀幹ハ歐洲ノ
中人以上ニ出デ顔色ハ暗黒ニシテ面貌ノ表見ハ強悍

勇果ナリ而シテ時ニヨリ極テ猙獰ナル姿ヲ為スヲ以
テ若其暴激ノ怒ヲ發セシ片ハ猝チ惡魔ニ取付レタル
如キ怪形ニ変スルトハ推シテ知ルヘキナリ蓋シ斯ル
状貌ヲ顯ハスハ彼一人ノミナラズ此地方衆人ノ天賦
ナリ又亦昔ノ眼ハ甚タ異常ニシテ明^ル角^{ツク}罩^{ツク}ノ暗青白色
ト腫チトノ間分界極ノテ少ナク其曾テ煩ヒタル異状
ノ病症ノ為ナリトハ後ニ至リ知ルコトヲ得タリ是ノ
故ニ度々煌耀セサリシカド時トシテハ或ル野獸ノ眼
ノ如キ猙獰ナル惡視ノ閃光其中ニ来レリ余輩前條ノ
如ク審断シ得タルハ極メテ平穩ノ時親睦ノ評議ニ注
意シ或ハ饗宴ノ間ナレハナリシヲ以テ後日ニ至リ如
何ニ変更スベキモ未ク知ル可カラス衣服ハ此州ノ中
等ナル支那人ト大同ニシテ品質^{シテダラ}ノ稍優リタルト少シ

ク繡^{スミ}セシトノ異ナルノ之其攜帶スル処ノ武器(火繩銃)槍弓矢刀ハ用ユルニ足ル可キ物ニシテ極メテ善ク之ヲ磨碌セリ彼カ平常^{ヒト}行作ノ重厚ナル時ト虽モ先練ノ注察者ハ一目シテ平穩ナル者ト思ハサルハ決シテ疑ヒナキナリ亦昔ハ始終嚴格ニ兀坐シテ左顧右視スルヲ極メ稀ナリシカ此仔細モ亦其時ニハ明知セサリシカ後ニ疑ナク其視覚ノ減衰セルニ因リシヲナルヲ知シリ其談話ハ言語甚タ捷ニシテ音聲^ハ虎^ノ如ク其中ニ少シク和意ノ韻調ヲ具ヘタルノミナリシガ總テ無禮ナル辞ヲ吐シニハ非スシテ只管日本人ト愉快ナル交誼ヲ保フヘキ期望ヲ示サントスル意ト見エタリ彼ハ南^ヲヲル^モモサノ諸民ノ如ク亦居^ノ恒^ニ檳榔子ヲ數ムカ故其液汁ニテ齒唇共ニ暗色ニ汗^ニ滌^シ又東部海濱ノ諸種

族中ニ特有セル醜形ノ裝飾ヲ用ヒ其耳^ノ深^ハ重キ銀板ノ鎖鑿^セル大孔中ニ嵌入セシニ因リ不^ニ脛^ニ裁^ニ延長セリ其同伴ノ中ニハ金属ノ代リニ貝若クハ水晶片ヲ著ケタル者アリタレ氏一人モ斯ク奇態ナル裝飾ハナカリキ

會見ノ時間ハ甚タ長カラステ交話ハ互ニ三度ノ翻譯ヲ要ムルカ故ニ(日本語ヨリ英語夫ヨリ支那語夫ヨリ蛮族ノ方言ニ返答ノ時ハ此順序ニ反ス)是非ナク遅緩ナリシカト廣大ナル議ヲ發スベキ少許ノ^ヲ術^ヲ據^テアリテ會合認可ノ狀ト盟約言辞ノ交換トノ重大事件ハ要求セシ所ノ如ク悉ク完全スルヲ得タリ亦昔ハ日本人ノ到底目途トスル所ヲ聞知シタキ由ヲ述ヘシカハ都督西郷及ヒルジマンドル氏ノ該島ニ到着セハ其時

速ニ充分ノ報告ヲ受クルナルベシト虽モ征伐ノ趣意
ハ亦昔若クハ亦昔ノ臣属及ヒ他ノ馴良ナル種族ヲ害
スルヲ好マザルノ旨ヲ以テ答ヘ更ニ亦昔ニ向ヒ日本
人ハ護兵ヲ從ヘスレテ此処ニ來リシハ固ヨリ蕃民ノ
善良ナルヲ信スルカ為ナリトノ旨ヲ告ケ諸酋長ハ從
卒ヲ率ユルトモ或ハ率ヒサルトモ其欲スル所ニ隨ヒ
テ亦我々陣營ニ來リテ信任ノ意ヲ答礼スヘシト請求
セシニ亦昔ハ躊躇シタルカ為ノ再々外國人ノ中一名
内地ニ至リ其本營ノ間ハ質トシ駐マルヘシト告ケタ
レトモ猶ホ答ヲナサ、ルカ故ニ然ラハゼ子ラルルジマ
ントル氏ノ到着ノ後ニ必ス來ルヘキヤト問ヒレニ速
ニ確然タル答詞ヲナセリ蓋シルジヤンドル氏ノ名ハ此
等ノ蕃民ニ對シテハ祝符ノ如ク靈驗ヲ有スルモノナ

リ又亦昔ハ日本人ノ衛兵ナク不知紫内ノ地方ヲ旅行
セシヲ見テ阪路ハ配下ノ人民ヲシテ其本營マデ護送
セシムヘキ旨ヲ述ヘタレ氏勿論此事ハ辞セラレタリ
キ斯クテ應接凡一時間ヲ過キレカ猪ヲ屠リ饗宴ノ具
整ヒタリトノ案内アリレト虽モ之カ為ノ村落ヨリ隔
絶ナル地ニ於テ會見セサリレヲ以テ此ノ欲ク可カラ
サル饗宴ノ準備ハ是日ノ早朝ヨリ設ケレモノナリト
余ハ記セサルヲ得ズ既ニレテ猪ト其加品トヲ排列シ
茶及ヒサムシエ^{支那製}酒類ヲ飲ミ雙方互ニ禮儀アル満
悦ノ正シキ演說ヲ以テ第三時少し過キ會見ノ礼全ク
終レリ將サニ去ラントスル前米國ノ士人ハ土人ノ携
フル火器ハ最モ創始ノ製ニ属セルヲ見之ヲレテ感驚
ヲ起サシメシカ為ノウイシチエスタ一銃^{發明人及ヒ}

大
政
言

他ノ施條銃ノ功用ヲ示シタリシカ日本官吏ノ指揮ニ
因リ各酋長ニ「後込施條銃一挺ツ、ヲ贈與セシニ記念
ノタメ永ク秘藏スルトノ趣ニテ受領シタリ然レハ彼
等ハ此兵器ノ功ヲ知レテ其常用習熟ノ具ヨリ遙カニ
勝リタル効用ヲ顯ハスヘキ才幹アリヤ否ヤ甚ク疑フ
可レ而シテ此一行ノ遠行若ハ夕刻茅六時ニ其本營ニ
歸著セリ

其後砲船ト同伴シタル茅三回ノ運船ハ増派ノ兵隊ト
軍備品トヲ載積シテ十六日ニ入港シ又同日ニ此近軍
務ノ職掌ニ兼テ廈門領事ノ官ヲ任セラレタル陸軍
少佐兼廈門領事福島九成ハ特別ニ委任セラレシ事務
ハ成功シタルヲ以テ文官ノ位地ニ復歸スルカ爲メ厦
門ニ出發セリ猶此事ハ後ニ至リテ簡略ニ之ヲ記スベシ

第十二回

○不注意ノ進行○離隊散行ノ過罪○薩摩人ノ斬首セ
テレシ事○日本軍艦端舟ノ水夫ヲ攻撃セラレシ事○暴雨
ニ付テノ延期

居ルヲ裁ヒナク日本ノ兵卒ハ假想セシ安全ノ感覺ニ
一ノ喫驚ヲ受タリ度々ノ異見ヲ顧ミスレテ其危急ノ
場合ニ臨ミ本營ニ達スルヲモ應援ヲ受ルヲモ出来難
キ程本營ヨリ隔絶シタル地方ヲ散行スルヲ毎ニ熟
好シタルカ故ナリ十七日ノ午後一百人ノ兵隊ヲシテ
駁ト定メシニアラサレトモ略々弁候ノ目當ニテ本營
ヨリ東ニ當リニマイルヲ距リシ地ニ發遣セラレシカ
灌莽中ニ集合セシ間ハ危險ニ達ハサリシカ其中ノ六
人此処ヨリ里程凡ソ一マイルノ四分一ヨリ少ナクシ

テ其屋背叢上ヨリ見ヘタル小村ヲ見分セントノ念ヲ
生シ難ナク其處ニ至リ暫時駐マリシガ歸途密樹中ニ
潜ミタル敵ノ為ニ砲撃セラレ薩摩ノ一伍一伍濫ハ殺サ
レ今一人ハ頭ニ傷ヲキタレ比攻撃者ノ数ト其居處ト
ヲ知ル術ナキヲ以テ直チニ其本隊マテ引返シケレ
ハ同隊ノ總人數遅クセス其場所ニ進行シタルニ死者
ハ既ニ頭ヲ截ラレ體衣ヲ剥カレ其兵器ハ奪ヒ去ラレ
タルヲ見ルニシテ勿論敵ノ蹤跡ヲ知ルヲ能ハサ
リシ此事ニ付吟味ヲ遂ケレニ真ノ牡丹種族ノ為セシ
所業ナリトノ確實ヲ發見セリ即チ此種族ハ一千八百
七十一年ニ宮古島ノ漁人ヲ殺シタルヲ以テ日本人カ
之ヲ責問スル為メ現今ホルモサニアル所以ノ者ナリ
蓋シ牡丹人ハ山頂ニ候望ノ營ヲ構ヘ散行者ノ轉動ヲ

遙ニ視察シ能ク諳熟シタル脇道ヨリ容易ニ之ヲ要撃
セシナリ此失策ハ証着ニ付キテ職掌上多少相連結セ
ル不注意ナシ銃進徒ノ為メニハ少シク警戒トナルハ
キトヲ期望セシニ更ニ右等ノ發ヲ見ズ或ル輩ハ制禁
ニ感セラレス而シテ縱令ニ嚴密ナルモ自ラ警戒シテ
利益ヲ得ルノ出来難キトヲ現ハシタリ
報復ノ舉ヲ為スニハ先ツ數日前東方海岸マデ日進艦
ニテ航行シタル提督赤松ノ歸着ヲ待ツニ決シ赤松ハ
十九日ニ到着シタリシカ高滑士種族ノ蛮民ナル可ク
同艦ノ端舟ニ發砲セシトノナリ其發砲セシトハ高
滑士人ニ非サルハ他日之ヲ知ルト虽モ當時提督ハ斯
ク侮蔑ノ所業ニ遭遇セシヲ大イニ激怒シ海陸軍相合
シ大挙シテ懲罰セタルヲ得ストノ軍議アリレガ終ニ此

事ハ不急ナリトシ姑ク之ヲ他日ニ延シ牡丹人カ斥候
隊ノ兵卒ヲ狙撃シタル事件ノ吟味ニ著手ス可キニ評
決セリ

斯クテ吟味ヲ遂クルタメ評決シタル一條ニ著手ナサ
ントシテ暴雨ノ為ノニ又数日ヲ遷延シタリ此ノ延期
ハ暴雨十八日ヨリ降り出シ半週間頗益ノ勢ニテ断間
ナク降り續キタルニ因レリ而シテ陳營ハ三日三夜ニ
全ク変シテ小湖ト成リ其深サ亦浅クナラス各個ノ帳
幕ハ水ニ圍繞サレ拾モ^取及三角塔形ノ島嶼ノ如クナ
リシ日本ノ兵卒ハ卓子ヲ用ヒサルニ衣服及ヒ他ノ
貴重品等多クハ流失シテ再ヒ得可ラス命令ニ因テ為
ス者ノ外一切往來スル者ナク四十八時ノ間ハ炊煙全
全ク絶ヘ夜中警衛兵ハ整列シテ守ル^ル能ハサリレカ

ハ陣營ノ警備ハ唯ニ深ク沈没セザル各方ノ地面ニ就
テ散在セル番兵ニ拠ルノニナルカ故ニ終ニ瞬時モ早
ク陣營ヲ海濱ニ接セル砂地ノ高處ニ轉移スル^ル必要
ナリト決シタリキ是ニ於テ位置稍改良シタレ氏洪水
ノ危難ハ猶晝時ニ恐怖夜間ノ夢想ニアリシ
暴雨ノ最中ニ英國軍艦「ホル子」号ハ近地ニ長ク逗
留スベキ胸算ヲ以テ歸來セリ在臺灣ノ英國領事ハ此
地ヲ距ル凡ソ五十里程ナル臺灣府ニ在ルカ故ニ此艦
ノ再ヒ來リシハ唯ニ最モ仁惠ナル日本人ノ意思ヲ島
ノ北部ノ支那人ニ通報スヘキヲ採集シテ日本人ノ企
謀ヲ助ル目的ノニハ非ルヘク蓋シ英國ハ此度ノ事
件ニ付キ視察ヲナスハ別ニ利益ヲ計ルモノナル可シ

第十三回

○乍候兵ヲ襲撃セシ事○他ノ無用心ナル遠出○日本
人兵力ヲ以テ進攻セシ事○蕃人ヲ長驅セサリシ事○
疑念ヲ被リタル村落○露宿セシ事○初テ規律アル交
戦○日本人六名蕃人十六名ノ死者
五月廿一日暴雨初メテ牧リシヲ以テ十二人ノ遊兵ヲ
シテ四日以前ニ薩摩人ノ殺サレシ地方ヲ検査スルタ
メ發遣セラレタリ此者ノ囑咐ハ先キニ踞蹕セシ村落
ヲ巡見シ其状態ヲ探討シ未タ知レサル所ノ敵ハ何種
族ニ属スルヤ的確ニ詳知スベシトノリナリ余ハ殺サ
レシ兵卒カ今ハアラザルモ生時ノ如ク其處ニ徘徊シ
タルトセンニ其徘徊ハ惡意ニ非サルヲ攻撃人等ノ知
ルニ由ナキハ尤ナルナリ然レ氏又日本人ハ我兵ノ

大政

大政

死傷ヲ漠然トシテ看過ス可キ場合ナラザリシトハ情
實ヲ去テ他ノ一方ヨリ之ヲ論スルトモ日本ノ兵卒ハ
確定セル地界ヲ越ヘレニ非サレハ琅瑤ノ侵入襲撃ノ
罪ハ共ニ蛮族ノ方ニ歸セサル可ラス

十二人ノ兵卒ハ格別ノ行嶮ナク探偵シ得ラル、又ノ
一ヲ採集シ好テ危難ヲ冒ス可キニ非スト思ヒシニ其
地方ノ寂寥タルヲ見テ例ノ如ク自ラ英氣ヲ限制スル
コト能ハスシテ当然ノ権度ヲ越ヘ遂ニ此處ヲ距ル一
二里許ナル次ノ部落ニ前進シタリ斯クテ本營ヲ離ル
、一凡四里程ノ処ニ達シタリシカ不意ニ五十人ヨリ少
カラサル土蕃人一隊ニ遇ヘラレ彼ヨリ砲撃シテ我カ
兵ノ二人ニ重傷ヲ負ハセシカハ我ヨリモ應撃シテ敵
一人ヲ斃セリ土人ハ之ヲ半ハ灌莽中ニ隠シ急キ海濱

へ退走シタリシカ後ニ海濱ナル村人ノ為ニ具屍ヲ發
見セラレタリ此急報ノ本營ニ聞ヘタルニ付キ守營ノ
兵ヲ止ムルノ外總兵ニ百五十人速ニ進行シ干後茅五
時半頃ニ會戦ノ地ニ達シタリシカ敵ハ林莽中ヨリ彈
丸ヲ乱發スルヲ以テ我兵ハ唯頻ニ應發スルノミナリ
シカ我後軍ハ之ヲ見テ勇氣倍々加リ前軍ヲ壓進セント
シテ順序ノ錯乱ヲモ願ヒスニ努力セシユハ一倍ノ速
カヲ以テ進撃シタレト土蕃ハ後方ニ向ケ時々亂射シ
暗熟シタル地理ヲ容易ニ退走スルカ為メニ到底究追
スルコト能ハス且ツ日モ已ニ黄昏ニ及ヒシ故日本人モ
夜間ノ長驅ニ絶望シ其兵ヲ分チテ二ト為シ一半ハ若
シ敵ヨリ再ニ争鬪ヲ初ルコトアラハ之ニ急應スルタメ
山麓迄ク屯成シ一半ハ本營ヲ指シテ立歸レリ

土人ハ非常ニ震慄セシモノナルカ前記ノ村落中ニ種々疑フベキノ痕跡ヲ存シ火繩銃ハ唯ニ散漫セシノニナラス此等ノ武器ヲ成ル可ク淨潔ニ保存スルハ土人ノ風習ナルヘキニ左ハナクテ迤ク用ヒレ若ク如ク黒ノ煤ビタルヲ見タリト日本ノ官吏ハ此事ヲ聞クヤ此村人等若シ現時抗争セル敵人ト認メタル牡丹人ヲ救助庇護セシナラハ彼等モ亦敵人ヲ以テ之ヲ遇スヘキ旨ヲ預告スル布令ヲ揭示スル為メ兵ヲ其地ニ出シテ鎮撫スルニ決セリ當時敵意アル事件ハ斯ク野蠻ノ支配ヲ行ハサル御璫ノ土人即チ日本人トハ友誼ノ交際ヲ確定セシ者ノ所有スル地方ノ中ニ於テスラ起リタレハ蓋シ日本人ハ此構怨者ヲ以テ全ク山中ノ蕃人ニ属スル若トナシ將來村人ニ對シ逼責スルノ念慮ハ一

モアルトナク成ルベクハ平和ナル方便ヲ以テ交際ヲ確定セラレバキト固ヨリ明カナリ又一千八百七十一年ノ兇行ニ組ミセシニモセヨ其罰ハ則其首長ニ委スバク且ツ牡丹種ノ首長ヨリ決然タル嫌却挑戦ノ事アルニ非ラサレハ日本人ヨリ強テ之ヲ行フニモ非ラサルヲ以テス然レ氏現時究竟ノ方策ニ於テハ屢々攻撃者ニ達フノ預備ヲナスハ必要ナルヲ以テ外營ヲ徹スルト弱ヲ視メスノ所業ヲ却テ充分ニ其根基ヲ保ツトニハカヲ添ユ可ク前進レテ争鬪ノトキニ當リ避ク可ラサルノ地ニ至ルノ舉動ハ決シテ之ヲ許サハルトニ決定セシト虽モ右等無事静息ノ模様ハ之ヲ保証スルハ難ク之ヲ議決スルハ易カリレ

廿二日ノ曉ニ佐賀ノ争乱ニ名ヲ得タル諺謀佐久間

大政

引率セラレタルニ組ノ兵ハ前夜戦地ニ残りシ者ヲ扶
助シ且ツ疑ハシキ事件ノアル村人ヲ鎮撫スル爲ノ發
行シタリ然ルニ軍人ハ好奇ノ心或ハ夫ヨリ過激ナル
ナル情思ノ爲メニ促サレ蕃人ノ伏シテ見ヘサリシ山
道ニ進行セシカ狭窄峻峻ナル地ヲ通行スル半途ニテ
再ニ敵ノ起發ニ遭ヒ交戦ニ及ヒ最初ハ敵兵ノ數二百
五十人モアルヘシト算セラレシガ統テ推算ノ過多ナ
ルヲ察識シタリ蓋シ其真數ハ凡ソ七十人程ニテ非
常ノ要害ニ扼守シタリシナリ余ハ其地勢ヲ(記昔自後
ニ至リテ精シク檢視スルノ時檝ヲ得タレバ他回ニ於
テ別ニ之ヲ詳記スヘシ斯クテ一百五十人ノ日本兵ハ
此處マテ前進シタレ氏一條ノ道路モナク地勢甚ク困
難ニシテ三十人ヨリ多クハ働クヲ得スト虽モ牡丹人

ノ住地ハ唯此地ヨリ行クヲ得テ又他ニ要ム可キノ
道路ナキヲ以テ奮戦シテ兩岸巖石ノ聳立シタル溪流
ノ中心ニ至リシカ蕃人ハ前以テ撰ニ置キシ巨塊ナル
巖石ノ後ニ身ヲ隠シ日本人ハ此瞬間最モ見出シタル
場所ニ身ヲ隠シテ一時間餘モ互ニ砲丸射發セシカ終
ニ蕃人ハ尽ク遁逃シ(最モ少ナク氏強壯ノ者ナリシ)邊
リニ一人ノ残りタルヲモ見ス蕃人等被傷者ヲハ共ニ
連レ行キシガ十六人ノ死屍ハ遺セリ日本人多クハ其
首級ヲ取りテ本營ニ持歸レリ此役マ日本人ハ死者六
名ニシテ其一名ハ武官ニアラス傷者ハ殆ト二十名ア
リシモ其中多クハ淺疵ナリキ

九州ノ佐賀ハ一千八百七十四年ノ反乱ノ地ナリ
土蕃ニ對シテノ戦ハ今明カニ進捗ノ形ニシテ此等ノ

大政言

事件ハ當時ノ舉動ニ於テ最モ必要ナルヲナリ。従令既ニ起リシ直接ノ交戦ハ瑣細ナル姿ナリシモ更ニ廣大ナル節制ニ於テノ措置ヲ以テ成ル可ク速カニ之ニ継ガルヘキハ當然ナリ而シテ日本兵ニ於テハ責任ナシニ事ヲ行ハル數名ノ不用意者カ戦闘ヲ急クトニ著目セシハ疑ヲ容レザルヲナレトモ著人ハ戦闘ニ決心セシカ故ニ警告ノ一モ其方向ヲシテ変更セシムルヲ能ハサリレハ日本兵ノ不虞無備ナル所作ヲ見テ機ニ練スルヲ迅速ナリシヲ以テ證明スベシ

第十四回

都督西郷ノ到着○新来ノ準備及テ援兵○支那兩軍艦ノ来着○友誼ノ使節○禮兵ノ會見○福建總督ノ返翰○支那政權志望ノ初報○將來統轄ノ議ハ延期セラレ
○祝砲○支那人大砲ノ取扱ニ不鍛鍊ナル事○外国居間人ノ功ナキ結果○其後ノ成功○日本ノ勉勵ト較シタル支那ノ怠惰

廿二日ノ小戦ノ起リタルトキ大艦數艘琅瑤灣ニ入り投錨セシガ其最モ早ク到着シタルハ高砂丸ニシテ都督西郷其將校及ヒ一千五百ノ兵卒人夫等ヲ載セシニ次ノ者ハ運送船ニシテ二船来着ノ為メ凡ソ一千三百人程究竟ナル戦士ノ負數ヲ増シタリ將サニ船ヲ下ラントスル前更ニ二軍艦他ノ方角ヨリ来リ初ノ程ハ

何レノ國船ナルカ疑カハシカリシカ支那ノフリゲ
ト船及ヒ砲船ナルヲ知レリ余輩ハ眞實ナル公報ヲ
得ントシテ合衆國公使ノ尽力セシ以來未タホルモサ
ニ付テハ支那政府ノ確乎タル議論アルヲ知ラス其舉
動ニ就テ見ルモ甚ク判然ナラサルヲ以テ今此船ノ到
着ハ許多ノ疑惑ヲ起サシメ而シテ日本人ヲ訪問スル
トニ付テハ一モ不親ノ態ナキヲ發見スルハ大イニ心
ヲ慰セシメタリ此レ唐ニ衆心居間人ノ斯ク緩解スル
ヲ期望セシメシニ由ルニ非ラスシテ東京北京ニ在ル
釀害者ノ由テ以テ煽動ノ處置ヲナス根基ノ偽詐ナル
トニ確然ナル證據ヲ與ヘラルカ故ナリ使者ノ言ニ
據レハ支那政府ハ決シテ日本ノ所置ニ對抗セヌ此度
ノ緊要ナル奉使ノ一事ハ琅瑤ノ土人等ニ日本人ハ此

處ニアリテ善事ヲナスカ故ニ支那官吏モ固ヨリ日本
人ト同情ナシヲ以テ土人モ亦カノ及フ限リハ何事ニ
由ラズ日本人ヲ助ケルカ土人ノ本務ナルトテ首長ニ
ハ面見シ諸民ニハ揭示シテ通告スルカ爲ナリト此ノ
説明ノ誇大ナルヲ盡ク信セサルモ此時マテハ抗敵ノ
念支那官吏ノ間ニ擴布セサレハ又既ニ明クニシテ
厦門ノ船將カ日本人ノ初テホルモサニ違セシ後數日
ニ當リ支那政府ハ東部種族ニ付テノ責任ハ擔當セズ
且ツ管轄ノ權ヲ有セサル旨ヲ反覆明言セシ証蹟是ニ
至テ初テ具ハレリ
然リト虽モ此時既ニ外國人ハ助言挑唆シテ日後其脅
迫ノ度ニ隨ヒ抗敵ノ念ヲ支那政府ニ生長セシメタリ
種子ヲ播キシトノ判然タルトテ使節ノ口述スル處ト

其ノ携帶スル公書ノ文意ト差異アリテ支那人ノ自ら
履行スベキ定度ノ本源ヲ解ス可カラサルヲ以テモ見
ルベシ使人ノ口述ハ明逸公正ナルカ故ニ公書ノ曖昧
ナルハ單ニ將來ヲ預告シ敢テ現時ノ举措ニ關係スル
者ニ非スト為スヲ得ニヤ即チ該使ノ携帶セル文書ノ
都督西郷ヲシテ行為ノ方向ヲ变换セシムル能ハザリ
シハ若シ事理ノ論辯ヲ要スルナラハ西郷權ノ及ハザ
ル処ニシテ宜シク外交上ノ公使ニ就テ決定セラレバ
シト答ヘラレシヲ以テナリ此書信ノ如何ハ簡略ニ之
ヲ説クヘシ

初ノ福島九成ノ始メテ廈門ニ上陸スルマ西郷ヲリノ
書翰ヲ福建總督李鶴年ニ送り一千八百七十三年ノ春
副島種臣總理衙門ノ諸大臣ト決議セシヲ以テ今茲ニ

ホルモサ証討ノ兵ヲ發スルヲ告ケ且ツ日本政府ノ情
願ハ支那ト至誠ノ和ヲ守ルルヲ報シ總督ノ力ヲ假リ
テ其臣民及ヒ外国人カ兵仗及ヒ他ノ諸物ヲ供給シテ
蠻民ヲ助クルルヲアラハシテ防止センルヲ請求セリ正
理ヲ以テ言ヘハ斯様ノ書翰ヲ贈クルハ無用ナルルナ
リシカド此ノ如クセシ所以ハ以テ各自職分上ノ整置
ニ於テ公明正大ニ行フヘキ日本諸官員ノ決議ヲ示セ
ル者ニシテ西郷ノ意見ニ於テモ之ヲ明言セシナリ而
シテ全然支那ノ敢テ之ニ抗セントノ疑念ナキハ福建
貴官ノ權勢ハ定テ蕃民ノ外援ノ為ニ強ノラル、ヲ防
止スバキヲ期望スルニ由ルヲ以テナリ此舉ニ於テ用ヒ
タル始終ノ舉動ハ他ノ振合ノ如ク等シク正直信實ナ
リト謂フベシ

右ノ書翰ニ自總督ヨリノ返書ヲ待チ未^レハ支那使船
ノ務ム^ル職分ノ他ノ一事ニシテ後ニハ使者此事ハ未
見ノ單獨ナル主意ナラサルモ猶重要ナル主意ナル^レ
ヲ顯シ口述ノ表明ハ帝ニ禮儀上ノ方便ナル旨ヲ説キ
シニ一時又甚ク奇シム可キ言分^ハ為^レタリ兩國間ニ
益アル重大ノ趣意ニ付テハ總督及^テ政府ノ保テ^ル和
親ノ真意ヲ通スヘキ權ヲ有スレトモ此返翰ハ唯ニ最
初都督ノ通信ニ記セ^レ趣意ヲ直チニ返答セ^レモノト
認^メラレタル旨ヲ説キタリ以上説キタル如ク若^シ都
督ガ彼等ノ貳心ニ眩惑セラレ^レ果^シテ信ナリトス
ルモ都督ハ自ラ一兵卒ノ如ク支那人ノ説謫ヲ摘發ス
ルニ熟シタリト輕易ニ詐稱セサリ^レヲ以テ格別ノ耻
辱ニ非ス然^レモ猶ホ此事ハ信ナリトスルヲ得サリ^レ

ナリ蓋シ此時ニ當テ支那ハ初メテ日本ノ挙動ニ抗對
スル方向ニ誘カ^レレシカ斯^ル感覺ハ支那官吏中ニモ僅
々ニシテ合衆國委員ハ猶此ニ心附ス許多ノ支那紳
家モ猶公然トシテ北京政府ハホ^ルモサ蕃民ノ居住ス
ル地方ヲハ統轄セサルヘシトノ理論ヲ為セリ
在北京合衆國公使ウイリアム氏五月二十九日ノ記
載ニ支那首都ノ官吏ハ此時ニ於テ台湾ニ至^ル日
本人ノ挙動ハ戰意アル^レト思ハサリ^レ昔ヲ言ヘリ
在厦門合衆國領事ヘンデルソン氏ハ六月一日同ニ
日トニ支那ハ是マテ蕃民ノ住スル島地ノ部分ヲハ
欲望セス且蕃民ノ所為ニ付テハ責ヲ受ケザルトノ
報知ヲ同氏ハ支那ノ貴官ヨリ得タリトノ事ヲ記セ
リ

然ルニ總督ノ書翰ニハ支那ハ島ノ東部ヲ管轄スルノ
權勢ヲ得ンコトヲ主張シ日本都督ノ具兵隊ヲ引揚
テ要ムルノ旨ヲ説キレカ此事件ハ按外非常ナルコト
レハ西郷ハ書信ノ意味ヲ成ル可ク明了ニ糾問スル為
メ使者ノ接遇ニ注意シ廿三日ノ曉ヲ以テ海濱ニ最モ
迫テ設ケタル帳幕中ニ於テ面會ヲナセリ支那人ハ前
ニ其船中ニアリシトキ頭ハシタル穩便ノ解説ニ比ス
レハ少シク其外ニ出デタルカ如ク總督ハ是マテ支那
諸官吏ノ占メタル地位トハ全ク艱詰シタルヲ以テ其
文意ノ説明ヲ請ハレシニ更ニ狐疑スルコトナク此レハ
將來ニ干涉スルコトナリト解説シタリ即チ其言フ處ニ
摠レハ總督ノ請求ハ日本ノ兵隊具命セラレタル勤勞
ヲ成就セシ後ニ引拂フヘキコトナリト詞ヲ易テ細ニ之

ヲ言ハハ總督ハ日本島中ニ於テ蕃族ヲ懲罰スルト次
序安全ヲ回復スルトノ業ヲ企テ其成功ノ後ニ土地ハ
支那ノ支配ニ復歸スヘシトノコトニテ夫ノ李鶴年ハ
日本ノ貨財生命ヲ消亡シテ成就シタル若ニ就テ其利
ヲ全収スルコトヲ願ヘルモノナリ然ルニ此事ハ西郷ノ
敢テ思度スヘキ若キアラス其奉命スル所ハ將來島地
ヲ統轄スルノ事ニハ關係セシテ唯ク兇殺原犯ノ状
態ヲ推糾シ之ヲ懲罰シテ兇行ノ再ニ發ルヲ防クヘキ
方略ヲ施スコトノミナレハ支那使節モ了解セシ如ク現
今ノ地位ニ居ルヲ甚ク満足シタリキ是ノ故ニ都督西
郷ハ自己ノ職分ヲ行ヒ具餘ノ事ハ兇殺者ノ從屬スル
所領主ノ裁決ニ聽カスベシト演ベシニ右ノ結議ヲ以
テ支那使節モ亦同様満足ノ旨ヲ述ヘタリ今ヨリ之ヲ

觀ルモ使節ノ満足セシハ更ニ疑ヲ容ル、ノ理ナク決
然相與スルヲ要セシ抗對ノ感覺ハ此時ヨリ後ニ生
シタル者ナリ斯クテ支那人ハ蕃民ニ對シテ起セシ日
本ノ舉動ヲ援助スヘキ存意ヲ顯ハシ合同証討ノ当然
ナルヲ説キシカ(支那ヨリ日本ノ奉ヲ次クヘキ兵ヲ送
ル)此事ハ折然謝絶セラレ數時ノ間互ニ和好親睦ノ
情意ヲ相語リ支那官吏ハ現下認可セシ事状ヲ琅瑤土
人ニ示スノ思慮ヲ遂ケレ(土人ハ支那政權ノ下ニ立ツ
ヲ嫌ヘルカ爲ノ其布令ハ甚シキ關係ナキヲ以テ謝絶
セラレサリシト云フ)後ニ軍艦出發セリ廿三日ノ午後
日進艦ハ国旗ヲ揚ケ正シク祝砲ヲ發セシニ彼ヨリモ
至當ノ應發ヲナセレガ其答禮ノ仕方ハ頗ル嬉樂ヲ興
ハ即チ二十一門ノ砲ヲ放ツハ容易キ業ナルニ支那船

艦ニ於テハ聚合シタル船隊ノ中稍熟練セシ者ヲ撰ビ
勉メテ敏速精密ヲ以テ行ヒタルナルヲ思ハル而
ルニ日本軍艦ヨリ發シタル砲声ノ絶エシ後多時猶豫
アリテ六發ノ不規則ナル砲響起リ其間歇ハ二秒時ヨ
リ半分時マデニ變シ其後チハ三分時間程靜止シテ
更ニ時ヲ失ヒタル六發ノ火光爆響起リ此レモ慥ニ五
分時間ニテ再ニ中絶セシ故或ル日本人ハ何ニカ事件
ノ起リシナラント推量シ探鑿ヲノ爲メ將サニ日進艦
ヨリ端舟ヲ出サントセシ時祝砲再ニ始リ六發ノ後又
多時ノ中止ヲナシテ漸ク最後マテ發シ終ハレリ是レ
蓋シ支那軍艦ハ唯用ニ堪ユル大砲六門ヲ備ヘシノニ
ニテ屢々中絶セシハ再ニ裝藥スル手煉ノ缺ケタルニ
因リシヲナルヲ明カニ發見サレ此時ヨリテ支那砲手

ノ拙キヲ日本ノ陣營及ニ船中ニ於テ常ニ嘲弄ノ具ト
ナセリ
去ルニテモ此時疑ナク信實ナリシ好意ノ表明ヲ以テ
未會シ許多ノ満足ヲ興ヘシヲ秘隱スルハ支那ノ虚
飾ニシテホルモサ証討ノ希圖アリシ以未作為セシ企
謀ノ一分ヲ知り而シテ其妨礙スヘキ道ニ自テ居間セ
ントシタル外國公使ノ公然或ハ隱然カヲ用ヒレト支
那ノ怨嫉ヲ激成シ抗敵ノ舉動ニ之ヲ挑撥セントシタ
ル圖謀トハ目下瞬間ハ全ク緩解シタル如クナリシニ
其不和ノ志ヲ再々喚醒セリ斯ル有様ニ於テモ日本人
ノ新然トシテ企謀セシ所ヲ必ス行ハントシタルハ
一モ妨止スル能ハサリシ日本人ハ此事果シテ實ナル
モ恐ルベキ妨障トスヘキ者ハ唯リ隱忍ノ創意ト輕信

ノ想像カ、外實ニ一モ現存セサルヲ以テ満足シタリ
キ支那人ノ心中ニ於テハ日本人ノ新決ヨリモ定見
少ナキヲ勿論明カニシテ又外國人ノ居間スルニ擅
用シタル權ノ由テ以テ定立セル基礎ハ全ク現今ノ想
像上ヨリ成リタルト見ヘタリ然レトモ此妨礙ハ日
本政府ノ舉動ヲ久シク延引紛擾セシノ其勢力一時ハ
實ニ畏重スルニ堪ヘタル程ノ害ヲナスヘク脅迫セシ
トニ於テハ更ニ宥怒スヘキノ道ナシ以上ハ五月ノ未
ニ在テノ事情ニシテ其後ノ月ニ至リ其結果ノ彖分カ
困難ヲ醸ス器械(外國居間人ヲ指ス)ノ尽力ヲ成就シ波等終ニ支
那人ヲ假冒ナル怨怒ノ地位假冒トハ真ニ怨怒セスレ
テ唯其外貌ヲナスヲ云フ
中ニ驅迫シ其去路ハ唯ニ屈服シテ過失ヲ自認スルノ
一條アルノミト為セリ曾テ行ハレタル外國委員ノ此

等ノ居間ハ日本人ノ未タ企望セサル所ノ支那ヲ屈下
スルノ一ニシテ北京政府ニ強ク其堪ユルヲ能ハサル
ノ地位ヲ取ラシメ其中一人ハ終ニ名爵ト立休ノ消滅
ヲ願ヒス之ヲ退避スベシトマデニ告知シタリ五月ノ
終リマデハ戰意ノ初發ヲ証スヘキ直接ノ事件ハ兩國
ノ何レノ方ニモ起ラサリシト虽モ衆人ノ見込ハ各自
十分ニ説明シ得ル道理上ニ於テ臆度ノ造言ヲ確乎タ
ル實說ノ如ク為サントシテ極ノテ全カヲ用ヒタル者
ノ胸中ニ存スルノミナリシ
此支那ノ使節ニ付テハ他ノ關係ニ少シク緊要ナル一
アリ即チ或ル高位ノ文官其中ニ興リテ派出スヘキ答
ナリシニ過大ナル帝國ノ頭官是ク遲緩ニ動キシカバ
其旅装ヲ準備スル間ニ船ハ己ニ出帆シタルヲ以テ具

代補トシテホルモサニ在ル支那首府台湾府ノ或ル高
官ハ總督ヨリノ特別ノ使者及ク海軍官員ノ派出ニ重
シク添ユル為ノ隨從ニ而シテ彼等カ日本ノ行ヘル処
置ニ付満足セリトノ實言ハ日本國人カ己ノ最下等隸
屬タル僅カニ三十人餘ノ兇殺者ヲ罰スル為ノ斯ク大
層ナル準備ヲ為シ非常ノ出費ヲ掛ルトノ喫驚ナル中
分ト相混セシテ記スルモ決シテ不當ニ非ルヘシ又
茲ニ支那人ノ性質ト日本人ノ性質トハ差違アリテ最
モ注意ス可キ緊要ナル諸点ノ一ヲ簡易ニ解明スヘキ
者アリ即チ「ガリアリユズ」船傭夫ノ一件ニ際シ五六十年
間諸港ヲ荒ラセシ貿易ヲ制禁スル行為ノ法度ニ付
支那政權ヲ攪動セシハ日本ヨリ興ハタル有力ナル觸
激ニ因リシカ之ニ反シテ日本人ハ宮古島ノ漂流人ヲ

残虐セシトノ初報アルト齊ク直チニ兇殺者ヲ懲罰ス
ルト將朱斯、ル暴行ノ再發ヲ防キ安全ナラシムル為
メトノ計畫ヲ議定スルトニ倉皇トシテ從事セシナリ

第十五回

日本ヨリ消息アリレ事○疎謬ナル新聞ノ誹評○ビン
ハム氏ノ主張論○ビンハム氏ノ所為ニ或ハ當然トス
可キ真意○考察ス可キ事跡○蕃地事務全任等ノ重大
事件○總裁大隈ノ苦心○總裁ノ決議○精覈ナル審判
ノ結果○參議大久保利通○外国人ノ抗爭論無益ニ帰
セシ事

五月二十二日到着シタル日本ヨリノ來書ニ縷述シタ
ル趣ニテハ未タ此ノホルヒサ証討ノ事件ニ付テ怫然
抗拒ノ色ヲ露ス者アルニ由テ生シタル紛紜截定セサ
ルノ模様ナリ初時余輩ノ意ニハ長崎ニ在ル日本官吏
ノ首領タル者ノ間ニ於テ為セシカ或ハ都督ニ接近シ
タル者ノ間ニ於テ為セシカ未タ其孰レヲ知ラサレヒ

有功丸ノ遷ニ解纜發港シタルヲ輕忽ナル一大失事ナ
リトノ議論起リシヨリ此ノ葛藤ヲ惹キ出シ若クハ其
前之ヲ拒ミタル者アリシナラハ四月廿七日ノ舉動ハ
則チ敵抗論ヲ主唱スル者ヲ鼓動スルノ原因トナル可
キト事情ニ疎濶ナル者ハ輕々ニ看過シテ注意セサ
リレカ為ノナリト思ヘリ

茲ニビンハム氏ヨリ領收シタル未狀ヲ見テ同氏ハ日
本ノ処置ヲ不可ナリト切言セル者タルヲ知リレカ一
ツモ強迫ノ所為ニ出ツル者ニ非ス而シテ實ニ今此ノ事
ニ臨テビンハム氏ハ其確乎タル咄令ヲ發布ス可キ正
當ノ理ヲ拈出シタレ此事件ニ関涉セル一ニハ亞米
利加人等ハ之ニ服従スルヲ肯セサリシナリ
ビンハム氏ノ主張スル所ハ帝此事件ニ付米人ヲ使用

スルヲニ於テ不滿意ヲ表スル外面一般合理論ノニ
シテ又他ニ銜ム所アルヲ見ス然ルニ詭警ナル慣習ヲ
以テ目ヲ智トスル日本政府中一二ノ官吏タルモノハ
外國公使ノ諍論スル毎ニ皆多クハ嚙嚇ノ所為ニ出ル
モノトシ頗ル之ヲ猜疑スルカ故ニ恐クハ合衆國公使
タルモノ、之ヲ不滿意トシテ論辨スルヲモ亦少夫、
逼迫恐嚇ノ所為ナリト猜察シテ同氏ニ被衣セシムル
モノナラハ余ハ為メニ甚ク之ヲ惜メリ
抑、ビンハム氏ハ固ヨリ日本ハ独立事ヲ行フノ權利アリ
ト認定セル者ナレハ余ハ之ヲ矚震ニ解説セルト欲
スルヲ凝然トシテ滿腔ニ懷ケリ同氏ノ原未著目ト
スル所ハ其合衆國ノ公使タル己レカ義務ヲ全フスル
カ為メニシテ他ノ外國公使及ヒ其前職等ノ毎ニ施為

セシ強麗ナル容喙挿嘴ハ舊轍ニ齧踏スルハ彼レノ衷
情ニ於テ常ニ輝感スル所ナリ是ノ故ニ他ノ外国公使
等ノ常ニ施為シタルハ一己ノ利害得失ニ汲々タルカ
如ク右支左吾強クテ日本ヲシテ其己レノ議ニ從ハシ
メントカノテ故障シ未タ曾テビシハム氏ノ如ク公明
正大ノ意ニ基キ做レ来レル者一人モアールヲ見ス
征臺ノ事起ルニ當テ彼レ居常炳然ト自ラ徽標セル素
行ヲ奉ケテ歩々進ミ来リ而シテ日本政府ヲシテ此ノ役
ヲ弭メシメントシタル効績ハ終ニ敗類ノ結果ニ終リ
其疎カラサル諸輩ノ為メニ異議ニ或ハ之ヲ沮ミシヒ
漸ニ内閣ノ姿ニ至リシモノハ蓋シビシバム氏ノ効績
ニ於テ最モ不幸ナリト謂フヘシビシバム氏ノ本意ハ
果シテ何レニ在ルヤ何人ノ能ク之ヲ保言シ得ヘカラ

スト虽モ蓋シ同氏自ラ事愈擾攪スルニ及シテ其最モ
初ニ當テ先ツ詳カニ事理ヲ覈察ヒスレテ後ニ皮膚上
ノ意見ヲ固持シ畢竟事理ノ曖昧トシテ明クナラサル
所アリト醒悟シタルニ疑ナシト以テビシバム氏ニ面
告スルモ亦妨ケサルニ似タリ然レビシバム氏ノ莫
逆ニ交ル所ノ輩及ビビシバム氏ノ名譽ハ正カニ是ニ
在ト手ニ汗シ心ニ熱シ煩悶スル輩ハ竊ニ之ヲ臆度メ
以為クビシバム氏曾テ日本ノ自主特權タル可キヲ
威ニ保護セシト一般ニ今又毅然トシテソノ定見ノ地
歩ヲ占メ且ツ此事ノ犯例ニ涉ルトセル發告ヲ最モ嚴
刻ニ吐キ出シタレハ彼レ必ス自ラ謂シ我ハ撼スヘカ
ラスノ確實ヲ以テ其身ヲ徽標スルヲ得タリト然リ而
モ唯、波レラシテ此役ノ事理ヲ詳細ニ了會セシメサレ

大
政
官

ヨリレテ竟ニ其名ヲ傷ハレノ愈、其憤怒ヲ激セシメタ
リト此臆度ハ尤其理趣ヲ得タルモノト謂フ可クシテ
且ツ此臆度ヲ以テ宜クビンハム氏ノ本意ヲ推考ス可
キナリ若シ實ニ此臆度ノ如ク然ルハ彼レ其自ラ所
為セシ所ノ当否ヲ預知スルニ由ナカルヘキハ固ヨリ
宜ハナルナリ且ツ彼レ致々煩念頗ル其云為ノ際ニ力
ヲ尽シテ却テ其要處ニ於テハ瞞逆トノ自ラ察スルニ
由ナキモ亦固ヨリ宜ハナリ然レモ日本政府竟ニ外国
事務辯理全權ヲ派出セシ所以ノモノハ己ム可カラサ
ル勢ノ急迫セルモノニシテビンハム氏愈々其偏頑論ヲ
把リテ止マサルカ故終ニ之ヲ理解スル為メ特命全權
ヲ以テ分明ノ解説ヲ與ヘリル可カラストノ心點ヲ起
サシメタルヲ須ク先ツ會得スヘキナリ

此役ニ付キテビンハム氏ノ不可トスル所ハ唯リ亞米
利加人ヲ使用スルヲ肯セサルニ非ルハ明カニシテ其
初メニ當テリテナント、コンマンドルカワセル氏ヲ差
遣ス可キヲ電報ニテ德憑シタルハ則チ其證據ニ
當時未タ必スシモ強ヒテ之ヲ不可トセサレハナリ
ンハム氏ノ始テ宥ム可ラサルノ色ヲ顯シテ抵抗ヲ起
セシ氏ハ猶ホ其例見ニ疎ナル所アルカ如ク畢竟其初
メ華威頓ニ於テ今職ヲ拜セシ日辨知スル所ノモ、未
タ僅ニ一步ヲ進メサリシカ故ナリ三月下旬ノ頃ニハ
彼レ猶ホ此舉ニ關係レタル米人ナル僚輩ノ志向ト致
ラ同シタリシニ四月十八日外務省ニ送致セル書ニハ
頃若横濱新聞ヲ閲セシニ此支那ニ對敵スル舉動ハ深
ク鍛鍊熟察セスンハアル可ラスト我ヲノ及顧セシメ

タル新聞ノ述説ヲ讀了セシト云ヘリ
此横濱新聞ナルモノハ常ニ日本ノ事實ニ於テ訛傳頗
ル多ク且ツ其述説ヲ以テ日本政府ノ舉動ヲ確信スル
ニ足ラサルハ即チ世人ノ批評既ニ已ニ定ルモノナリ
ハビンハム氏ノ智ニシテ之ヲ為メニ眩惑セラレサル
ハ固ヨリ論アリト虽モビンハム氏ハ頻リニ其自説ヲ
主張シテ遂ニゼネラルジヤントル氏及ヒカツセル氏
ニ確答ノ憑證状アル可キヲ要シ即チ其確答昏ニハ今
回日本ヨリ支那ニ對シテ輕忽ニ兵ヲ構フル一挙ハ之
ヲ施スニ當テモ何シノ妨害カ之レアラント西氏ノ印
定セル保証ヲ領收シタリ是レ則チルジヤントル氏及
ヒカツセル氏ノ確答セル明々タル左券ナリ蓋シ此西
氏ハ素ヨリ今回ノ処置ハ支那ニ對シテ構ヘタル企謀

ニ非ルヲ判然ト公言シタルモノナレバ故ニ平常世
人ノ一般ニ訛謬信スルニ足ストノ之ヲ度外ニ置テ省
シサル新聞紙ノ批評ヲ孰レカ眞是孰レカ眞非ト秤量
スヘケンヤ又ビンハム氏ニ於テハ米人ノ有名ナル兩
氏及ヒ日本政府ノ確言セル憑證ヲ信拠セサルニハ非
サルナリ
ビンハム氏ハ以テ信依ス可キノ確答ヲ捨テ以テ信依
ス可ラサルノ新聞紙ヲ取テ第一回ニ記スル如ク此舉
ニ付テハ支那政府ノ應諾状ヲ得ルニ非レハ合衆國ノ
藉民タルモノヲ使用セシム可ラスト主張論辯シタル
其定説ヲ發表シ来レリ是レ或ハ別ニ其意ヲ感觸セシ
メタル他ノ事故アツテ彼ヲシテ此ニ至ラシメタリト
看做ス可キニ近シト虽モ其原因ハ何等ノ事故タルヤ

一モ痕跡ヲ見ルコトナシ惟フニホルモサニ住スル一
種ノ蕞爾タル蕃族ノ部落ヲ結フ地ハ支那政府ノ版圖
中ニ在ラサル水草移住ノ蕃地タルトテ此事實ニ付テ
支那政府ノ再三告示シタル意旨トラビンハム氏ノ全
ク詳知セザリシハ判然ナリ然レ氏彼レ其事實ノ要處
ヲ察見シ来ル可キ所ニ經意セムレテ猶ホ事實ヲ細ニ
解知セリル已レノ妄見ヲ固ク把リシモ亦顯然タリ
日本外務卿ヨリ一編ノ謄書ヲビンハム氏ニ與ヘ支那
政府ハホルモサ蕃族ノ疆土ハ其版圖中ニ屬スルモノ
ニ非スト告示シタルヲ指明セリ然ルニ外務卿ノ與ヘ
タル諷告書ヲ猶ホ鑿タシトシテ本國政府ニ致セル書
中ニハ尽ク此事實ノ意思ヲ錯倒シテ具陳レタル過誤
ヲ為セリ其報知セル書中ニホルモサ島ハ支那政府ノ

版圖中ニ屬スルトテ即チ日本外務卿ヨリ與ヘシ此謄
書ニ付テ知ルヘシト云ヒ然ルニ又彼レ自ラ云テ支那
ノ疆界ハ其北方ヨリ西邊ノ海濱ニ亘ルトテ各レ如此前
後不都合ナル錯謬ヲ記スルヲ以テ殊更ニ此事實ヲ反
覆セシモノト思想スルヲ得ス其日本外務卿ヨリ與
ヘタル諷告書ヲ斯ク誤解シ加之ヲ錯倒シタル所以
ノモノハ此事件ニ付テ彼レ既ニ憤懣抑遏ス可ラサル
ノ心先入主トナリテ此注意ス可キ點ヲモ爾等ニ經過
セシナラン嚮キニ要點ヲビンハム氏ノ為メニ注意ス
可キ懇懇婉曲ニ諭示シタルニ或ハ又ビンハム氏ヲ擁
護スル輩ハビンハム氏ノ本意ノ向フ所其注意ノ寓ス
ル所ヲ實ニ其懇愛ノ心ニ基クモノトナセリ所謂懇愛
トハ我米ノ藉民タルモノ或ハ今此虞忽ナル舉動ニ関

大政言

レ後ヲ遂ニ救フ可ラサルノ弊ニ陥ルヲアラセテ
トシテ懼レシナリ

此一挙タルヤ必當サニ之ヲ目シテ戦ヲ好メル所為ト
支那政府ニ於テハ思料スヘシト豫ノゴンハム氏ハ其
意ニ期定セルカ故ニ先ツ事ノ未發ニ於テ當サニ支那
政府ノ應諾ヲ受領スヘシトセルハ顯然ナリト虽モ嚮
キニ日本政府ヨリ之レニ諭スニ此挙ノ事理ハ固ヨリ
妨害アラストセル明白ナル辯駁ヲ得ナカラ只管ラ之
ヲ盟約国ニ對シテ猥リニ隙ヲ開キ兵ヲ構フル者トナ
レ日本ヲ非理トノミ詰責シタル一個ノ偏頑論ハ姑ク
モ恕容ス可キモト為シ難タカル可シ是レ蓋シ日本
政府ニ對シテハ限ナキ妄冒ノ過罪ニシテ實ニ其處分
ナリト云フト虽モ彼レ自ラ信スル篤シテ其説ヲ飄動

セサル所ヲ以テ見レハ彼レ必ス其心ニ自ラ信シテ以
為ラク我ハ亞米利加ノ藉民タル者ヲ宜シク指導シ其
危害ノ點ヲ去テ安穩ノ地ニ就シ之ヲ保護スルトニ
其本分ノ義務ヲ致シタリト畢竟之ヲ要スルニ彼レノ
視テ以テ危害トセシ所ハ臆想ノ妄見誤解タルニ過キ
サルノミ故ニ日本政府ニ對シテ不覺口ニ過罪ヲ犯ス
トモ寧ロ米ノ藉民ヲシテ危害ノ地ヲ免レシメント勉
メタルハ到底其拙處分ノ形跡ヲ顯スニ至レリ嚮キニ
日本政府此挙ノ事理ニ於テハ固ヨリ妨害アラスト諭
示セルニ彼レ猶ホ之ヲ支那ニ敵シテ構フル兵事ノ計
畫トノミ執拗セルヲ當然ナリトス可キ辭ノ託ス可キ
所アラズ唯此役ニ於ケル事理ノ詳ナルトテ彼レノ聞
見上ニ未ダ解知セサル所アルニ託シテ其過謬ヲ掩飾

スルニ餘リ有リトスルニ足ル可キノ
此時ニ當テホルモサノ蕃民ハ支那政府ノ管轄ニ屬セ
サルヲ支那ニ在ル合衆國ノ委員ハ能ク辯知スル所
ナリ其後ニ至リ在北京合衆國公使ウヰルリアム氏ノ五
月二十八日ノ書翰ニ北京ノ支那官吏ハ日本ノ兵ホル
モサニ上陸シタルヲ認テ一ツモ兵端ノ告知ト爲サ、
リレ由ヲ云ヘリ是ヲ以テ考フル氏ハ支那政府ニ於テ
ハボンハム氏及ヒ他ノ外國公使ノ論議ノ事情ヲ知得
ルマテハ初ヨリ敢テ心ニ干涉セサル証名名理ノ訊詰
ヲ致ス可キ念頭ヲ未ダ曾テ夢想ニタモ起サ、リシナ
リ然レモボンハム氏ハ更ニ二心ナク單純ニ已カ定見
ヲ守テ終始之ヲ把著シ加之彼ノ心ニ於テハ元來此舉
ノ企謀ヲ不滿意トスレハ之ヲ推及シテ又已レノ想察

セシ危害ノ地ニ歩スル米ノ藉民タル者ヲ救援セシト
スル思ヒヲ凝シタリト謂フ可クシテ是ノ故ニ此事ニ
干涉シテ喙ヲ容レ嘴ヲ挿ミタル所爲ハ實ニ失處分ノ
姿トナレリ然リト虽モ此事ニ関シ獨リ挺然トシテ自
ラ衆ニ抽ンテタルヲ以テ唯、恣睢猖獗ヲ肆ニシタルモ
ノニ非ル可ク嚮キニ日本政府及ヒ此事件ニ関セシ米
人ノ僚輩ヨリ諭典シタル事理ノ要点ヲ誤ラセシナル
可シ然レモ波レ又自個ノ意見ニ於テハ敢テ已レノ分
義ヲ失ハスト以爲ヘリ何ントナレハ合衆國ノ公使タ
ル所ノ権力ヲ擁シテ日本政府ノ脚步ヲ攔阻セント力
ヲ極メタル所爲ヲ決テ施セシニ非ス唯、事ニ関涉セル
米ノ藉民ヲ放チ去ラシメント此舉ニ付テ運遣ノ用ニ
供セントスル一二ノ亞米利加船ヲ解散セシメント

大
政
書

ヲ日本政府ニ極言ス可キ所為ニ在ルノミト
ビンハム氏ノ主張セル論ハ其意ニ豫メ思想期定シタ
ル所ト此事件ノ實理ト到底錯違セリ何ントナレハ彼
レ曾テ思惟スル所ヨリモ猶ホ一層深ク之ヲ思惟シ苟
モ先ツ誠告セサル可ラサル不義非理ノ企ヲ為スモノ
ト今回ノ挙動ヲ目スレハナリ是ニ至ツテ一次日本政
府ハ在長崎港蕃地事務全任諸員ニ右一条ヲ報達シ此
一条ニ付テ萬ト考查ノ上当然ノ處分致ス可キ旨ヲ其
首領タルモノニ指令セリ然ルニ蕃地事務全任ノ諸員
等ハ米人等ヲ放テ去ルヲ決テ指令セサリレハビ
ンハト宛モ同地位ニ居レル日本政府ノ一二ノ官吏タ
ルモノ或ハ其妨害ナキヲ主唱シタルカ如クナリシ
總裁大隈重信ハ頭上ニ壓シ来ルカ如ク其擔當ノ責任

甚ク切迫シタリレカハ頗ル此一条ニ付テ心ヲ勞シ思
ヲ苦メテ之ヲ考慮シタルハ知ル可キナリ而メ他ノ蕃
地事務全任ノ各員等ト討論酌議シ終ニ合衆國ノ人民
ヲ此舉ニ與カラシメ之ヲ使用スルモ何ソ萬國公法
ニ抵觸スル処アラシヤト断然決定セリ即チ此決議タ
ルヤ其後華盛頓ノステートメントトノ評定ニ
テモ此一条ハ妨害ナシト決着シタリレカ全ク同一ノ
審判ナリキ又フイシ氏ヨリビンハム氏在上海合衆國
總領事セフルト氏ニ與ヘタル書中ニ説明セレ所モ亦
同一ニシテフイシ氏ノ言ニ曰ク凡ソ其犯罪タルコト
ノ例案ヲ命定スルニハ茲ニ合衆國ト波瀾ノ関係ナキ
國ニ對シテ難ヲ構ヘ兵ヲ交エルノ企謀心スアル者ニ
對シテ而シテ犯罪者ナルモノハ當サニ自ハ其敵國

大
政
言

ノ民ト自ラ思フヘキモノニ依ル可キナリ然ルニ今茲
ニ其实然ル所以ノ事理アリヤ否ヤト此一举ニ於テハ
實ニ然ル所以ノ事理アラサルトハ日本ノ衆庶モ尚ホ
能ク自ラ了知スル所ニシテ支那政府ノ告示ニ於テモ
日本ノホルモサ証討ノ舉ハ事理ノ妨害アルトナシト
シタルハ蓋シゴシハ氏ニ於テモ亦今ハ既ニ之ヲ悟
リ得テ顯然ナラン

却説此紛々ノ一条ニ付テハ是非輕重米テ何レニ歸ス
可キヤ頗ル之ヲ精覈ニ定着セントシテ討論決議ノ考
査ニ甚ク時日ヲ費シ此議略決スルニ及ンテ都督西鄉
ハ口達ヲ以テカツセルワヅソンノ兩氏ニ令レ期約ニ
タニ時ニ當テ出發ノ準備ヲ為ス可シト是ニ於テ遂ニ
ルジャンドル氏ハ此大事件ノ時機ニ臨テ歩ハ鄭重ニ

其處分ヲ管理セサル可ラサルトニ注意シテ出發ニ整
頓ス可キトヲ指揮セン為メ又カツセル氏及ワヅソン
氏ノ領受セル命令書ニ添ユルニ蕃地事務總裁ノ認承
セリトスル裏書ヲ以テセシメントスル目的ニテ其命
令書ヲ一タヒ陸上ニ取リ歸シ為メ夫ノ兩氏ノ乗り組
ミシ船ニ至リ而シテ確然タル准許ヲ稟クルトモナク
レテ今回ノ使用ニ供セラルル僚輩ヲ保護セントスル
目的ヲ以テ斯ク嚴密ニ致セル法式ヲ具證印ヲ得ルマ
テノ間ハ勉メタリキ
斯クテ其認承狀ヲ得ル以前ニ艦裝既ニ備リシニ此ノ
如ク奔走周旋セシカ為メ既ニ多時遲緩ニ及ヒシカハ
宜シク此急速ニ為サニルヲ得サル認承狀ヲハ好時會
ヲ見テ差送ラル可キ由ヲ言ヒ殘シ先ツ一次發船ス可

大
政
言

キ一ヲ船中ニテハ良所置ト思考シタルノミナリシニ
此役ニ従事スル米人等ハ准许ノ命ヲモ受ケズシテ恣
ニ長崎港ヲ開帆シタリトシテ一般ニ流布セシ採ルニ
足リルノ巷説タモ則チ彼ノ深ク事理ノ確跡ヲ知解セ
ズレテ独リ一個ノ臆見ヲ執拗シタル抗辯論ノ胚胎ス
ル元素トシテ今之ヲ記述シ得ヘシ「ボンハム氏ハ到底
公然ト其抵抗カヲ致サント決シタルハ自ラ固守セル
意見ニ而方之ヲ牽強附會セントセシハハ勢ノ当サニ
然ルヘキモノニシテ其勢氣遂ニ日本政府ヲシテ東京
ヨリ別ニ特命全權使臣ヲ發遣セシムルニ至ルハ宜ク
此ノ一糸ノ举措ヲ勾勘スヘク且ツ事ノ既ニ接続茲ニ
及ヘル挙動ノ適當ナルトニ付テ衆論ノ疑團ヲ決着ス
可キヲ以テセリ

特命使ノ任ヲ奉セシムルモノハ即チ大隈ト同階位ニ
テ内閣参議ノ一員タル大久保利通ヲ以テス可シト命
定セラレ此審判ノ嚴然ナルト毅然ナル大久保ノ名
譽ハ則チ其建功ノ基ナリ而シテ竟ニ此ノ如キ一大要
件ヲ能ク辨了シ得タル徵候ヲ其好伎倆ニ附ス可トス
大久保ハ長崎ニ至ルニ及テ直チニ其奉命セル任務ヲ
辨理セント強ノ塵カニ数日ヲ経ルノ後チ滯碍ナク其
事件ヲ辨了シ得タルヲ報セリ此事ニ従事シタル吏員
ハ皆能ク己カ担当ノ任務ヲ遂ケレカハ是ニ於テ大久
保利通ハ都督西郷ニ告ケ都督ノ本務ヲ遂ケシメンカ
為ノ愈々其出發ノ一ヲ確定シテ之ヲ許セリ此時ニ當テ
ルシヤントル氏ハ日本政府ノ目的ヲ助ケンカ為メ東
京ニ歸ランカ寧カ台湾ニ往ンカ兩歧ノ間猶豫セシカ

彼此熟思ノ後的然ノ理ニ随ヒ其意ヲ台湾ニ延クコト
ニ決セシカ猶ホ其頃ルビヤンドル氏ノ東京ニ至ラサ
ルヲ得サル最モ欠ク可ラサルノ要務アリシヲ以テ交
々決定シ遂ニ履タルビヤンドル氏ハ其方向ヲ轉シテ
東京ニ向ヒ大久保モ亦相ヒ踵接シテ東京ニ皈レリ大
久保ノ東京ニ皈リシハ其豫ノ兼約シタル茅ニノ事業
ヲ行ハシカ為ノナリ大隈ハ猶ホ事務ノ大要ヲ整理セ
ントシテ暫ク長崎ニ滞留シ五月中旬ノ頃東京ニ歸リ
本府ノ僚僞ニ相ヒ接見スルヲ得タリ

茅十六回

○前ノ戦争ニ於テ偶然ノ事○首長ノ死○計畧ヲ決ス
○獨立ノ自役兵○疑フ可キ軍律○海岸ニ於ケル村人
ノ性情○山間ニ牡丹人敗北シタル成果○果敢ナル通
辯者○酷烈ナル暑氣○兵卒ノ快楽
都督ノ来レルヲ以テ日本人ト土蕃トノ間タノ情實ヲ
具サニ辨查シ後來土蕃ヲ處スル所ノ判然タル方向ヲ
定メサル可ラスト三月二十三日ニ商議ヲ始メシカル
来屢ニ此考案ニ関涉スル所ノ事故偶然ノ一ニ於テ起リ
シカ商議スルニ随ツテ其事モ次第ニ整定シ別ニ改メ
テ之レヲ處スルノ定規ヲ立ツルニ及ハサリシ牡丹人
ノ倉卒ノ遁走ニ付テ遺落シタル兵器ヲ拾ヒ陣營ニ持
来リシ者アリシカ是レ則チ牡丹種族ノ酋長タルアロ

本
故
言

クノ銃ニシテアロクハ大傷ヲ蒙リタルヲ直チニ発
見シタリ且ツ遺屍ヨリ斬取リタル首級ノ内ニ首長ノ
子息ニ似タルモノアルヲ見出シタルヲ以テ日本人ノ
野蕃ナル所為ヲナセシモ全ク利ナキニアラサリシ夫
ノ寂モ活潑ニシテ其黨與ノ間ヲニ大イニ権力ヲ振フ
年少ノ頭領ハ死シタル一更ニ疑ヒナクシテ其死ハ後
来土人ヲ處スルニ我裨益トナル可キハ必然ノ理ナリ
然レモ都督西郷ハ死體ヲ斬截スルヲ好マサル昔ヲ公
言セシニ曰テ古来日本ノ兵事ニ於テ行フベキ規則ナ
レドモ兵卒ハ再々之ヲ為サ、ル一ヲ體認シタリ蓋シ
斬首ハ全ク日本兵卒ノ間ヲニ始メタルニアラサル可
ク牡丹人ノ例ニ倣ヒ且ツ之レニ酬ムル為メ殊更ニ薩
摩人ヲ誘動シタルモノナル可シ

都督ハ此地ニ来リシ時野蕃民ト戦端ヲ開クハ其願望
ニアラサス成ル可クハ之レヲ避クルノ策ヲ施サント欲
スル趣ヲ直チニ確言シタリシカ然レモ丁度来著ノ前
ニ起リタル偶然ノ事跡ニ依テ今ヤ其目的ヲ達スルノ
場合ニアラサルナリ都督ハ已ニ数日前ニ熟議シタル
如ク土人ヨリ襲撃シタル寂初ノ二度ハ寛大ヲ以テ之
ヲ処ス可シトノ決定ニ同意セシト虽モ第三度ノ襲撃
ハ其規模大イナレハ之ヲ許ス可キニアラサル可シト
覺ユ且ツ之ヲ考察スルニ今日日本人激動セサレハ土蕃
ハ之レヲ微力ナリトシテ輕侮シ終ニ多クノ蕃族連合
スルニ至ル可ク現時抗敵スルモノハ唯牡丹人ト之レ
ニ接連セル土人ノミ日新艦ニ發砲シタルカ如キハ寂
モ瑣末ノ事ニシテ他ニ関係ナキヲ知レリ又容易ナラ

サレ迫撃ノ少クモ二回ハ自役兵ノ輕拳ニヨリテ促ク
シタルヲ屢悔悟シタリシモ現今ノ形状ハ全ク其輕
拳ノ關係スル所ニアラス當時土人若シ斯ク暴動ヲ為
サ、リシナラハ日本人ニ於テモ兵器ヲ用ユル等ノ一
ハ禁シタルヘシト虽モ之カ為ノ兵卒ヲシテ肅然タラ
シムルハ其頃一大難事ナル可キカ故ニ今ヤ可否ヲ決
スヘキ一ニノ攻撃ヲ以テ百事ヲ結局ニ至ラシムル堂
々ノ陣ヲ用ユ可キカ將タ或ハ功績ヲ奏スヘキ一アレ
ハ亦損害ヲモ引出スヘキ僅カノ隊伍ヲ以テ不規則ナ
ル遊撃ヲ屢為サシムベキヤ一問題トナレリ
軍勢ノ後属者ニ其規律ナキ甚クシキモノアリ而シテ
都督ノ是等ヲ制服シタルハ嚴正ナル律令ヲ以テスル
ニアラスシテ寧ロ都督ノ身上ノ名望ヲ以テセシナリ

此属後者ノ一隊ハ大半薩摩人ニテ其體裁半ハ獨立ノ
自役兵ニシテ規則ニ拠リ徵募シタル兵員ヨリ其官等
ニ於テハ稍上等ノモノアリ是等ノ自役兵等ハ軍陣ノ
名譽ヲ得ント欲シ熱心シテ之ヲ追求スル人ナレハ何
時ニテモ機會アルトキハ前頭ニ進ミ出テ若シ斯ル事
件ノ自然ニ來ル機會アラサルトキハ自ラ其機ヲ發セ
ントノ意志アル如クナルカ故ニ制令ノ限内ニ彼等ヲ
抑制スルハ実行シ難キト見ヘタリ譬ヘハ二十一日
ニ踰越ノ了ラナシタル時ノ如ク夫ノ服後セシム可キ
村落ヲ過キ進行スル一ハ更ニ号令アリシニ非サレ
氏敵人ヲ見ルニ至ラスシテ止マル一ハ決テ頭腦ニ感
セサル如クニテ主謀者ノ有無ハ知ラサレ氏終ニ暴進
シタリキ斯ル場合ニ在テハ其他ノ者ヲ後路ニ止マラ

シムルヲ得サルハ固ヨリ論ナク自役兵中多クハ前年
赤帽ヲ得シカ故ニ(軍功ノ榮誉ヲ表スル記号)常備兵モ
亦之ヲ得ント欲スルヲ以テ豈誘動サレカルヲ得ンヤ
右等ノ場合ニ於テモ殊ニ困難ナル險路ノ地方ヲ徘徊
スルトキニハ其間タ常ニ士官ト兵士ト殆ント同等ノ
如クナリシ蓋シ此等ノ形状ヲ見ルトキハ輒近日本ノ
軍兵ノ精練ナル声價モ辨別スルヲ得サルベシ此地
ニハ頗ル古代ノ簡易ナル陣法甚ク適シテ殊ニ至要ナ
ルモノハ勇氣ナリシガ日本人ノ勇氣ハ甚ク盛ニナリ
ト虽モ此氣質ノ善良ナル成分(沈勇)ヲ少シク欽キタル
ハ恨ムヘキナリ
却説二十三日ノ朝日本人ハ其渉ルヘキ所ノ川ヲ横キ
リ廣カリタル天然ノ要害ニ三十三ブロート程近寄りシ

トキ牡丹人突然起リ寂初ニ發砲シタリシハ全ク不慮
ナリシカ故日本人ヲシテ軍律ヲ回顧セシムルハ暇ナ
ク却テ天性ニ任カセテ困難ノ地ヲ脱去セシメタリ砲
聲ノ響キ軍營ニ聞エシカハ前回ニ記シタル如ク直チ
ニ援兵ヲ發シタリ此時琅瑤ノ住民ハ數人粗造ナル兵
器ヲ帶ヒ来リテ言ヒケルニハ共ニ行ヒテ牡丹人攻撃
ノ助力ヲ成サントテ決心シタリト然レ氏日本人ハ之
ニ諭シテ曰ク援助ハ決シテ要セス且ツ日本人ハ琅瑤
ノ土人ト生蕃トノ容貌ヲ識別スルニ未タ充分通曉セ
サルヲ為シ琅瑤ノ土人ノ兵器ヲ持シ徘徊スルヲ見ハ
不快ナル異事萬一起ルモ計リ難シト之ニヨツテ琅瑤
ノ土人ハ止ルニ決シタリシカ蓋シ其隣族ノ蕃民ハ悉
ク牡丹人ヲ以テ固有ノ仇ノ如ク思フカ故ニ此奮發ハ

眞實ナル可シ

牡丹人ハホルモサ半島中ニ在テハ他ニ勝絶シタル家
モ強勢ノ種族ニシテ唯其接近セル隣人ト交和セリ
ナリ余ハ此小戦争ノ地ニ近ク其頃ハ遁去シテ空虚ナ
ル小村ノ以前ノ住民ヨリ聞シニハ(此者等若シ從來ノ
居所ニ止ルトキハ日本人ハ之ヲ牡丹人ト同盟スルモ
ノト思ヒ又牡丹人ハ日本人ト合從スト臆測シ双方ノ
何レニ於テモ死ヲ免カレサレバ此處ニ住スルヲ恐ル
ト余ニ實情ヲ語レリ)牡丹族ノ各人ノ請求ニ從ツテ屢
其所有ヲ出シ尽貢税ヲ納ムベキノ約束アルヲ以テ唯
僅クニ傷害ヲ免レテ住スルヲ得ルノミト又亦昔ノ臣
屬モ南半島ニ住スル蕃民ノ大半ノ如ク牡丹人ヲ壓忌
レテ敵視スルハ疑ヲ容レサルナリ二十一日ノ朝琅瑤

ノ北方六七マイル距リ支那語ヲ用ヒ獨立ノ一村落ナ
ルホンカンノ酋長ヨリ代人ヲ奉タレ盟約ヲ結ビ且ツ
其殖民所ヲ以テ社寮ノ如ク日本人石掘ノ地ト成サシ
トテ請ヒタリア口ク敗北ノ傳説流布スルト齊シク諸
方ヨリ款ヲ送り來ラサルハナク夫ノ深ク用心スル亦
昔モ始メノ躊躇ニ似ス後園ニテ精撰シタル項少ノ進
物(牛鷄ノ類)ヲ以テ本營ニ奉ルヘシトノ趣ヲ報告スト
虽モ争戦己ニ起リタルヲ以テ敵人ト誤認セラレシモ
計リ難シト猶ホ畏懼シテ愚ニモ之ヲ若慮シタルカ爲
ノ先ツ始メニ家畜ヲ送り暫時後レテ奉ル可キニ定メ
タリキ

此遠征ニ付テ上ニ記シタル獨立ノ自役兵中ノ或ル者
奮激シテ活潑ナル事業ニ力ヲ用ヒタル一例トシテ年

少ノ通辨者ノ一ヲ記スヘシ即チ此人ノ所業ハ余ノ親
シク見聞セシモノナリ此通辨者ハ嚮キニ反乱ノ起リ
タル肥前ノ人ニテ親族朋友中多クハ其不良ノ暴動ニ
連累セル者ニテ其内自殺ヲ行ヒシモノモアリシカ同
人ハ嫌疑ヲ蒙リ東京ニ在テ一時嚴密ニ其挙動ヲ看守
サレシニ己レモ之ヲ知り政府ニ對シテニ心ナキ証據
ヲ頭サント欲シ其機會ヲ待チ居タリシカ今度ノ遠征
ニ通辨者トナリテ隨後セン一ヲ請ヒ其命ヲ蒙レリ其
職掌ハ戦闘ノ事ニアラサレトモ自ラ信シテ思ヒケル
ニハ勉勵尽カレテ実効ヲ見ハスハキ機會ヲ見出スル
又ハ之ヲ造リ出スヲ得ヘシト是ノ故ニ到着ノ一二日
後チヨリ私ニ事ヲ企ツルノ計策ヲ種々運ラシ其策ノ
一二ヲ施行シテ殆ント當時官長ハ煩困ヲ醸シタリシ

夫ノ十二日ニ探討兵ノ一隊ヲ誘導センモ同人ニテ又
十七日ニ薩摩人ノ殺害サレシトキモ其景況ヲ見ント
欲シ私ニ内地ニ進行シタリシカ終ニ二十一日ノ兵卒
ノ大胆ナル挙動カ彼レニ機會ヲ得セシメタリ同人ハ
此日速カニ前頭ニ進マント欲スル熱心ヨリ上着帽子
ヲ用ヒスライフル銃ト多量ノ彈藥ヲ持シ出立セシカ
其所業ヲ質問サレシニ依テ度ヲ穢セント欲ストノ趣
キヲ以テ答ヘ(此戲言ハ久シク蝦夷ニ在リシヲ以テ徑
驗シ覺ヘタルナリ)再ヒ見ヘサリシカ夜ニ入りテ三箇
ノ首級ヲ携ヘ本營ニ歸リタリキ余ハ同人自ラ之ヲ斬
截シタルヲ甚ク悲歎セリ而シテ殺戮ノ一ハ兼テ其心ニ
期シタル所ニテ此日ノ卓絶ナル功ヲ奏セントスルニ
ハ他人ヨリ殊更ニ多数ヲ得サル可ラサルカ故ニ(同人

ノ見込ヲ以テスレハ其死殺シタルヘシト悲歎スルハ
固ヨリ至当ノ事ニハアラサルヘシ
廿三日ヨリ暑威再々酷烈ナリト虽モ寢初病卧シタル
者ノ大半當時平愈シタリシハ此程ノ快活ナル戦争ノ
景況カ是等ノ病者ヲ回復セシメタルニ似タリ廿二日
ノ疵傷人ハ未夕善良ナラサレドモ適用マテニ殺ケタ
ル病院ニ入ラシメタリ此疵傷ハ日本ノ其名譽アル
勇敢ニヨリテ蒙リシモノナリシカ遂ニ大抵皆平愈シ
タリ兵卒ノ手當ハ極メテ厚ク全營ニハ便利快樂ノ事
物一モ備ハラサルク歐洲一般ノ軍人ニ日本兵卒ヲ
比較スルトキハシバライト人トシバライトハ古昔以
在民ハ性質柔弱ニシテ常言ハサルヲ得ス余ハ前ニ兵
卒ハ溝渠ヲ鑿ツ等ノ工事ヲ免カレ加之食物ノ調理サ

ハモ自ラ為スヲ要セサルヲ記シタリシカ且ツ食事
ヲ求ント欲シ奔走スルニモ及ハス定マリタル制限ニ
ハ人夫カ天幕ノ周リニ排列シ具食料ハ頗ル豊盛ニ過
キ日々残餘ヲ空シク費スニ至レリ又各自ノ好ミニ從
フテ麥酒其他ノ酒アリ其豊給ハ勤務上ニアルノシナ
ラス綿衣ノ褻衣藁履ノ上靴等モ求ニ應レテ附與セリ
是ヲ以テ之ヲ見レハ兵卒ハ豈快樂ニアラサル可ケン
ヤ此小軍勢ノ更ニ昼夜ノ別ナク放歌笑語シ怡々タル
ヲ見テ余ハ快樂ニアルヘシト信スルナリ而シテ全數ノ
十分ノ九ハ二十歳ヨリ二十五歳マテノ少年ナレハ敵
兵ヲ逐撃スル時ノ外ハ其心寛和閑豁ニシテ爭論等ノ
一ハ夢ニダモ見サリシ又此外快樂ノ一大原因アリ即
チ日ニ歳度トナク近傍ノ川及ヒ海ニ入テ浴スルヲ得

大
改
官

ルカ故ニ身體ノ清潔ヲ欲スル日本人ノ習慣心モ容易
ニ飽カシムルヲ得タリ然レトモ健康保護ノ規則若シ
有リシナラハ極メテ不注意ナルモノアリシ天幕ノ内
外ニ堆積シ置クヲ許サレ棄却シタル食料ノ残余ヨ
リ已ニ大害ヲ醸成セントシタリシカ其害ハ目前ノ事
ニアラサレハ微睡談話等種々ノ嬉戯或ハ競走角抵ノ
類ヲ以テ運動體操ニ換ヘ時日ヲ送ルノ兵卒ハ之ヲ意
ニ関スルコトナク角抵ヲ見ル為メ砂場ニ群集セシハ
殆ント毎タナリシ

第十七回

亦昔及ヒ諸酋長ト再度ノ應接○酋長亦昔ノ舉動○南
方蕃族ノ威力ヲ過當ニ臆算シタリシ事○懇親ナル交
接ノ景況○公平ナル契約○贈物ノ交換
五月廿五日ニ於テ亦昔及ヒ亦昔ト同盟セシ諸酋長ト
第二回ノ裨益アル應接ヲナシタリ其次茅ハ二十二日
ニ山中ノ土蕃ヨリ使者ヲ来シ南方ノ諸種族中ノ寂モ
摧威アル所ノ酋長亦昔軍營ニ来ランテ願ハドモ果
スル能ハサル所以ノモノハ酋長ノ身ニ異事アラント
テ畏ルカ為ナリト趣キテ報シタルカ故ニ其使ヲシ
テ復命セシムルニ日本ノ士官ハ亦昔ヲ信シテ疑ハサ
レハ亦昔ノ領地ノ疆界マテ從兵ヲ率井ヌレテ到リタ
レハ亦昔モ亦同様信任ノ證ヲ示サンテテ佇望ス而ノ

昼夜ノ差別ナク其欲スル所ニ任カセ来ルトキハ何時
ニテモ好ク待遇ヲ成ス可レ且ツ令ヲ下シテ接見スベ
キ地ニ於テハ兵卒ヲ退キ去ラシメ一人モ亦昔ノ出逢
ハサルヨウニ取計ヲ可シト日本人斯ク亦昔ノ出會ヲ
要スルハ種々ノ縁故アリテ敵意アル蕃族ニ亦昔ヲシ
テ日本人ノ企謀ヲ親シク通セシメント欲シ且ツ亦昔
ヲハ保護ス可キトノヲ約シ若レ疑フテ承諾セサレ
ハ其進物ヲ受ケサレ等ノヲモ皆其出會ヲ要スル原因
ナリシ斯クテ使ハ再々来リテ日本人ノ斯ク返答セラ
レシハ期シテ待チタル所ナレハ愈々異心ナキ待遇ニ
相違ナケレハ亦昔ハ社寮ニ来ルハキ準備ヲ為ス可ク
若レシヤカ来リテ誘引セハ即刻ニモ同道ス可レトノ
旨ヲ迷ヘタリシヲ以テ二十四日ニシヤヲ遣リレガミ

ヤ夜ニ入テ歸營シ首長今日来ルヘキ筈ナレト終日ノ
大雨ニ由テ進物ノ家畜ヲ送致シ難キヲ以テ来ル能ハ
ス二十五日ニハ必ス来ルベシト言ヘリ
諸廿五日ノ朝九時ニ亦音到着シ一隊ノ兵卒ヲハ村外
ニ止マラシメノ從者五六人ヲ率ヤテ川ノ對岸ニ待ツト
ノ報知アリシヲ以テ都督西郷將官谷提督赤松亞米利
加ノ士官等其他僅少ノ人数ト共ニ直チニ本營ヲ發シ
社寮ナルニヤノ家ニ到リシカ日光ノ稍暗黒ナル内庭
ニ於テ土人ノ數人腰架ニ倚リテ會見ヲ待居タリシカ
他國人ニ對シ新ニ動クノ心モ今ハ消シテ安堵シタル
ニヤ又ハ部下ノ軍人ヲ率ヤテ責任ヲ一人ニ負荷スル
ノ思慮内地ニ於ケルヨリモ此所ニテハ更ニ弛ミタル
ニヤ初度ノ會見ノ時ヨリモ一層得意ナリシハ判然ナ

り亦昔ハ神色自若トシテ泰然ナル風格アリテ此應接
ノ間タ更ニ心ヲ動揺スルノ痕跡ヲ示サス日本人ヨリ
言出テタル盟約ニ諂從スルノ心モナケレハ亦之ヲ厭
フノ意モナク悠テ心志ノ感動ヲ其顔貌ニ顯ハサ、リ
レ斯ル地位ニ在テ亦昔ノ如ク能ク其身ヲ處スルハ(已
レニ関涉スル利害得失ヲ審思熟考シ克己ノ心ヲ以テ)
決レテ餘人ノ及フ所ニアラスト余ハ明言セサル可ラ
ス亦昔ハ其威權ニ從ハサルノミナラス事類ニ依レハ
爭議ヲモ為ス可キ外国人ニ接シタルハ彼レ生涯ニ於
テ此回カ一度ノトナルヘシ蓋シ此時マテ亦昔ハ自ら
已レク性情ヲ抑制スヘキ所以ノモヲ決メ知ラサリ
レト虽モ輓近ノ景况ハ暗ニ嚴懲セシモノナリ日本人
亦昔ト同人種ノ一軍ニ逢テ之ヲ撃破シ大イニ殺傷シ

テ之ヲ散乱セシメ且ツ向キニ彼カ同盟ノ一人ニテ現
今競敵トスル所ノ酋長アロクハホルモサ南部ノ中心
ニ在ル村落ノ近傍ニ於テ戦死シタルヲ以テナリ是故
ニ余輩ハ縱令亦昔此後ノ交通ヲ固ク拒ミ山堡ニ退去
スル氏又ハ畏服シテ属從セントテ言出ストモ驚愕ス
可キニアラヌ而シテ蕃族ノ威力ハ甚ク過当ニ臆度シ
實際十人ナルモ百人乃至千人ニモ過算シタリシト今
ヤ明白ニシテ一種族ト云フモ一孤村ノ住民ニシテ此村
中ニ男女四百人ヨリ多ク住スルヲ見ルト稀レナリト
斯ル不審ノ起ル氏ハ常ニゼネラルルジヤントル氏ノ
アラサルヲ以テ甚ク遺恨ヲ覺エタリキ同氏ハ曩ニ經
験シタルカ故ニ蕃族大半ノ事情ニ委シク通知スルヲ
得向ノ元來同民ノ此証討ニ自ラ来リテカヲ添エルト

ニ於テハ如何ナル成果ヲ生スヘキヤ更ニ疑惑モアラ
サレハ斯ク詳細ニ知ル人ヲ携ヘ来ルハ至要ナルト
思量シ且ツ同氏ノ如ク充分ニ詳説ヲ集メシモ猶ホ之
ヲ実行ニ試ムルハ一大難事タルベキニ然ルヲ況ンヤ
同氏ノアラサルニ於テハ数年前ニ今ヨリモ好機ノ場
合ヲ得テ同氏ノ集メタル如キ詳説ヲ再ニ集ムルニハ
又新タニ全地方ヲ巡行シ余輩ノ發見シタル所ノ源流
ヨリ拾集スルニアラサレハ他ニ道ナキカ故ナリ此項
余輩ハ悼其篤ノ管下ノ全人口ハ三千ニ過キサルベシ
トノ報ヲ得タリレカ尚ホ之モ過当ナル計筭タルヲ
信スベキ原因アリ之ヲ以テ算スルモ猶ホ亦昔ノ部下
用ニ適スヘキ若ハ甚タ僅少ナルヲ知ル可ク屢々攻撃ニ
抗スヘキ企謀ヲナセシモ詮ナキヲハ亦昔ノ胸中ニハ

充分明瞭ナラサル可カラサルニ已ニ記シタル如ク亦
昔ノ容姿ニ於テハ震慄ノ色ヲ見ス亦昔ノ品行ノ窳モ
著キハ嚴肅ナルヲナリシカ勉メテ為スニハ非スレテ
天稟ノ如ク又其形容動作言語ニ至テハ完全ノ教育ヲ
受ケタル人ノ如クナレ氏純質剛直ニシテ自得ノ風采
アリキ
茲ニ煩雜ナレ氏差シ置キ難キ般々多様ナル會見ニ付
テノ一説話ハ讀者ニ在テハ甚タ須要ナル處ニ非サル
ニ似タレ氏姑ク之ヲ看過スルモ可ナリ儲テ日本人
リ要求セル所望ニハ其眼後ノ誠ヲ自ラ表スルカ為ニ
先ツ第一条ニ於テハ向後決シテ牡丹種族ヲ容匿シ或
ハ擁護ス可カラム而シテ亦昔ノ所領内ニ躲避潜伏ス
ル者ヲハ必ス俘ニシテ獻ムヘキ事第ニニハ亦昔ノ村

大
改
書

落ノ内ニ日本兵ノ自由ニ徘徊ス、キトテ承諾ス可ク
シテ島内尽ク平定ニ及フマテノ間要用トナル交際ノ
厚情ヲ盡ス可キ事第三ニハ頗ル仇隙ノ色ヲ顯ハセル
高滑士種族及ケ他ノ諸種族等ニ諭シテ其犯シタル危
害ヲ悔悟セシム可キ事第四ニハ其沿海ノ諸住所ニ旅
テハ日本人ヲシテ障リナク船舶ヲ碇泊スルヲ得セシ
ム可クシテ日本船ノ水夫ハ薪水ヲ求メシ為メ自在ニ
上陸ヲ得、キ事要スル所ノ請求ハ唯此等ノ數箇条ヲ
リト虽モ首長亦昔ニ再三諭セルニハ従令日本ハホル
モサニ加ルニ如何ナル強迫ヲ以テスルトモ亦ホルモ
サニ向テ如何ナル猛武ヲ以テ示ストモ要スル所ハ即
チ此塵ノ數条ノ緊要ナル誓約ヲ要スルノニ過キサ
ルト云フ保証ヲ以テセリ而シテ又日本ヨリホルモサ

ニ諭示スル所ハ凡ソ諸族民等ニ宥免ヲ得セシムル
ハ首長亦昔ノ稟ニ答ル所ニ依テ處分ス可キモノニシ
テ首長亦昔其族民等ノ順良ナル行跡タルヲ保証シ
テ其首長等ニモ族民保護ノ令状ヲ與ヘ且ツ日本兵ノ
侵撃ナカラシム可キ標章トナル旗ヲ下ケ渡サレ可シ
ト請ヘル各部下ノ良族民等ハ必ス宥免ス可シトノ
ヲ以テ誓ヒタルカ故ニ亦昔ハ應答甚ク沈着ヲ含ミタ
ル様子ニテ前ノ數箇條ノ要問ヲ兼服シ而シテ其犬馬
ノ習ヲ尽シテ協カセント自ラ質言セシヨリモ猶ホ能
ク甘ンシテ尽カレタルヲ見ル可キナリ即チ首長亦昔
ノ應諾シテ言ヘルニハ我カ心ニ於テ諸事總テ明了ニ
會得シタレハ先ツ其誠ヲ表セン為メニ何レノ地ニ限
ラス日本ノ海陸兵ハ其徘徊セント欲スル處ニ任カセ

テ自由ニ經行ス可シト而シテ高滑士種族及ヒ他ノ種
族モ今後日本ノ海陸兩兵ニ對シテ抗敵セサル可シト
ハ思ヘトモ若高滑士及ヒ他ノ種族等ノ日本兵ヲシテ
抗敵者ノアル地ニ導キシナラハ我レ自ラ日本ノ陣營
ニ來リテ波等ヲ破約ノ罪ニ處分スルニ付テハ高滑士
種族及ヒ他ノ種族ヲ族滅センコトニ尽カヌ可シ唯命コ
シ聽ソトナリ然レモ唯西邊ノ海濱ニ住スル諸族ヨリ
依頼シ來ルモノアルトモ西岸ノ住民トハ曾テ交通ノ
好モナク其住民等ノ模様ヲ見ルニ之レト相ヒ關係セ
ハ終ニ果ソ可カラサルノ勢々ヲ醸シ來ル可シト自由
ヲ以テ辭セリ此時日本人ノ告ノルニハ實ニ聞ク如
キノ事情ナレハ其意ニ敢テ快シトセサルモノヲ枉ケ
テ容レヨト言フニモ非ス又其土俗ノ厭忌スル所ヲ強

クテ行フ可シト謂フニモ非ス此等ノ事ハ總テ其意ノ
欲スル所ニ任スト牡丹種族ニ付テハ亦昔ニ於テモ素
ヨリ其種族ヲ廢ニセント欲スルノ心ヲ顯ハシタルハ
判然タルコトニテ而シテ牡丹種族ノ近傍ノ一種族タル
亀仔角種族ヲモ亦同一ニ廢ニセント欲スル心モ全ク
顯然タリ此等ノ種族ハ元來十八蕃種中ノ一種族ニテ
一時ハ亦昔ノ盟約ニ與リシニ疑ヒナシト虽モ全ク悼
其篤ノ支配ニ屬ヒシモノト推察ヒラレタリキ何トナ
レハ亦昔ハ旗章ヲ受クルニ當テ旗數十六本ヲ授與セ
ラル可シト望ムルカ故ニ此兩種族ハ嚮ニ悼其篤ノ支
配中ニ屬セシモノタルヲ知ル可ク其十六本ノ旗ヲ授
ク可キ種族ハ現今亦昔ノ支配ニ屬スル十六部落ノ種
族ノ數ニシテ此兩種族ヲハ置テ其數ニ入レサリシモ

本
文
宮

ノナリト見ヘタリ此會議ハ凡ソニ時間ヲ経テ終リシ
カ會議ノ衆負中案内者代言者ノ外四名ノ随従者ヲ率
キタル酋長ハ一列ノ床椅ニ倚リ日本官吏ノ長及ヒ亞
米利加人ハ諸酋長ニ對シテ平行ニ亦一列ニ坐ラ占メ
知識才能ノ府ト喚レタル通詞人ジヨソソ氏ハ彼ノ
代言者ニ添フテ立テリ總テ英語ヲ以テ談話シタルハ
ハジヨソソ氏皆之レヲ支那語ニ譯セリ其支那語ヲ
亦音ハ十分ニ用ユル能ハサレ氏稍之ヲ了解シ一言一
語毎トニ其意味ヲ理會セル容子ニテ疾キ^{ハク}喉音^{ハク}ノ句調
ニテ奇怪ナル蕃語ヲ以テ返答シ一々之ヲ會得セリ土
音ハ多ク唇ヲ動サスレテ全ク喉ト舌トヲ以テ発スル
言語ト謂フ可シ亦昔ノ言語ハ頗ル急迫ニ發スレトモ
口邊ノ筋ハ全ク動カサルカ如シ而シテ其解スヘカラ

サレ土言ヲ以テ亦昔ト其随従者ト互ニ屢々談シタルカ
故ニ何等ノコトヲ示シ合フカ甚ク疑シカリキ亦昔ノ
言フ所アレハ其随従ノ一兩輩一トタビ之ヲ支那語ニ
澤シジヨソソ氏其支那語ヲ英語ニ澤セリ亦昔ノ僞
鞏ハ吟味ニ興カルモノ少ナカリシカ其僞鞏ノ中一名
タルモノハ高滑士種族ノ惡ハキ狼藉ノ所行ニ付テ
難問アリシ氏頗ル周章狼狽ノ色ヲ顯ハセリ即チ此一
名ノ僞鞏ハ其支配セル二三ノ村落中ニ或ハ高滑士種
族モアル村中ニテ重モ立チタル者ナリシトノ露レタ
ルナリ而シテ此一名ノ僞鞏ハ日新艦ニ向ヒテ砲發セ
シトノ宥免ヲ叩頭シテ願フタリシカ其陳謝スル所ハ
或ル童子ノ鳥ヲ銃射シタルヲ日本兵ハ敵對ノ攻撃ト
誤解シタリシト述ヘタルト慥ニ思惟セラレシト虽

モ此格別ナル場合ニ臨テ此等ヲ難問穿鑿セシテハ望
マシク思レサリシナリ亦昔ハ又己レカ部属ノ為ニ
請願スル所ハ狼藉ナル野戦ノ地ニ近ク接シタル村落
ハ日本兵卒或ハ海岸ニ住セル諸民ノ為ニ乱入サレ
家屋ヲ毀タレシカハ其住民ハ終ニ山中ニ逃避シタル
ヲ以テ斯ル村落ハ襲撃ス可キ目的ノモノニ非サル
ヲ特ニ各兵員ニ告示セラレンテラト云ヒシカハ日本
人ハ之ニ諭シテ曰ク其牡丹種族ニ裁許カ隣接シタル
場處タレハ或ハ牡丹種族ヲ助クルヲモアラシカト胡
散ニ思ヒタルカ故ナリト而シテ亦昔若シ其部下ノ諸
民ニ此等ノ一ヲ報告セシト欲セハ日本人ノ若シ或ハ
其部下ノ諸民ヲ不情理ニ取扱フタルカ如キトアレハ
唯ニ保護ヲ加エルハシナラス莫大ノ償金ヲ與フ可シ

ト是ニ於テ此會議ノ諸事相々整ヒレカハ其時都督西
郷諸酋長ニ與フ可キ贈物アリト諸酋長ニ告示シ即チ
贈物ハ規則正シク此処ニ持出ダシテ各名ニ之ヲ分チ
與ヘタリキ贈與ノ諸物ハ二腰ノ結構ナル日本刀及ヒ
絹布羅紗金巾等ノ包括ニ奇廉ナル細工モノ、品々ナ
リシニ諸酋長等ハ甚ク好メル熱心ヲ以テ之ヲ受領セ
サリシカ猶ホ之ヲ一向ニ嗜欲モナキ偶人ニ與ヘタル
ヨリ寧ロ此鄙野ナル蕃民ニ與ヘタルモ稍可ナリト思
ハレタリ諸酋長等ハ毛皮ノ存セル雜雜等ヲ進物トシ
出シテ之ニ報ヒ而シテ家畜ハ戶外マテハ牽キ来リ夕
レトモ之ヲハ明朝呈スヘシト云ヘリ猶ホ土人ハ賜モ
ノニハ日本酒ノ厘カニ入りタル小樽ヲ添ヘ而シテ又
那ノ三燒酒ヲ盛タル六箇ノ盃ヲ其坐ノ周リニ置ケリ

此會宴ハ夜半過ニ終リタリシカ亦音ニハ一日滯留シ
テ津堂ヲ擬觀スヘシト説キ勸メタレ氏定メテ所屬ノ
氏族モ氣遣ハシク思ヒ待チ説フ可キニ因テ一刻モ早
ク歸村レタキヲ以テ辞シ不日ニ又々再會セントテ約
シテ去レリ

此會宴ハ夜半過ニ終リタリシカ亦音ニハ一日滯留シ
テ津堂ヲ擬觀スヘシト説キ勸メタレ氏定メテ所屬ノ
氏族モ氣遣ハシク思ヒ待チ説フ可キニ因テ一刻モ早
ク歸村レタキヲ以テ辞シ不日ニ又々再會セントテ約
シテ去レリ

第十八回

内地ニ入ラントスル策
○着手ノ困難ナル事
○土蕃
將兵士ヲ豫算スル事
○先導者ノ報告精細ナラサル
事
○諸酋長ノ交際ノ景況

斯クテ次ニ企テタルモノハ何等ノ事ナリト云ヘハ兵
ヲ四方ニ分テ内地ニ侵入シ夫ヨリ土人ヲ逐ヒ散ラシ
彼等ノ塞柵ヲ奪ヒ取リ終ニ島ノ南方ニ赴キ其地ノ要
路ヲ遮リテ土人ノ往來ヲ妨ケントスル是ナリ然レ氏
之ヲ為サントスルニ地勢天險ニシテ我兵足跡ノ能ク
及フ所ニアラス而ルニ敵兵ハ斯ル險阻ヲ事トモセス
出沒炮撃聊カ意ノ如クナラサルハナシ加之土蕃住所

大
效
官

ノ模様ハ勿論南ホルモサノ地理ハ如何ナル景況ナル
マ總テ詳ナラス但シ是マテ斥候ノ云フ所ニ由レハ不
便ハ固ヨリ不便ナリト雖モ左ノミ意トスルニ足ルモ
ノナシト故ヲ以テ此言ノ虚妄ニ属セントハ夢ニモ思
ハサル所ナリ是時西海岸ノ土人支那語ニ通スルモノ
数人アリ來テ種々ノ談話ヲ為セリ然レモ彼等ノ中未
タ一人モ内地ヲ自在ニ遍歴スルヲ許サレタルモノ
アラサルカ故ニ自然見聞モ亦淺クシテ此事ニ就テハ
更ニ談論不能ク及ブモノナク唯其説ク所大約已レノ
部族ニ亘リ我部族ハ其数甚タ少ナリト雖モ其強弱ヲ
論スレハ比隣ノ族ヨリ一等強勇ナリナド飽マテ已レ
ノ部族ヲ誇レルノ類ナリ又外國人ピツケリンホーゲ
及ヒゼネラールルジヤンドルノ各氏ハ親ラ山川ヲ拔涉

シテ内地ノ景況ヲ探ラントセシニ故アリテルジヤン
ドル氏ノ此地ヲ忖リシヨリ終ニ其効ヲ果サス此回余
輩ノ探索スルニ及テ始テ琅瑤ノ名代人ハ随分信義ヲ
以テ余輩ニ對スルト云フヲ知レリ因テ琅瑤人ニ謂
テ曰ク今我日本人ハ目指ス所ノ敵人ヲ獲ンカ為メニ
此地ニ來レルモノナレハ遅速ハ免モ角必ス之ヲ我ニ
告ケヨト此時琅瑤人ハ詐ヲ以テ日本人ハ我等ヲ或ル
術中ニ陥シ入レンモ知ル可カラスト疑惑ノ念止マサ
リシカ暫ク熟思ノ後テ遂ニ我意ニ從ヒ夫ヨリ各相走
リテ各部各種族ノ地理多少ヲ探レリ是レ余輩ニ其大
略ヲ知ラセンカ為メナリ爰ニ又琅瑤谷ハ十八部族ニ
テ各之ヲ所有セシカ其殖民ノ長タルモノ、豫算表ニ
從ヘハ日本人到著ノ時ニハ其地ノ人民戰ヲ事トスル

モノ都ヘテ二千三百六十人アリ即チ左ニ記列スルカ
如シ

ポトタン 二百五十人

サワリ 二百二十人

クスクト 一百九十人

マンツイ 一百七十五人

クチライ 一百六十五人

パチンデ 一百六十人

パコルツト 一百五十五人

シヤプリ 一百四十二人

オサンタオ 一百三十人

ロプト 一百二十六人

チナカイ 一百二十人

リシケル 一百十四人

バヤ 九十人

ペイグ 八十六人

夕イ 七十四人

コハタン 六十人

チクシヤ 五十三人

コハルエツ 五十人

右ノ算用ハ猶ホ多キニ似タリ而シテ其数ノ細カナル

ヲ以テ疑ヲ容レサルヲ得サルノ理アリ然レハ是ハ十

分ノカヲ盡シテ作レルモノナルカ故ニ疑モナク嘗テ

得タル所ノ物ヨリ稍正シキヲ明カナリ蓋シ日本人ニ

對シテ戦ヲ為サシノ慥ニ知ラレタルモノハ獨リ牡

丹、亀仔角ノ蕃民ノミ其餘ノ部落ハ各同盟ヲ結ビ彼等

大政

ト同情相憐ムノ心ニ於ケルカ如ク思ヒタレハ此事果
シテ然ルヤ否ヤ時ニ臨ムニ至ルマテハ判然知ルヲ
得ス察スルニ彼等ハ他日已レノ利トナルト一層分明
ニ知ラル、マテハ退テ其身ヲ保チシテ明カナリ又琅
瑤ノ記録果シテ誤リナキトスルモ今ハ其人数三百七
十五人若クハ四百人ニハ過キサレヘシ如何トナレハ
五月二十二日ノ戦争ニ於テ即時ニ殺サレ或ハ重創ヲ
被リテ終ニ死ニ至ルモ、都マテ三十人其餘ノモノハ
復タ他日ノ戦闘ニ從事スルヲ得サルカ故ナリ加之此
人数ト雖モ其用フル所ノ兵器ハ果シテ粗造ノ物ナラ
ント思ハルレハ必ス何ノ用ニモ立サルト疑ナシ唯其
真ニ強シトスルモノハ地勢ハ頗ル險ナルカ故ニ我兵
ノ進行甚ク難キヲ以テナリ因テ思フニ蕃族等必ス此

天險ヲ恃ミテ内地ノ塞柵如何ナル強勇ノ兵ト雖モ
能ク之ヲ破ルモノナシト思ヘルナラシ
又前文ニ言フ所兵士ノ数ハ甚ク疑フ可キノ理アリト
虽モ唯フニ各部ノ兵数極メラ精細ニ記セルモノカ果
シテ能ク然ラントキハ此最モ知ル可カラサルノ地ニ
於テ住スル所ノ人民ヲ近年詳カニ探索セントスル人
々ハ必ス一驚ヲ生ス可シ是其地ノ最モ強勇ナルモノ
ハ其種族ニテ甚ク少ナキヲ知ルカ故ナリ試ニ見ヨ
高滑^{ウツ}士部族ハ先キニ「ロ」ト号船ニ醜酷ノ拳動ヲナシ
猶又「ハルト」トフォルド及ヒ「ワイオシ」ト号ニ害ヲ成サン
トセシ者ナレハ其人数ハ頗ル僅少ニシテ他ノ種族ヨ
リ最モ少ナキト前ニ記セルカ如シ又悼其篤ノ如キモ
其晚年ニ及テハ南半島残ラス彼ノ統轄スル所ナリト

思ハレシニ是唯一小里ノ頭人ノミト是等ノ不都合ナ
ルコトハ後ニ至テ分明ナリ即チ高滑士族ハ其性甚ク戦
ヲ好ムヲ以テ其風聞頗ル勇悍ナリト又悼其篤ハ其性
政事上ニ長シ是ヲ以テ衆人ノ尊崇ヲ得ルト雖モ其實
ハ彼ノ實カヲ以テ其尊崇ヲ得ルニ非スト云フ如何ト
ナレハ其行ヒタル權威ト云フモノハ一トシテ子孫ニ
傳ハラサリシヲ以テナリ抑高滑士部族ノ有名ニナリ
タルモノハ必竟偶然ノ事ヨリ出タルモノニテ若シ口
トバ船ノ他ノ海濱ニ於テ破損セシハ必ス他ノ部族ニ
於テ之ヲ捕ヘ夫ヨリ有名ニナランコト疑フ可キニ非ス
然ラハ則チ從來信ス可キノ地ト思ヒシ所ニ於テ得テ
此報告ト雖モ今ハ甚ク信ス可ラサルヲ以テ悉ク之ヲ
抛擲スルヲ肝要ナリト又悼其篤ノ領分ト雖モ通常察

スル所ノ如クニ非ラス曾テ牡丹社ハ悼其篤ノ法度ニ
服從セシカ今日ニ至テハ甚ク之ニ信服セス且ツ諸部
族ノ同盟モ畢竟一時外侮ノ為メニ結ヘルカ如シ蓋シ
近日ノ景況既ニ此ノ如キカ故如何ニ之ヲ見ルモ實ニ
規則正シキ同盟ニハアラサルナリ又サワリ社ノ酋
長亦昔ノ權威モ前キニ悼其篤ヨリ任セラレタル權利
ヲ終ニ保有スルコト難キニ至リ唯牡丹社ヲ除クノ外四
隣ノ内ニテ最モ勝レタル部族ノ酋長ノ如ク其地位ヲ
有スルノミト云フ蓋シ此最後ノ報告ハ前キニ得タル
所ノモノヨリ一層確實ナル如クニ思ハルハナレハ亦
昔ハ勿論其他ノ酋長ト雖モ唯自己ノ村落ノ外ニハ權
威ヲ有セサルコト知ル可キノミ

ニ加フルニ敵人ヲ侵伐スルヲ得ハ此上モナキ大利ト
云フ可シ然レモ余ノ考フル所ハ一二ノ熱中ノ人ヲ除
ケハ未タ一人モ此ニ意ヲ注クモノナカラシカト牡丹
亀仔角及ヒ其近傍ノ事情ヲ探ランカ為メ是迄種々ニ
思ヲ運ラセシカ是ニ至テ終ニ三縱隊ヲシテ敵ノ中央
ニ派出セシメシヲ定メタリ夫ヨリ其兵ノ到ラント
スル道路及ヒ作事ノ計ヲ取り定メ彌六月一日ヲ以テ
派出ノ期日トセリ尤モ之ハ是ヨリ以前ニ於テ為ス可
キ筈ナリシカ二十四日ヨリ又々大雨注クカ如ク降り
出シ之カ為メニ道路泥濘膝ヲ没シ川流悉ク漲リテ通
行甚タ困難ナリ故ニ止ムヲ得スシテ遂ニ是ニ至レ
ルナリ實ニ雨水ノ困難ハ唯是ノミナラス陣営中ニ在
リト雖モ終日煩悶ニ堪ヘス抑此地ノ暴風雨ハ誠ニ奇

異ナリトス可ク余ノ目撃ヲ以テスレハ暴風暴雨卒然
トシテ起リ凡ソ二三時間程ハ實ニ名状可カラサルノ
勢ニテ之ニ加フルニ炎熱燒クカ如ク最モ堪ユ可カラ
サルハ昼間一時間ナリ既ニシテ大水平地ニ漲リ夜ニ
入テ猶ホ止マズ但シ熱度ノ交代ハ稍減スルニ至レリ
右ノ勢ナルカ故ニ天幕ハ一トシテ風カヲ支フルモノ
ナシ是ヲ以テ天幕ニ據リ風雨ヲ凌ニテハ陣営ニ於テ
モ早クヨリ其望ヲ絶テ苟モ雨傘ヲ有スルモノハ支ヘ
難クモ之ヲ用ヒタリキ天幕ハ既ニ幾處トナク破損シ
テ雨水盛ニ之ヨリ漏リ隨テ日光モ同シク侵入スルヲ
以ナリ然ルニ余輩ハ覺ヘス此雨傘ノ下ニ立テ遂ニ熟
睡ヲ結ヒタリ嗚呼天下廣シト雖モ如斯ノ事ハ陣営中
未タ曾テアラサル所ナラン

斯クテ暴風暴雨連日打續キ六月一日ニ至テ始メテ快
晴ノ天日ヲ見ルコトヲ得タリ是ヨリ以前ハ余輩ノ為ス
所ノ事ハ各三時間ヨリ多クハ為スヲ得ス其為ス所ノ
事ハ大抵日本ノ兵士ニ已ノ信義ヲ明カサシカ為メ親
ム近傍ノ土蕃等ト通商ノ方ヲ立シトスルコトナリ兵卒
等ハ土蕃ノ乾物ヲ所持セルヲ知リシヨリ思ハスモ土
蕃ヲ勵マシテ交易ヲ為サントシ大凡ソ土蕃ノ賣リ物
ハ人ノ健康ヲ害スル物多カリシカ其中薩摩芋ヲ以テ
釀造シタル焼酎ノ殊ニ能ク捌ケルコトハ實ニ云フニ忍
ビサル所ナリ此小賣商人ノモノ共來テ群ヲ成シ甚々
活潑ニシテ大声ヲ張り上ケ謡フテ物ヲ賣ルコト恰モ
倫敦フイニョク細育ニ於テ永ク之ヲ學ヒタルカ如シ土人等ハ至
テ人命ヲ害スル「サム酒」ヲ携ヘ來リ之ニ加フルニ「カシ

チ」餅類鶏卵鳥肉魚類薩摩芋等ナリ又或ル時ハ「バナ
ナ」ハ「バナナ」ノ類ヲ持チ來ルコトアリ然レハ大抵此
等ハ北部ノ産物ニシテ當所ニ生スルモノニハ非ラ
ズ爰ニ又土人ト日本人ト通信スルコトハ意外ニ困難ニ
アラズ土人ハ少々ナレバ支那字ヲ解シ又日本人ハ早
クヨリ支那字ヲ用ヒ居ルカ故ニ其紙上ニ書キ或ハ砂
上ニ書キシ事ヲ容易ニ理解スルコトヲ得タリ言語ノ如
キハ更ニ通セサルハ勿論ナレバ土人モ又目ニ見解セ
シモ余輩ノ言フ所ヲ耳ニ曉リ得サルコト甚々笑フニ堪
ヘタル有様ナリキ蓋シ土人ハ之ヲ以テ方便又ハ託言
ナリト思ヒシナラン如何トナレハ土人等ハ何事ト雖
モ絶ヘス話説スレバ日本人常ニ一声ヲ發セサルカ故
ナリ又兵卒町人等ハ賣買約定ヲ取結フ時動モスレハ

砂地ニ至リテ平滑ニ之ヲナラシ指頭ヲ以テ賣買ノ約儀ヲ書キ以テ其意ヲ通セシムルヲ甚夕面白キヲナリシ或ル時彼等カ其拙キ手ヲ以テ何カ想像ノ印ヲ書ケリ斯ル場合ニ在テハ意中ノ誤解ヨリ妙ナル事ヲ致ス一往々之アリ又砂上ニ於テ一ツノ詞ヲ畫キ示ス時一方ノ人既ニ之ヲ理會スレハ直チニ手ヲ以テ之ヲ拂ヒ消シ次ニ其後ノ詞ヲ畫ケリ琅瑤ノ土人ハ最初余輩ノ著セシ頃ハ手真似身振ヲ以テ其事ノ由ヲ互ニ通スルヲ喜ヒシカ今ニ至テ彼等ハ大イニ此事ヲ嫌ヒ殆ント之ヲ止メントシ又今ハ彼等モ辮髮ニ光澤ヲ帶ハセ束手シテ有福ノ人ト為ラントノ如キ願ヲハ全ク絶チ大抵如何ナル事ナリトモカニ及ハニ限リハ自身ニ勞力セントスルニ至レリ土人ニテ薙髮ノ人アリシカ其人

ノ心ハ忿怒ヨリ熱愛ニ變スルヲ常ニシテ余ハ既ニ一兩度之ヲ語リタリ此人螢火程ノ火ヲ裏ミニツノ籠ニ賣物ヲ入レ之ヲ擔ヒテ笑フカ如ク又悲シムカ如キ聲ヲ發シテ陣屋ノ中ヲ徘徊シ他人ニハ商人ノ如ク見セテ付火ヲ為サントノ心ナルカ然レニ全ク狂人タルト明カナルハ後ニ畧説セントスル事情ノ如シ頃ハ五月ノ中旬ナリキ或ル日此人一艘ノ小舟ニ乘リテ海岸ヲ離ル、一凡ソ半里程ノ所ニ我船舶ノ碇泊セシガ來リテ細カニ事ノ様子ヲ伺フトハ彼ニ於テ最モ殊勝ノ事ナルヘシ彼レ既ニ我船舶ノ傍ニ來レル時余ハ有功丸ノ甲板ニ在リ其容良何事ヲモ為シ得サルカ如ク見スレニ終ニ其實ヲ裏ミ得難ク見エタリ此時不意ニ碎屑杯ヲ我船ヨリ抛チシカ直チニ彼レカ光リ輝

キタル頭上ニ落テ彼レ大イニ怒リ忽チ我船ニ上リタ
レ其為シタル人ノ分カラサルヲ以テ益憤念ニ堪ヘ
難クヤアリケン舌頭収々トシテ惡言ヲ鳴ラシ終ニ船
將ノ室ニ入レリ偕テ此船將ハ元來「カル」ヲ取ルヲ好
ミ此時モ一心不乱ニ之ヲ為シテ更ニ之ヲ知ラハ彼レ
ハ戸邊ニ身ヲ靠テ、頻リニ不平ヲ鳴ラシタリト雖モ
眼ハ「カル」ト云フモ「ヲ」見サリシナラシ此時始メテ之
ヲ見シヨリ其容貞体形ハ最前ノ如ク怒リシマ、ナレ
氏精神恍惚トシテ其怒リ大イニ減少シ胸中ハ何カ甚
タ樂シキ様ニ見エタリ察スルニ斯ル遊ハ彼等ノ常ニ
為ス所ノ遊獵ノ銃砲ヤ薩摩芋ノ戯レヨリ遙カニ面白
カラシト余カ言ヲ俟スシテ知ル可キノ彌見ルニ從

テ彌、最前ノ怒リヲ忘レ凡ソ半時間程ハ無言ニテ立チ
見入りタリシカ後遂ニ何事ヲモ為サスシテ退ケリ因
テ謂フニ西洋各國文明ノ元素ハ臺灣人ノ如キニモ自
然其樂ヲ及ホストヲ証ス可キニ足レリ
爰ニ又内地ニ入ラントスルニ其案内者ヲ得ルヲ甚タ
難シ是レ全ク熟蕃共ハ僅カニ山中ノ土蕃ト親ヲ通ス
ルノミナルカ故ニ生蕃ヲ非常ニ恐ル、ヲ以テナリ之
ニ加フルニ甲ノ地ヨリ乙ノ地ニ至ルマテ若干里アリ
ヤ又幾日ヲ經サレハ達シ難キヤ是レ亦分明ナラス蓋
シ土人等ハ余輩ノ要スル處ニ相合フ尺度時刻ノ據ル
ヘキ基本ナキ故ニ只言フ我等ハ支那ノ外ニ在ルヲ以
テ一里トハ何ヲ指シテ言フコナリヤ更ニ語ルヘキ由
シナシト又彼等ハ極メテ單一粗魯ナルモノ、外ハ決

太
改
官

シテ時限ヲ算フルノ名ナシ故ヲ以テ派出ノ時限ノ如
キモ唯、其大概ヲ察スルノミ其里程ヲ計ルカ如キモ亦
タ同日ノ論ニシテ其地ニ到ラシニハ半日ニシテ某ヨ
リ某ノ地ニ到ラシニハ一日程ナリト云ヒ又某村ヨリ
某村ニ到ルニハ朝飯後ヨリ出テ晚餐ノ頃ニハ到ル可
シト云フ右ノ如キ曖昧模糊タルハ蓋シ軍事ニ於テ
決シテ要シ難キモノナリ若シ之ヲ顧ミスシテ牡丹社
ヲ圍ミ伐ツカ如キ其事果シテ徒事ニ屬センハ必然ニ
シテ必竟斯ル事柄ハ里程時限等極メテ細密ニ熟知セ
ル上ニ非サレハ能ハサルカ故ナリ然ルニ日本人ハ多
年西洋ニ就テ兵事ヲ研究セルヲ以テ斯ル輕卒ノ事ヲ
ハ未タ曾テ一度モ為サハリシナリ
日本人ハ大ニ土人トノ關係ヲ擴メ五月廿五日以後

ヨリ其駐在スル所ノ近隣ノ土人ト交際スルヲ限ラ
ス本日亦昔及ヒ其黨ノ來ルヲ報告アリシヨリ若年
ノ士官等直チニ内地ニ於ケル遠キサワリトナル村落
ニ赴ケリ既ニシテ此士官等ハ其地ヨリ立チ歸リ復命
シテ曰ク彼ノ地ニ到リシニ其土ノ人民等ハ極メテ余
輩ヲ懇切ニ待遇シ且ツ其道路ニ於テモ一ノ困難ニ遭
フヲナク而シテ其地ヨリ猶ホ進マントセシニ之ヲハ
忠告シテ行クヲ勿レト云ヘリト
五月廿九日ノ早朝ニ亞米利加合衆國ノ瀛船「モノカシ
」号ノ海濱ニ來リ然レニ海岸トハ一ノ通信ヲナサス
暫時ニシテ出帆セシカ此時ニ當テ海水甚ク淺ク風威
亦軟々タレニ其方向ヲ考フレハ西方ヨリ吹キ來レル
ヲ以テ此處ニ碇泊セルトスルモノハ唯、日本ノ兵船一

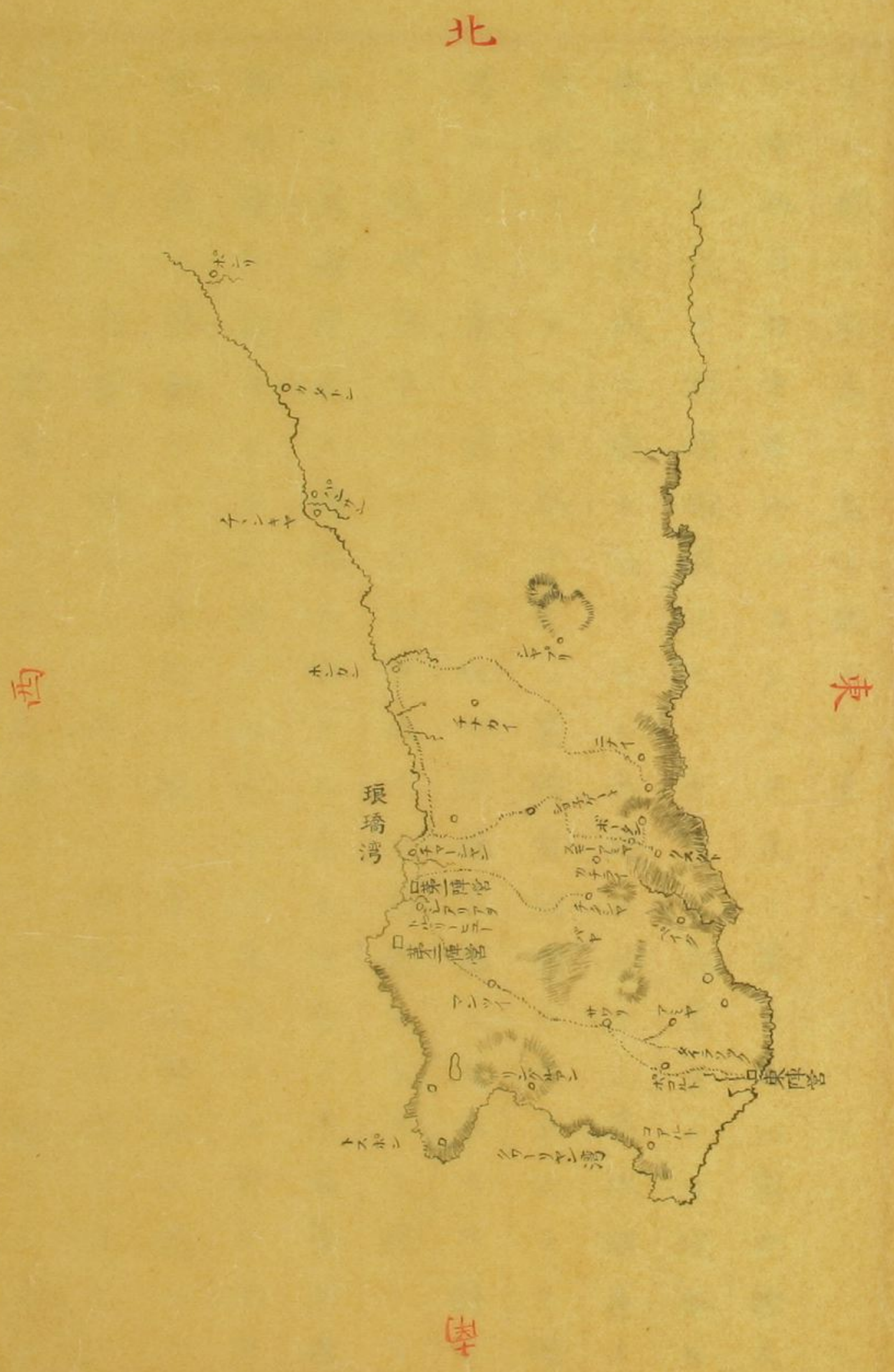
艘ノミニシテ其餘ハ悉ク蒸氣ノカヲ増シテカノ及ハ
ニ限リハ瞬時モ早ク無難ノ地ニ到ラシトヲ勤メタリ
キ察スルニ「モ」ノカシ「」号ハ必ス非常ノ危険ニ遭ヒシ
ナラン如何トナレハ琅瑯灣ニ於テハ天氣甚ク恐ルハ
キ者ナリシカ故ナリ蓋シ此船ノ來ルマ唯此地ノ景況
ヲ伺ヒ且ツ合衆國領事官一人ヲ乗セテ之ヲ廈門ニ送
ラシカ為ナルニ領事官ノ上陸スル好機會ヲ得サリシ
ハ實ニ惜ムヘキコトニテ若シ此時上陸セシナラハ日
後其為ス所ノ失錯ヲ免ル可キ實況ヲ探リ得タリシナ
ル可シ

第二十四

台湾島地圖ノ不十分ナル事○内地へ進入スル事○
道路川流ノ危険ナル事○兵卒溺死ノ事○三縦隊派
出ノ事○勞カシテ進行スル事○夜服ニテ軍陣ヲ取
リシ事○石門ニ達セシ事

台湾島ノ地圖ハ從來一トシテ明詳ナルモノナク殊ニ
南半島ノ如キハ親シク其地ヲ經歷セル者ニアラサレ
ハ今日ニ至テモ猶未ク知ルモノ鮮シトス蓋シ此地ノ
事ニ就テハ從來之ヲ言フ者鮮ナク之ニ加フルニ各人
種ノ住居セル村落ノ位置スラ今ニ記載スルモノナシ
其尤モ甚クシキモノハ海岸ノ輪廓ト雖モ明細ナルモ

ノナシトス實ニ此海岸ノ輪廓ハ常ニ神速ノ變遷アリ
 テ殊ニ諸河口ノ近所ニ於テハ最モ甚シトス蓋シ之ニ
 因テ其輪廓モ自ラ久シク地圖ノ上ニ存スルヲ得スト
 雖モ然レモ注意シテ之ヲ備ヘサル可カラズ大凡ソ海
 岸ノ變遷ハ數年ノ間ニ屢之アルモノニテ航海者ノ常
 ニ奇異ノ思ヲ致ス所ナリ但シ數百年ヲ經ルニ從テ蒼
 海モ却テ陸地トナルヲアリ實ニ奇シム可キモノナリ
 爰ニ一例ヲ舉シニ一千六百三十年(寛永八年和蘭人此
 地ニ來リ一小島ノ上ニ「セランゲア」ト云フ台場ヲ築キ
 シカ當時此島ト台湾島トノ間ニ相隔テ、一ノ海峡ア
 リシニ今日ニ至テハ兩島相連接シテ全ク一島ト成レ
 リ元來台湾島ノ名ハ支那ノ名ツケシ所ニシテ實ハ「ゼ
 ランゲア」ト云フ台場ノアル島ヲ云ヒタリシカ今ニ至



テハ終ニ全島ノ名ト成ルニ至レリ
一千八百七十年ルジャンドル氏ノ著ハセル圖ハ世人
何レモ之ヲ詳明確實ノモノナリト珍重スレト現今日
本人ノ征伐ヲ成サントスル土地ニ付テハ其地理甚々
分明ナラサルヲ以テ是レ豈確實詳明ナリト云フヲ得
可ケンヤ余ハ前キニ内地ノ模様ヲ詳ニセンヲ計リ
シカ途中危険アルヲ以テ大イニ困難ナルヲ説ケリ
故ニ東海岸及ヒ内地ニ於ケル土人住居ノ位置等ヲ確
實明瞭ニ説カンヲニ於テハ大イニ失望スル所ナリト
雖モ若シ拳動アレハ其起ル所ノ事ハ支那語ニ通スル
人民ヨリ報告ヲ得ラル、限リハ其報告ニ從テ土人ノ
位置ノ最モ肝要ナル事ハ荒増ナリト氏之ヲ記セントス
而レ氏是レ唯、全ク其大概ヲ教ユルノミニシテ其山川

地理ノ事ニ係ルモノヲ言ハントスルハ今ニ至ルマテ
思ヲ起サバ爾所ナリ
六月一日ニ於テ牡丹及ヒ龜仔角ヲ伐タンカ為メニ凡
ソ兵卒五百人ヲ以テ余輩ノ居ル處ニ派出セシメタリ
此日ノ朝ニ於テハ尚ホ大雨甚クシク勢ヒ實ニ益ヲ覆
スカ如クナルヲ以テ今日ノ事果シテ十分ノ利ヲ得ル
ニ至ルヤ否ヤ甚ク疑ヒ斯クテ兵卒等ハ其地ヲ指シテ
出テ往キケルカ川流悉ク漲リ勢亦急ナリ此時一番ニ
渡ラントセシ日本兵士ノ中不幸ニシテ水勢ヲ支フル
ヲ得ヌ終ニ下流ニ押シ流サレ溺死スルモノ一人アリ
シカ其餘ノ兵卒等ハ難ナク前岸ニ達シ遂ニホシカン
ニ到リシ時六日既ニ午後ニ及ヘリ偕テ此地ノ海岸ハ
固ヨク支那人ノ後裔ノ住居スル所ニシテ此人民ハ日

本人ヲ待ツト甚ク友情アルカ故ニ此地ノ土人トハ戰
争ヲ成スノ準備ヲ為サ、リシナリホシカンノ頭人ハ
先キニ久シク陣營ニ來リシ者ニテ日本士官等ニ謂テ
曰ク宜シク此地ヲ以テ恰モ社寮ノ如ク戰時ノ根據ト
ナス可シト云フ蓋シ此ホシカンノ地ハ全ク支那ノ領
分ニアラスシテ獨立ノモノナリ實ニ支那帝國ノ威權
ノ實地ニ行ハル、モノハ二十五里先キナルボシリト
云フ所マテニテ其餘南方ニ及ハサレナリ
本日夜ニ入りテ雨水漸ク熄ミ天明ニ至テハ全ク快晴
ニ及ヒ天氣甚ク清明タリ然レモ却テ暑熱ノ甚クシキ
ヲ以テ亦快晴ニ過キタルカ如ク覺エラレタリ斯クテ
夜ノ明ルニ至ルト齊シク速カニ第二番ノ兵卒等凡ソ
三百人程石門ニ向テ出テ行キタリ蓋シ此石門ハ五月

廿二日ニ於テ小戦争ノアリシ所ナリ此兵士モ亦不幸
ニシテ昨日兵士ノ溺死セル所ニ於テ又一人溺死セリ
去レテ其餘ハ無難ニシテ正午ニ終ニ石門ノ入口ニ達
シ暫ラク此地及ヒ其近傍ニ留マリタリ
又第三縦隊凡ソ四百人程ハ翌日陣営ヲ出立シテ西南
ニ向ヒテクシヤヲ指シテ進行セリ蓋シ此等ノ相約シ
タル一般ノ目的ハ即チ左ノ如シ抑敵ノ本陣ハ何レノ
地ニ在リヤト考フルニ大凡ソ牡丹及ヒ亀仔角ナラン
ト知ラレタリ又牡丹及ヒ亀仔角近隣ノ地ハ彼等之ヲ
有シ且ツニナイノ如キ北道筋モ是レ亦彼等ノ有スル
所ノ由ナルカ故ニホンカニニ在ル兵士ハ將官谷之ヲ
將井ヲ本月二日早朝ヨリニナイヲ指シテ出立シ可成
ク速ニ牡丹社ニ下ラントセリ又チクシヤノ兵士ハ

提督赤松之ヲ引卒ニ亀仔角ニ向テ出陣セリ又中軍ハ
都督西郷之ニ將トシテ石門ヨリ進ミ險ヲ冒シテ成ル
可クハ牡丹カ或ハ亀仔角ニ到ラント期セリスクテ
此道路ハ危険ノ山徑ニシテ天然ノ障礙甚ク多キノミ
ナラス之ニ加フルニ土人等種々ノ妨ケヲ為シ置キタ
リシヲ以テ其難苦實ニ言フ可カラサルノ有様ナリ其
目的トスル所ノ地ニ到ラントスルニ大イニ時間ヲ費シ
終ニ期ニ後ルノ所以ノ者ハ全ク之ヲ以テノ故ナリ
此ニ又種々ノ事故アリテ此遠征ニ就テ從ヒ來レル外
國人ハ都督西郷ノ兵ニ伴ヒタリ思フニ此外國人等ハ
只見物人ノミニシテ戦争ニハ少シモ関係セルニハア
ラス余モ又彼等ト同シク此道ヲ取テ行ケリ是全ク五
月二十二日ニ於テ戦争シタル場所ヲ私カニ探索セシ

太
女
官

カ為メナリ本日八時以前ヨリ炎熱甚々嚴シク石路熱
シテ燒クカ如ク靴底ヲ徹シテ感セラレタリシカ幸ニ
シテ溪流數條アリテ假令之ハ困難ナシニハ渡リ難シ
ト雖モ元來ノ深サヨリ此時ハ二倍モ減少セルヲ以テ
甚々思慮ス可キニ足ラサルナリ余輩ハ屢々川流ヲ徒渡
リシ衣服ハ幾度トナク濕セシカ速カニ乾キテ再ヒ出
立スルヲ得ルモノハ實ニ樹陰ノ稀ナルカ為メナリ
大凡ソ琅瑯ノ地ハ樹木甚々稀疎トシテ只山岳ニ近キ
テ漸ク健康ヲ助クル草木ノアルヲ見ルノミ
凡ソ野蠻ノ國ニ於テ戰ヲ成サントスルニハ身成風体
ノ如何ニ拘ハルハ固ヨリ云フニ足ラサル所ナリト
我兵士ノ内往之ヲ然トスル者アリテ數里ヲ行ク
ノ後ハ各思々ノ打粉ヲ成セシカ蓋シ西洋ニ在テ然ラ

ハ大イニ世人ノ笑ヲ取ル可シジスケ村ニ到リ夫ヨ
リ總督ノ在ル所ニ到リシ時余ハ衣服ヲ着テ戰地ニ臨
マントシテ在リシヲ以テ大イニ總督ノ喜ヲ得タリ此
時余ノ有スル所ノモノハ唯薄スキ「バジヤマ」ノ一重ノ
ミニシテ麥藁帽子及ヒ傘草鞋トヲ携ヘ恰モ二規線地
方ヲ旅行スル人ノ如キ装ヒヲ成セリ余ハ先年日本ニ
在テ草鞋ノ用方ヲ覺ヘタリシカ久シク之ヲ用ヒサル
カ故ニ終ニ其用方ヲ忘レ極メテ無益ノ骨折リヲナシ
漸ク之ヲ靴ノ上ニ結ヒ付テ出テ行キケルニ或ハ濕メ
リ或ハ乾キ屢々乾濕交代スルヲ以テ自然ニ靴モ伸縮ノ
変アリテ其難苦實ニ譬フル物ナク加之尖石多クシテ
戰爭ノ未タ果サル内ニ靴ハ幾ント弊レタリキ日本兵
士ハ常ニ本國ニテ用フル所ノ脚半ヲ以テ膝ヨリ足踝

大
女
官

ニ至ルマテ之ヲ掩ヒ足ニハ軟厚ノ草鞋ヲ穿テ尚ホ用意トシテ教足ノ草鞋ヲ各腰ニ付ケテ出テ行キタリ斯クテ此村落ヲ圍ミ其境界ヲ成セル小山ノ近所ニ到リシ時土地ノ風景甚ク眼目ヲ娛マシムルニ足リ蓋シ霖雨ノ後ナルヲ以テ草木青緑ヲ着ケ一段ノ清興戰事ヲ忘却スルニ至レリ島ノ海岸ニハ草木至テ稀ナリト雖モ内地ハ林木意外ニ多ク漸々山路ヲ上ルニ從ヒ人ノ健康ヲ助クル灌木叢アリシカ其傍ヲ過キテ亦大イナル「バニヤン」樹數株アリシヲ以テ樹下ニ到テ暫ク休息シ此處ヨリ遙ニ山下ヲ見下スニ河岸ニ沿フテ楊柳系ヲ垂ルノ様アリ甚ク愛ス可ク斯ル景色ハ亦屢見ルコトヲ得難ク大抵此地ハ巖石多クシテ草木至テ稀ナリトス蓋シ樹木ノ最モ多キ處ハ石門ノ地及ヒ其近

傍ノ諸山ナリ

